
十一ミス研推理録 2 ~ 口無し ~

つるめぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一ミス研推理録2 ～口無し～

【Nコード】

N8921V

【作者名】

つるめぐみ

【あらすじ】

同時刻同現場で起きた殺人事件と飛び込み自殺。被害者は死亡、被疑者は意識不明、重要参考人は被疑者との関係を否認。その事件は関係者たちが語れない『口無し』事件だった。都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部の部長の東海林十一朗は、警視庁刑事部トップの刑事部長の一人息子。思わぬ展開で『口無し事件』と関係を持った十一朗は、部員と周りを取り巻く刑事達と共に事件の真相に迫っていく。【口無したちが隠す事件の真相と動機とは？】＋・ミス研推理録の第二弾となっています。第一弾のネタばれの要素もあり

ますので、ご了承の上で読みいただくと幸いです。

0・プロローグ

その日——戌の刻に降った僅かばかりの五月雨は、地上を潤すとともに汚染された空気を一気に浄化した。

予報通りに降ってやんだ雨に応え、さされていた傘が次々と畳まれていく。人の足が滴を跳ねる音と車が飛沫を上げる音が、自然界と人間界の混合曲を奏でる。

創作された小さな水の溜まりが、車の前照灯の光を反射させ、通行人と構築物を照らした。

その光を神秘的な光芒と捉えるか、怪奇的な妖光と捉えるのかは人それぞれだろう。

冬に創作された土壌が放つ腐葉の臭い——それを清々しい森の香りと喩える者もいる。

人にはそれぞれの感性が存在する。そして刻み込まれた本能も存在する。

街のネオンたちは眠りにつかないが、人が生物である以上、休息の時は必要となる。

都心の終電は遅い。しかし近隣住民の迷惑も考えられていて、轟音みなもとの源である電車は、日付が変わった頃にはとまる。

都会の喧騒から離れた場所なら、更に足が尽きるのが早い。うつかり終電を逃してしまえば、とんでもない交通費を払って帰宅するか、粗末な場所に厄介になるしかないだろう。

駅裏に存在する隠し居酒屋——

その中で新入社員歓迎会をしていた会社員一同も、終電が尽きることを理由に暖簾のれんをくぐって外に出た。

新入社員歓迎会といっても、彼らにとってはかたちだけのものだ。飲む口実に過ぎない。

二次会の話も出たが、一人の会社員男性は断った。長時間、電車を乗り継いでいかなければ帰れない場所に住んでいたからだ。

今、出なければ最寄り駅に繋がる終電には間に合わない。
会社員は、ほろ酔い状態のまま皆に別れを告げると、駅へと足を向けた。

雨が降ったのは彼にとっては幸運だった。冷やされた空気が酔いと火照りをさましてくれる。このまま駅構内に入ってしまったと、何が起きるのか本人も予想がつかない。

頭上に広がる夜空には、満月と星の煌めきがあった。数時間前には天上を覆い隠していた雲も、薫風の脅威に負けてしまったようだ。そこは会社員が数分前にいた場所と比較してしまえば別世界だ。人の気配もなく、時が止まったかのような静寂空間しかない。

ただ路面を叩く靴音だけが響き渡る。

しかし、会社員は急がなければいけない時刻だというのに足をとめた。

右手の路地から争うような声を聞いたのだ。それも尋常ではない怒号だ。

「てめえ、やりやがったな！」確かにそう聞こえた。

直後に男の唸り声と重いモノが倒れるような音が響く。

先に見てはいけけないものがあるのかもしれない。しかし、見ないわけにもいかない。

最悪の場面を想定しながらも、会社員は恐る恐る路地を覗き見た。そして会社員は見た。視線の先にある戦慄走る現場を――

血溜まりの中に、男が仰向けの状態で倒れていた。地面には刺された証拠ともとれるような、鮮血に濡れた刃物が転がったままであった。

刺された男に意識はあるのだろうか。夥しく出血している腹を押さえながら、荒い呼吸を繰り返している。すでに致死量近い出血をしているらしく、見開かれた瞳は天を眺め、蒼白の顔は生気が失われかけていた。

現場を直視した会社員は警察に通報しようと、懐に入れていた携帯電話を取り出そうとした。

しかし、途端に息をとめると、金縛りにあつたかのように動けなくなつてしまった。

足取り覚束ない状態おぼつかで、ふらふらと一人の男が向かってきたのだ。衝撃の現場を見てしまった上に、真正面から来る異様な影を纏つた男――

誰が見ても考えるだろう。こいつが犯人に違いない。では、唯一の目撃者である自分は、どうなつてしまふのか……口を封じられてしまつてはいないか。

ところが会社員の恐怖をあざ笑うかのように、犯人と思える男は素通りした。そのまま目的があるかのようにゆっくりと大通りに出て進んでいく。

会社員はあまりの恐怖で腰を抜かすと、犯人であろう男の動きを眺め続けた。

男が向かう先には、遮断機が降り始めた踏切がある。心臓の鼓動が発するリズムにも似た警告音と、血の色にも見える左右に点滅する赤色灯が、電車がくることを告げていた。

会社員は覚束ない足取りで向かう男を見て、まさかと感じ取った。慌てて立ち上がると、携帯をつかんでいるのも忘れて駆けつけた。

が、思い虚むなしく、遮断機を潜つた男は、線路上に足を踏み入れていた。

覚悟を決めたように目を閉じた男が、手に持っていた何かを後ろポケットに捻じ込む。

こつなつてしまえば、助けに行くのは無謀としか言いようがない。冷静に、そう判断した会社員は、踏切に設置されている非常ボタンを押した。直後に、異常を感じ取った電車が突っ込んでくる。

距離は百メートルもないだろう。鼓膜を激しく揺らす警笛音と、心臓が潰れそうなブレーキ音を立てながら、電車は男に迫っていく。微かな願いは叶わず、無常にも電車は男を呑みこんだ。それでも急停車の残響をレール上に置きながら、数十メートル先まで進んでいく。完全に停車するまでの時間は、数刻ほどだったろう。

しかし、目撃者である会社員は、新説の特殊相対性理論をも打ち立てるかのような、数百倍もの時間の歪みを感じていた。

一分後には先程の騒ぎが嘘のように、踏切の音だけが響く時間が訪れた。

間近にある駅構内から、『只今、電車が急停止しました』という放送が流れ、現場までとどいた。

先頭車両にいた乗客の何人かは、衝撃の瞬間を目撃したに違いない。手で口を覆い隠す女性や、状況を確認しようと窓にへばり付く者の姿があった。

すぐに電車に呑みこまれた男の安否を確認しようと、運転手と車掌が駆け降りてくる。

電車前方に付いた血痕が、凄惨な現場を物語っていた。誰もが男は死んだと思った。

しかし――

「おい、まだ息をしているぞ。救急車！」

電車の隙間に挟みこまれるように倒れ伏している男を、確認した運転手が声を上げる。車掌は慌てて携帯電話を取り出すと、無線連絡もするために車掌室に戻ろうとした。

現場は戦場となった。運転手は下にいる男に向かって声をかけ続けている。

その一部始終を見て呆然としていた会社員も我に返ると、携帯電話を手に叫んだ。

「車掌さん。救急車は二台呼んでくれ！ あっちの路地で大怪我している人もいる」

車掌は足をとめて会社員を見た。

「二人？」

状況を把握できないまま問い返す。

同時刻、同現場で起きた殺人事件と自殺未遂――

殺人事件は閑静な住宅街の住民たちを恐怖に陥れ、飛び込み自殺は帰宅時間に追われた乗客数万の足に影響した。

遠くでは、警察車両のサイレンが鳴っているのが聞こえていた。

1・都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部

都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部の部室は、校舎別館の最上階、階段を上がった突き当たりが存在する。

別館の最上階には、一クラスに相当する数のパソコンが置かれている教室や、映写機を設置している教室が並んでいる。特別教室とされる授業の場が並んでいるので、通常の時間帯には、ほとんどの生徒が立ち寄らない。

だから、ミステリー研究部の部員たちは静かな場を求めて昼食は必ずここに食べにくる。

父親が警視庁刑事部トップの刑事部長であり、ミステリー研究部の部長でもある東海林しやうじ十一朗いちろうも例外なくここに来る。幼馴染みの三島裕貴しまゆきも当然というように付いてくる。

オマケという失礼だが、部員の氷川零ひかわれい、通称ワックスも購買パン片手に駆けつける。

現在のところ、部員は三名。全員が三年生で来年は卒業、ミステリー研究部廃部という事態に直面している。

いや、それ以前に部室の確保が危うい。部室は五人以上いなければ与えられないのが、学校の決まりだ。ミス研部員にとっての憩いの場のピンチである。

しかし、その憩いの場の状況は、この一か月間で一変して戦場に近い様さまになっていた。

「だから、言ってるだろ東海林。俺達が入部してやるって言ってるんだって。ありがたく恩を受けるよ!」

前は誰も訪れなかった空間に、今は昼休みともなると数十人の生徒が大挙して押しかける。それは放課後でも変わらない。

数十人の生徒はそれぞれがある『野望』を片手に、一か月前には興味も示さなかったこの場所に訪れているのだ。

十一朗は母の作った特製弁当のアスパラベーコン巻そしゃくきを咀嚼し終

えると、席を立った。

そして数十人の生徒たちの前に進み出て、全員の顔を反芻するように繰り返し見る。

「恩を売ろうとしているみたいだけど、その好意なら受けないよ。校長が俺達の卒業までは部屋を貸すと言ってくれてる。あと、みんなの入部理由は？ 全員が二、三年生みたいだけど、前の部はどうしたんだよ？ 退部したのか？」

十一郎の質問に全員が顔を見合わせて口ごもった。明らかに裏がある行動だ。

それが、一か月前までは来なかったのに、今になって訪れる理由である。

「そいつ等の考えることなんて、単純明快すぎて推理にもなんねえよ」

声を上げたのは部員の一人であるワックスだ。絶対に乱れないように固めた、自慢の髪形を整えながら、購買では売り切れ必至、希少価値とされる焼きそばパンを口にくわえて、十一郎の隣に立つ。

「どーせ、ミス研の名誉ある褒賞のお零れを頂戴したくて来たんだろ？」

嫌味っぽく言うワックスの口調に逆切れしたのか、先頭にいた生徒が食ってかかった。

「うるせえ、お前と交渉はしてねえよ。お前だって人のこと言えないだろ。推理とは名ばかりのオマケだもん。久保の菓子に釣られて入部したって聞いたぜ！」

ワックスが眉間に皺を寄せた。殴る数秒前だ。しかし、十一郎はワックスが拳を引いた瞬間に、二人の間に割って入った。二人が十一郎の行動に目を丸くする。

十一郎はそんな二人の反応に構わず、罵倒を浴びせてきた生徒の胸倉を勢いよくつかみ上げると、殺意のこもった目で睨みつけた。一触即発の場面に、その場にいた全員が息を呑む。

「うちの部員を馬鹿にするなら帰れ……ここにはお前の居場所はない」

い」

いつもとは違う十一朗の雰囲気、ワックスのほうがり退いた。周りにいた生徒たちも波が引くように、距離を保ちながら状況経過を見守っている。

全員の反応を一瞥した十一朗は、つかんでいた生徒の胸倉を乱暴に放した。押し出された勢いで体勢を崩した生徒は、後ろにいた者たちに寄りかかる。

絶対に言い負けないという自信があったのだろう。胸倉をつかまれた生徒はズタズタに引き裂かれたプライドを返上するかのよう

に、怒りで充血した眼を十一朗に向けていた。
そんな生徒を前にしても十一朗は退かなかった。十一朗にとってミス研部員は友達や仲間以上の存在なのだ。心の友を愚弄された怒りは、謝罪だけでは収まらない。

「ミス研部員に必要な能力を知っているか？ 観察眼だ。ここにいて誰が何組でここに何回来ているのか、どの部に所属していたのか、全て俺の頭の中にある」

十一朗は再び、来ている生徒全員の顔を見た。中には慌てて顔を隠す者もいる。途中で退部した理由がミス研のお零れ褒賞を欲しいからなどということでは、クラスの笑い者になりかねないからだ。

更に十一朗は、この歓迎されない客人たちを追り返す策を巡らせながら口を開いた。

「だけど、どうしてもという奴がいるなら入れてやってもいい。けど、今から出す問題を解けたらだ」

十一朗の言葉にワックスのほうがり「問題？」と声を裏返して息を呑んだ。

「警視庁と警察庁の違いは？」

十一朗の問題に答えられない生徒が、相手が悪いと感じたのか、一人、また一人と去っていく。

それでもこの問題に立ち向かおうと一人の生徒が「警視庁のほうが警察庁より偉い」と答えた。これを聞いたワックスが愉快そうに

笑う。

「答えになってねーし、間違ってるし。違いは警察庁が国の行政機関の一つで、警視庁は都の公安委員下の機関、そして警察で一番偉い地位にあるのは警察庁長官」

さらりと答えたワックスを見て、部室内にいた裕貴のほうが「嘘……」と呟いた。

呟いた裕貴を十一朗とワックスは同時に振り返って見た。すると裕貴が慌てて手を振る。

「知らなかったってわけじゃないわよ。ワックスが答えられたのが意外だったってだけ」

——多分、知らなかったのだろう。というよりも、あの生徒の答えが正解と思っていたに違いない。

十一朗は息をつくとき、残った他の生徒たちを見た。

「本気でミス研に入部したいのなら、それなりの興味をもって来てくれなきゃ困る。それに、あの事件があつて、まだ一か月だ。俺が何を言っているのかは、もう分かるよな？」

十一朗の見えない言葉の刃に切りつけられて、生徒たちは負けを認めて姿を消した。

これではばらくは、騒ぎも収まることだろう。

部室に戻って席に座った十一朗が、探偵ものの小説を読み始めると、ワックスが隣の席に座ってから言った。

「ありがとな、プラマイ」

思いがけないワックスの言葉に、十一朗は顔を上げた。ちなみにプラマイは十一朗の名前を文字ったあだ名だ。幼馴染みの裕貴もそう呼ぶ。

「何が？」

ワックスがお礼を言ってきた意味がよく分からなくて、十一朗は応えずに聞いた。

「かー……惚けんなよ。あいつの胸倉つかんですごんでくれたろ。お前さ、俺に対してそっけない時があるから、そんなに俺のこと気

にしてくれてないのかなと思っていたんだよな。だから、意外な面を見たと思つてさ。嬉しかった。感謝してるよ」

予想外のお礼に十一朗は困惑した。向かいの席にいる裕貴が含み笑いを浮かべている。

「正直じゃないもんね。プラマイは……だけどねワックス。プラマイはみんなのことを気遣つてくれてるよ。あの時だつて……」

一か月前に発生した公開自殺——その裏に自殺屋がいる。ミス研部の一員だった久保京子くぼきょうこは、いち早くその陰を捉えて自殺屋に近づいた。

だが、事件に深く立ち入ってしまったために、自殺屋の手にかかつて命を落とした。その自殺屋の正体をつかんで自首に追いこんだのが他でもない十一朗だ。

事件が解決したのは一か月前。その真相は多く語られていないはずなのだが、噂とは怖いもので、どこからか話がもれて広がった。

だから、自殺屋事件を解決したミス研部の一員——という称号が欲しくて、何人もの入部希望者が殺到しているのだ。

「別に俺は……あいつが平気で殺された久保のことを言つたから腹が立つただけだよ。それに、同じ思いを共有する仲間は、今の段階なら俺達だけで構わない。違うか？」

ワックスが裕貴の近くに寄つていって、「今のは本心？」と質問していた。裕貴は「半分本心、半分照れ隠し」と答えた。

二人は隠れて話したつもりだろうが、その内容は十一朗にもすっかり聞こえている。

「あのさ、どうでもいいから早く昼飯食べよ。休憩時間終わっちゃうぞ」

二人が時計を見て「やべっ」「ほんとだ」と慌てて、残ったものを口に放り込んだ。

残り時間五分。そろそろ教室に戻つておいたほうがいいだろうと思つた時だった。部室の前に立つ、一つの影に気づいた。

先程、訪れていた生徒たちとは、全く違う印象を放つ女子生徒だ。

一直線でこちらを見る純真な眼差しは、ミス研の称号が欲しくて訪れたというようには見えない。

それに、学年を示す名札に付いた印の色は一年生に間違いない。本当の新人部員だ。

その女子生徒を見たワックスが、今にも転ぶのではないかという勢いで駆け寄った。

「君、一年生？ クラス何組？ 名前は？ ああ、俺の名前は氷川零。通称ワックス。入部手続きなら奥にいる部長にだけど、一応聞いてく。彼氏いる？」

マシガンのように繰り出されるワックスの質問に、実直に答えようとしていた女子生徒だが、もはやついてこれない状況に陥っている。

ようやく質問が中断しても、女子生徒はどれを先に答えればいいのか困惑していた。

目をキラキラ輝かせたワックスは、尚も答えを迫る体勢で彼女に迫っていく。

「よせよ。引いてるだろ」

その様子に我慢しきれなくなった十一朗は、読んでいた推理小説の表紙でワックスの頭に突っ込んだ。反応は予想通りというか、頭を抱えながらばやいている。

ようやく女子生徒は話を切り出す間を感じ取ったのか、一枚の紙を取り出すと、十一朗に差し出してきた。

紙には学年とクラス、氏名が書いてある。一番上の欄には『私はミステリー研究部に入部します』という宣言が書き込まれていた。

正式な入部届けに間違いない。

「一のA……^{やぎ あやか}八木綾花さんか」

十一朗が確認したと同時に、綾花は「あ のっ」と声を上げた。

「刑事ドラマが好きで、よく見るんですけど……その程度の知識では入部できないでしょうか？」

先程の言い争いを見ていたのだろう。自分も問題に答えなければ

いけないと思っっているのかもしれない。

部室の奥で裕貴が「いいんじゃない。女の子大歓迎だよ」と声を上げた。

とはいえ、彼女の知識がどれほどのものなのか、十一朗は興味を持った。

「じゃあ、入部できないは別にして、問題に答えて……警察官の階級を下から順に言ってみて」

不意に綾花が真剣な表情になった。

これは勘で答えられるような問題ではない。知識がなければ解けない問題だ。刑事ドラマが好き——彼女の話が嘘か本当か、十一朗は試したつもりだった。

「巡查、巡查部長、警部補、警部、警視、警視正、警視長、警視監、警視総監、警察庁長官……です」

指折り数えるように綾花は答えていく。一つにつき答える間はあったが、間違いはなかった。それ以上に彼女の知識の高さに感心した。十一朗は更に綾花を試した。

「巡查長を入れなかったみたいだけど、理由は？」

「えっと……階級じゃなくて職位だからです。確か階級としては巡查だと思ったので」

迷わずに答えた綾花を祝福するかのように、裕貴とワックスが拍手した。

一年生っぽい幼い笑みを浮かべた綾花が、顔を紅潮させながら「ありがとうございます」と頭を下げた。

「完璧じゃん、文句無し。あいつらと比べたら雲泥の差だって。知識も外見も」

ワックスの褒め言葉に、もう一度、綾花は「ありがとうございます」と頭を下げた。

これだけの知識を見せつけられ、他の部員に歓迎されているのなら、認めないわけにはいかない。

「うん、合格。入部の手続きをとるよ。活動時間は放課後から……」

終了時間はまちまちだけど、始まって二時間くらいかな。まあ、暗くなるまでは帰れるよ」

「はい、よろしく願います」

こちらが気持ち良くなるくらいにの礼儀正しさを見せて、綾花は教室に戻っていった。

曲がる途中の角で、もう一回振り返るとお辞儀をする。

その様子をワックスが、鼻の下を伸ばしながら眺めていた。

「可愛いなー。一年生にもあんな子いるのなあ……亭主を支えて、家事に努める大和撫子って感じ？」

「亭主って！ 話、飛躍しすぎだろ。一年生だぞ」

ワックスの妄想癖に呆れながらも、十一朗は声を裏返して叫んでしまった。どうやら恋人第一号に認定してしまったらしい。

「放課後が楽しみだなあ……あのさ、プラマイ。刑事部長の息子としての推理はどうよ？ あの子、彼氏いそう？俺と彼女は脈あり？」

もはや、今のワックスに突っ込みは意味をなさない。

十一朗は全員出たのを見て、部室の鍵を閉めると、「自分の未来は自分でプロット書きしろよ」とだけ答えた。

2・事件発生

放課後——十一朗と裕貴が部室に入った時には、既にワックスの姿があった。

いつもは散らかっているワックス専用の席が、今日は綺麗に片付けられている。

そして、隣の席も同じように片付けられ、どこから用意してきたのか『八木綾花』と書かれたネームプレートが置いてあった。黒板には色とりどりのチョークで『新入部員、八木綾花ちゃん。大歓迎！』と書かれている。

こんなことを突っ込むのもなんだし……と思った十一朗は、敢えて見ないふりをして席に座った。

しかし、裕貴の方かというと何か言いたそうに体を動かすと、突然、机を両手で思いつき叩く。空気が震えるような轟音が室内に響き渡った。

そんな裕貴の剣幕を見て、十一朗とワックスはそのままの体勢で凍りついてしまう。

はしやぎすぎた……雷が落ちるに違いない。ワックスはそう感じて殴られるのを覚悟したのだろうか。既に目を閉じながら構えている。

ところが、

「ねえ、今日歓迎会やらない？ 八木さん呼んで、近くの喫茶店でさ……当然、代金は私達もち！」

逆鱗に触れたところか、妙な先輩ぶりを発揮させてしまったらしい。

裕貴は興奮して、「我ながら、いいアイデア」と自分を称賛した。更に手を叩き合って、意気投合する裕貴とワックスを見ながら、十一朗は話を切り出した。

「まあ、案はいいだろうけど……一日目でそこまでの歓迎をされた

ら逆に困るんじゃないか？ 徐々に打ち解けあってから、そこで歓迎会が普通だろ？」

十一郎の冷静な判断に、裕貴は納得したように「そうかあ」と答え、ワックスはというと、

「そうだよな。初めは友達から……そこから恋人っていうのが順序だよな」

と、再び理解不能な飛躍妄想癖を発揮した。

十一郎は呆れて、もう突っ込むのをやめた。新刊の推理小説を開いて読み始める。

そこに、軽快な足音が近づいてきて部室の前でとまった。しかも、律儀に扉を二回叩く。

「開いてるよ」

新人生の登場にそわそわしているワックスを無視して、十一郎は声を上げた。

「失礼します」

言って綾花は入ってきた。手にはノートと筆記用具、警察関連本を数冊持っている。

それを見た十一郎は、思わず笑ってしまった。

「本当に警察関連のものが好きなんだな……」

「はい、東海林先輩が刑事部長さんの息子さんだなんて、私の憧れです」

意識しないで綾花は言ったのだろう。まず裕貴とワックスが息を呑んだ。続いて十一郎も動きをとめた。

十一郎は開いていた推理小説にしおりを入れて閉じると、綾花を見る。

「知っていたのか……」

押し殺したように呟いた言葉に、綾花が困惑した表情を見せた。

裕貴もワックスも、事ことの成り行きを見守っている。

刑事部長の息子——十一郎は父のお蔭で得た、その肩書きを好んではない。

だから、高校を卒業してからの進路は、大学で法律関係を学んだあとに決めると、漠然としたかたちのまま担任に伝えていた。

それを裕貴は知っている。ワックスも知っている。

綾花が十一郎の触れてはいけない部分を、一突きしてしまったということも。

先程までの賑やかな部室が静寂に包まれ、時計の秒針の音だけが室内に響いた。

皆が話し出すタイミングを窺っている。その状態が居た堪れなくなつて、逆に十一郎から話題を切り出した。

「そんなに警察関連が好きならさ……警視庁の見学ができるか、親父に聞いてみるよ」

緊張で凍り付いた空気が一瞬にして、融解するかのよう流れ去っていく。

ワックスが「どうしていいか、分かんなかったよ」と安堵の息をついてからばやいた。

まだ動けない綾花に裕貴が寄って行くと、彼女が持っている警察関連本を開いて笑った。

「見てプラマイ、すごいよこの本。蛍光ペンで重要なところ印してある」

裕貴が開いて見せた本は、確かに数色の蛍光ペンで綺麗にチェックしてあった。ただ好きというだけではここまでしないだろう。

綾花もようやく安心したのか笑顔を見せて、また「ありがとうございます」と言った。

その時だ。綾花の携帯が鳴った。面白いことに流れた着信メロデューは、最近視聴率が上位の刑事ドラマのオープニングだ。

「御免なさい。出ます」

皆の視線を気にしながら、綾花は携帯電話を取り出すと、相手に返事をした。

直後に、相手が何か話したのだろう。綾花の顔が一瞬で蒼白になつていった。

「えっ、警察？ はい……間違いないです。電車に？」

綾花は唇と声を震わせたかと思うと、電話を持つ気力すら失ったかのように視線を虚空に固定させたまま、その場に座り込んだ。誰が見ても正常な精神状態ではないと分かる。綾花の変わりように、隣にいた裕貴が気を遣って肩を抱いた。

電話を切った後も、綾花は体を震わせたまま動けない。

「どうしたの？ 私達にできることなら、何でも協力するから話して」

綾花の思考回路を混乱させないようにだろう。裕貴は優しい口調で綾花に聞いていた。

「電車に飛び込み自殺したって……」

綾花の衝撃の告白に、十一朗とワックスは顔を見合わせた。

部活動の最中に、警察から伝えられた飛び込み自殺発生という驚きの報告――

まるで部員全員の混乱を具現化するかのように、授業終了から一時間がたったと知らせる鐘が、校舎内に喚声のように響き渡っていた。

3・謎の男

数刻経過しても、綾花の状態は変わらなかった。

目の焦点は定まらず、言葉をかけても反応を示さない。肉体から魂が切り離されてしまったのではないかと思えるほど、意識が閉ざされた状態になっていた。

「大丈夫？ 立てる？」

裕貴の声は聞こえたのだろう。顔を上げた綾花が自力で立ち上がろうとする。

しかし、彼女の意思を裏切ったように膝が折れた。裕貴が慌てて転倒しそうになった綾花を補助する。

これでは次の行動に踏み出せない。

そう判断した十一朗は、買ったばかりの携帯電話を使って、タクシーを頼んだ。

深刻な状態の綾花を一人で行かせるわけにもいかないので、ミス研部員全員が同行する。

着いたタクシーに乗車しながら「明鏡止水総合病院へ」と十一朗が伝えると、タクシー運転手は目を細めた。

顔面蒼白の少女に付き添う高校生数人が総合病院へ——頼まれたら誰でも、少女の身に不幸が起きたのだと感づくだろう。

運転手は重い空気を感じ取ったのか、一言も話しかけてはこなかった。交わしたのは運賃を払った時だけだ。

「ありがとうございます。お大事に……」

そんな運転手の言葉も綾花は聞こえていなかっただろう。車を降りた途端に倒れかけた。それを見た運転手が、慌てて車を降りて駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか。途中まで肩をお貸ししましょうか」

サービス精神に溢れた大人の対応だ。ありがたい言葉ではあったが、裕貴が肩を貸したのを見て十一朗は断った。

綾花を宥めながら裕貴は入口のほうに歩いて行く。その時、十一朗は視線の先に妙なを見つけ、立ち止まった。

黒い車が一台停まっている。妙だと感じたのは無線アンテナがあることだ。

覆面パトカーに違いない。しかも、内装をどこかで見たような気がする。気のせいかもしれないと十一朗は思っ、裕貴の後に続いた。

十一朗の後にワックスがつくようなかたちで、ミス研一同は進む。受け付け前で裕貴が十一朗に目配せした。どこに運ばれたか聞いてくれということだろう。綾花に肩を貸した状態で聞けば、更に動揺してしまうかもしれないと感じての配慮だ。

十一朗はワックスと一緒に受け付けに近づいて、案内係に聞いた。「あの……先程、電車で轢かれたという男性が運ばれてきたはずなんですけど」

案内係の女性は一瞬、顔を強張^{こわば}らせた。無理もない。自殺しようとする関係者がきたとなれば、感情も表に出るだろう。

そう、ここは病院だ。誰もが怪我を治し、健康になろうと訪れる命を断とうとした人間がくるのは、場違いとしか言いようがない。

案内係はノートを出すとページを捲り、十一朗にペンを差し出した。

「関係者の方ですね。では、一応ここにサインを。場所は三階ですね」

綾花がサインできそうにないので、十一朗は自分の名前と全員の人数を書いた。

すぐに裕貴と綾花のところに行って場所を伝える。エレベーターに乗って三階に着くまで、誰も口を開かなかった。

三階に到着した音をエレベーターが告げる。まず裕貴と綾花が先に降りて、十一朗、ワックスと続いた。

その時だ。右手側から「うおっ」という妙な声が上がった。

声の根源に目を向けると、黒スーツ姿の男が二人立っていた。

十一朗も裕貴もワックスも知った顔だった。警視庁捜査一課の刑事、貫野と文目だ。

彼らを見た瞬間、十一朗は頭を抱えた。貫野はというと、苦虫を噛み潰したような顔をしてこちらを見ている。

思いがけない場の思いがけない再会に、貫野たちを知らない綾花だけが反応を示さない。

「プラマイ、私、先に八木さんを病室に連れていくね。だからここはお願い」

貫野と文目にお辞儀をしてから通り過ぎた裕貴は、綾花を連れて病室へと入っていった。

一呼吸時間を置いて貫野は深い息をつく、十一朗に向かって歩み寄ってきた。心境はかなり複雑そう、頭を掻きながら口を開く。十一朗も同時に口を開いた。

「何でここに居るんだよ？」

同じ言葉が違う口から出て重なった。貫野の部下の文目が目を細めて困惑の表情を浮かべた。

十一朗が貫野と文目と出会ったのは、公開自殺事件だった。犯人を突き止めるという互いの想いが一致し、行動を共にした仲である。

しかし、関係はというと仲間というよりも腐れ縁と喻えたほうがいい。

十一朗の推理力に貫野は競争心を持っているし、十一朗は貫野の口調が気に入らない。

協力して自殺屋を自首させた仲ではあるが、何故かまだギクシャクしていたりするのだ。

言葉が重なったので、互いに相手の出方を窺う。すると貫野が先に口を開いた。

「藪^{やぶ}から坊主^{やぶ}が出やがった……何だよ、お前ら。あの電話に出た子の関係者か何かか？」

綾花に電話連絡したのは、どうやら貫野だったようだ。

そういえば——と、十一朗は思い出す。病院の前に停めてあった覆面パトカーは他でもない。この二人組のものだ。内装を見た気がしたのも気のせいではなかった。

「ミス研に今日入部した子、新入生だよ。名前は八木綾花」

十一朗の説明を聞いた文目が手帳を取り出すと、メモを取り始めた。理解できない行動に、十一朗は不快感を覚えた。

「何でメモ取るんだよ？ と、というか何でここにあんたたちが居るんだ？ 自殺だろ？」

電車に飛び込んで自殺未遂——普通なら病室に刑事はいない。現場検証や目撃者に事故当時の状況を聞いて終わりのはずだ。事情聴取をするにしても自殺未遂した当人は意識がなく、とても話を聞ける状態とは思えない。疑問が残った。

十一朗の質問に、貫野が「答えねえわけにはいかないよな」と言っ
て、文目を見る。

文目も「そうですね」と手帳を手にしたまま同意した。

「目が覚めて、逃げられでもしたら困るから……俺達は張り込み
つてわけだ。同時に事情聴取して、自供させなきゃならねえ」

「自供って？」

思わず十一朗は声を裏返して叫んだ。隣にいるワックスも状況を
呑み込めずに瞬きを、これでもかというくらい繰り返している。

十一朗は息を呑んだ。貫野の一連の説明で、徐々に意味が理解で
きてきたからだ。

「何か、やったのか？ あの人」

もはやそこに、安穩とした空気は一片もない。張り詰めた空気だ
けが存在する。

「ほんとにお前は憎たらしいガキのくせに、呑みこみが早くて楽だ
な……殺しだよ。奴の左後ろポケットから遺書が見つかった。『私
が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』ってな
相手の左後頭部を鉄パイプで殴った後、鋭利な刃物で腹に一回、最
後に倒れこんだところでグサリだ……致命傷は最後の一突きで、傷

は心臓の大動脈にまで達していた。まっ、殺意は十分だし、それで観念して自殺決めこんだんだろ」

都合よく貫野は遺書を持っていたのか、証拠品袋に入った証拠を見せびらかすように十一朗に見せる。

確かに紙には貫野が言った通り、『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』と書いてあった。遺書は書類のような紙ではなく、何かを切り取ったような粗末なものだ。しかも、奇麗に折り畳まれたというよりも、潰したような皺が残っていた。

取り扱いは乱雑だったのではないだろうか――

そして、右上の文字の一部が擦れて欠落していた。

身を乗り出すように見定めた十一朗を見て、貫野が慌てて遺書を懷に隠す。

「くっそ、この野郎。また変な癖見せやがったな……もう何も教えてやんねー」

いい年した大人が絶対言わないような、子供じみた口調で言う。十一朗は反応に構わず目を細めながら、遺書を入れた貫野の懷を見つめた。

「それって、本当に遺書？」

十一朗に問いかけに、貫野はあからさまに面倒臭そうな息をつくと睨みつけてきた。

「お前な。電車に飛びこむ瞬間を見た目撃者が、奴が何かをポケットに入れたと言っている。だから誰かが画策したとかはねーよ。真正銘の遺書だ」

「ふーん……」

はつきりしない十一朗に貫野は痺れを切らしたのか、落ち着きなく体を揺すった。

そして、禁じ手と自分で踏んでいたはずであろう疑問を、十一朗にぶつけてくる。

「何か、引つかかってんのか？ 聞いてやるから言ってみろ」

貫野の言葉を聞いて、後ろにいた文目が吹き出した。貫野は振り

返らずに、後ろ蹴りを文目に食らわせる。

「いや、どう考えても変でしょ……あと気になることがあるから確認に行く」

十一朗は、貫野と文目がじゃれているのを無視して、病室の中に入った。

貫野と文目、ワックスも慌ててついてくる。何が『変』なのか知りたいようだ。

しばらく時間を置いたのが幸いしたのか、綾花は落ち着いていた。顔色は正常になっているが、まだ瞼は腫れていた。

十一朗は意識のない男の左側にしゃがみ込んだ。そして男の左手を取る。綾花と裕貴は十一朗が何を始めたのかというように、不思議そうに見つめていた。

「やっぱりそうだ……貫野刑事、これが証拠。左手の小指に黒いインクが付いてる」

「証拠だあ？ 何の？」

貫野は十一朗と同じように、男の小指に付いている黒いインクを確認する。

が、意味は理解していないようで、頭を乱暴に掻きながら立ち上がった。

そんな貫野たちを促すように、十一朗は病室の外を指差す。

「じゃあ、説明するよ。取り敢えず病室から出て。それと文目刑事、さっきのメモの紙とペン貸して」

病室から出た十一朗は文目に手を出しながら頼んだ。刑事部長の息子という権限があるからか、貫野が睨みつけたからか、文目は手帳の紙を破るとペンと一緒に十一朗に渡す。

文目が手渡してきた物を受け取った十一朗は、懽然とした表情でいる貫野に差し出した。

「今から実践するよ。犯人は相手の左後頭部を鉄パイプで殴打……貫野刑事、犯人役を普通にやってみてよ。被害者の代理は文目さんに任せるからさ」

十一朗の指示に貫野は「ああっ？」と声を荒らげた。すぐに舌を鳴らして反論する。

「なんで俺が……それにお前が言いたいことは大体分かるよ。相手の左後頭部を殴打。つまり犯人は左利き。そう言いたいんだろう？」さすがにこれは貫野も気づいたらしい。凶器が絡んだ殺傷事件が起きた場合、切りつけられた方向で犯人の利き腕を判断することが多い。それは基本といってもいい。

犯人が右利きで正面から切りつけた場合は、傷は被害者から見て左上から右下の斜線状になる。左利きならその逆だ。それは棒を使つての攻撃も変わらない。

相手の背後から襲いかかり、左後頭部を殴打したのなら犯人は左利きだ。

「遺書を書いた時、インクは乾いていなかったはずだ。証拠に遺書の文字が擦れていて、あの人の左小指に付いていた。つまり、その場で慌てて書いたつてこと。相手を刺し殺して、すぐに遺書を書き、逃げきれないと踏んで電車に飛び込んだ……」

そこで十一朗は一段落おいた。一気に話すと整理できないだろうと思つたためだ。

「それで、文字が擦れていた遺書を見て、奴の手を確認しやがつたのか」

貫野は先程の十一朗の行動を語ると、腹立たしそうに齒噛みした。

「はい、犯人は左利き。その場で遺書を書きながら歩いてよ。あつちが踏切」

実践しろと言われた貫野は、その代理を無理やり文目に押しつけた。

変にプライドの高いこの男は、犯罪者であり自殺した男の真似を自分がするのが許せないらしい。

嫌そうな顔をする文目を相手に、貫野が「行け」と言うように目配せで合図した。

「何で僕が……」文目はそう言いながら、渋々歩き始めた。犯人は

左利き——実践なので左手にペン、右手に紙切れを持ちながら、文目は文字を書き込んでいく。

左利きではない文目は遺書を書くのに苦戦していたが、十一郎が踏切と指差した通路の突き当たり近くまで進むと、動きをとめた。書き終えたけど……というような素振りを見せて振り返る。

「書けたなら、前の話を踏まえて動いてみてよ。左小指に書いた遺書の右上のインクを付けて、遺書を握り潰してから、左後ろポケットに入れる」

十一郎の指示に貫野がまず気づいて「そうか」と叫んだ。文目もどうすればいいのかわからずに四苦八苦している。

そう、どう考えても左利きでは一連の作業がうまく出来ないのだから、右利きなら、容易にこの作業を完了できる。

「奴は右利きか。で、殴った奴は左利き……どうなってるんだ？」

証拠はある。『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』という遺書が——ところが、遺書を書いた本人と相手を殴った者の利き腕が違う。

「あーっ、くそっ。また掻き回してくれやがって……どうやら高校生名探偵殿は、相当、俺達に仕事を与えたいらしいな」

自らの頭を乱暴に掻き回した貫野は、重い息をついた。手は煙草を探そうとしているが、ここは病院内だ。禁煙だと気づいたのか手を下ろした。

その時、病室から裕貴と綾花が出てきた。

先程見せていた動揺が嘘のように、綾花は落ち着いていた。自力で歩き、流していた涙も腫れていた瞼も感じさせないほど、冷淡な表情に変わっていた。

綾花の様子を見て十一郎は矛盾した印象を持った。変わりすぎているのだ。天使が悪魔になったのか、今鳴いたカラスがもう笑ったのか——

貫野も不審感を抱いたのだろう。意識してなのか、真正面から話しかけるのではなく、綾花を横目で睨むように話し始めた。

「電車に飛び込み自殺して、大した怪我もなく生きているんなら奇跡だな。どうやら頭を打って倒れこんだらしい……うまいこと線路の真ん中に倒れこんで、電車と地面の隙間に挟まれた。気絶したから助かったようなもんだ。そこで変な動きをしたらお陀仏だった」言葉を選んで貫野は話したのだろうが、相変わらず口調は荒い。しかし、綾花は説明を真剣に聞いていないように見えた。

本題に入るつもりなのだろう。貫野が大きく息を吸う。

「で、隠す必要もないから、単刀直入に聞かせてもらおう。奴の名前と住所を教えてくれ。身分証も持ってないし、前歴もないみたいで困ってたんだよ」

貫野の質問に綾花は顔を上げると、首を大きく横に振った。

「言えないってのか？ 隠すと警察行くことになるぞ」

貫野の忠告に、また綾花は首を横に振る。そして、皆が耳を疑うことを告げた。

「知らないんです。私はあの人を知らない……一体、誰なんですか？」

全員が顔を見合わせた。

『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』の遺書を残した謎の男。

そして、利き腕違いの謎――

謎の男と接点がないはずの新生八木綾花に伝えられた、自殺未遂事件――

今回の事件も簡単には終わらない。

場にいる全員が難事件になると確信した中、文目が困ったような声を上げながら、掌に握っていた紙を後ろポケットに押し込んだ。

部下の妙な動きが気になったのか、貫野が文目の腕をつかんで紙を取り出す。文目は変な抵抗をしたが、貫野の権力には及ばなかった。

取り出された紙は、自殺未遂をした男の行動を実践した文目の遺書とされるものだ。

貫野は文目が書いた遺書を開いた。十一朗も気になって覗きこむ。すると、そこには

『上司との付き合いで疲れました』という妙に現実的な内容が記されていた。

十一朗が、これ絶対に殴られるなと確信したと同時に、貫野の渾身の右手刀が文目の脳天に叩きこまれていた。

4・追撃

飛び込み自殺をした男を知らない。

綾花は質問とも思えるような発言を終えると、口ごもってしまった。男の素性を本当に知らないのか。それとも隠したいだけなのか。その胸中は口を閉ざしている本人しか捉え切れないものであると同時に、追及して吐かせないことには分かり得ないものだ。

相手は高校一年生の女子。無理に聴取するのは、貫野も気が引けるのだろう。

貫野は手袋をはめた手で袋に入った紙を慎重に取り出すと、綾花の前に突き出した。

「分かるか？ この紙には数字が書かれていた。これが電話番号だと気づいてかけたら、あんたの携帯に繋がった。で、ここに呼び出したってわけだ」

貫野の説明が終わるまで、綾花は視線を床に落とし続けていた。裕貴が促すように綾花の耳元で小さく囁く。

「大丈夫。信頼できる刑事さんだから、知っていることは全部教えてあげて」

横にいた十一郎には、はっきりと裕貴の声が聞き取れた。貫野には聞こえたのだろうか。何の反応も見せていないので聞こえていないのだろう。

しかし、優しく促されても綾花は首を横に振った。

男を知らないというのは、事実なのかもしれない。

十一郎は確信した。これ以上聞いても彼女は何も話せないのだろう。

「分かった。じゃあ、もう何も聞かないよ」

十一郎の言葉を聞いて、貫野が「おいおい」と割り込んできた。

『また刑事面して、事件に首突っ込んでくれる気かよ……』それが貫野の言い分に違いない。

「知らないって言っているんだから、もう聞くなよ。時には紳士的に行動しないと、貫野刑事、いつまでたっても結婚できないぞ」

十一郎の戒めに貫野はこめかみを引き攣らせ、ほぼ同時に文目が腹を抱えて笑った。

静寂包む病院内なので、少しでも声が大きければ非常に目立つ。

患者の検診時刻なのか、病室から出入りを繰り返していた看護師が、鬼の形相でこちらを睨みつけていた。

部下の失態で恥をかいたのと、凶星を刺されたのが相当気に入らなかつたのだろう。

貫野は積もり積もった十一郎への怒りを発散させるかのように、文目の頭を手帳で叩く。

毎回、十一郎は感じている。父が刑事部長でなければ、とつくに貫野は暴行を仕掛けてきていて、裁判沙汰になっているだろうと――顔を上げた綾花は貫野に目を向けると、冷静に思い出すかのように語り始めた。

「電話で内容を聞いた時には、母が飛び込み自殺をしたものだったんです。だけど、寝ていたのは知らない男のかたで……」

納得しきれしていないのか貫野が妙な舌打ちをする。刑事というより悪人にしか見えない。

十一郎は相変わらずの、いい加減な判断と行動に呆れながら貫野を見た。

「どうせ電話で詳細語らなかつたんだろ。あんたの親が飛び込み自殺したって、言つたんじゃないか？ 『あんたの携帯番号を持っていた男が、飛び込み自殺した』って言わなきゃいけないのに」

しかし、貫野が綾花に伝えた内容も納得がいく。

男は身分証を所持してはいなかった。それなのに、遺書以外に綾花の携帯電話の番号が書いてある紙を持っていたというのだ。二つを合わせて考えると、近親者であると思いついても仕方がない。

しかも男は意識不明の重態だ。気を遣って、詳細を語らなかつたとも言えるだろう。

が、詳細を語らなかったのは貫野の落ち度でもある。そのために綾花はショックを受けて、言葉も話せない状況になっていたのだ。

十一朗の言葉が図星であり、反省点もあるのだろう。貫野は一步引いて言葉にならない唸り声を出した。

すると、今度は逃げ場を失ったのか、十一朗たちミス研全員を追い払うかのような手の動きを見せる。

「あー、分かった。全部信じたわけじゃないが、今回は放免だ。また事情聴取するかもしれないが、全ては他が繋がってからだ。ほら、行け」

行けと言われても、十一朗たちが全面的にいうことを聞く必要はない。

「裕貴、八木さんを送ってあげてくれ。俺はもう少し、ここに残る」十一朗の発言に、まずワックスが動揺した。自分はどちら側につけばいいのか、選択し兼ねているのだ。

迷った拳句、不機嫌そうに睨みつける貫野と目が合い、ワックスは裕貴のほうについた。

「じゃあ、帰るね。貫野巡査部……じゃなかった。警部補を困らせたら駄目だよ」

途中で失言したことに気づいた裕貴が慌てて訂正するが、完全に周りには聞こえている。

反射的にかというか貫野は、部下の文目に視線を向けて拳を握り締めた。また叩かれては困ると、文目は笑いを堪えるのに必死になっている。

裕貴たちがエレベーターに乗って姿が見えなくなるまで、十一朗と貫野、文目の三名は黙り続け、三階を示したランプが一階になったところで、ようやく向き合った。

まず、先制攻撃とばかりに十一朗は貫野に話しかけた。

「父さんに聞いたよ。貫野警部補、主任になれるかもしれないんだって？ 何か、退職する人があるから、棚ぼた昇格だって……」

「棚ぼたって言うな。努力の賜物だよ」たまもの

「ああ……貪欲の棚もののね」

「棚ものつて。どこまで棚ぼたネタ引っぱるつもりだ！」

この言葉の応酬戦に我慢仕切れなくなった文目が、また吹き出した。どうやら十一朗と貫野の漫才は、彼の笑いの壺に嵌まってしまったらしい。

また同じ看護師が違つ部屋の患者の検診を終えて出てくると、こちらを睨みつけてくる。

貫野は静かにしろというような素振りで、指を自分の唇に当てた。しかし、一番騒いでいたのは貫野だろう。十一朗は呆れて息をついた。

「あのさ、意識不明の男の素性はわからないとしても、殺された男との接点があったはずだろ？ 殺されたのつて、どんな人だったんだ？」

十一朗の質問に貫野は答えない。どうやら黙秘を決め込んだ様子だ。

代わりに、文目が手帳を開いて説明を始めた。

「暴力団組員、ますだりゅうじ升田龍治です。前科八犯。傷害、麻薬、賭博、偽造、銃刀法違反……何か、やってない罪はないって感じですね」

文目が遠慮なしに語るのを見て、もう隠すのも疲れたというように貫野が続けた。

「俺達一課だけじゃない。四課……今は組織犯罪対策部、主にマル暴を扱う課だが、そいつ等の中でも、知らない奴はいない有名人だった。俺らは奴を綱渡りつて愛称で呼んでた」

マル暴は警察用語で暴力団を差す。昔は暴力団を取り扱う課は四課だったが、現在では組織犯罪を取り扱う課、組織犯罪対策部として動いている。

刑事部でいう捜査一課が証拠や証言を求めて駆け回るコマネズミと喩えるなら、組織犯罪対策部は威圧と頭脳で相手を恐れさせる大猩猩軍団うしじやうといってもいい。警察内部を知る者は、捜査一課より組織犯罪対策部の方がエリートという者も多いのだ。

そんな組織犯罪対策部と捜査一課全員が知るほどの男だったのなら、遺体を見た瞬間に全員が「こいつは」と言っただけに違いない。

十一朗は殺された男の素性を頭の中で整理すると、貫野に質問を続けた。

「綱渡り？」

「ああ、罪を犯しても殺人はしない。死刑や無期をかわしてギリギリの罪を重ね続けているから綱渡りだ。皮肉なことに今回は綱から落ちたんだろうが……俺も事情聴取をしたことがある。むかつく奴でな。取調室や法廷では、アホなくらい反省した態度見せるのに、シャバに出たら狂人になる。ま、怨む人物を数えたら星の数ほどいるだろうな」

暴力団組員と一般人が何かしら争っていたとしたら、それは金銭が絡んでいたと考えたほうがいいだろう。多額の借金をした男が、金の返還を要求されて凶行に走る……一番、理にかなった動機だといえる。

「そこからあたったら、あの謎の人の正体はわかるはずだろ？ 升田って人、組にいたのなら顧客リストもあるんじゃないか？」

十一朗の言葉に、貫野と文目が目を合わせて妙な顔をした。どうやら既に手は伸ばしているらしいが、何か様子がおかしい。

「奴、組を抜けていたんだよ。組の連中は抜けた奴の客なんか知らん。奴に貸した金がまだ残っている。奴の客知ってるのなら教えてくれって、逆に怒涛の応酬されてな。どうやら仲間には、纏まった金が手に入るとは言っていたらしいが、客の名前は伝えていなかったらしい」

一通り説明し終えた貫野が、威張り散らしたように仰け反った姿勢を直すと、十一朗に迫った。

「それよりも教える。あの一年生、出会い系サイトに手をつけたりしてないか？ どうも、知らないなんていう話は信用できねえ。男が女に金をつぎこんでいた。その返金を迫られて、二人で升田を殺したという話になれば、全てが繋がる」

十一朗は、貫野の早急過ぎる推理に呆れた。

人を見たら疑え——それは刑事たちの中にある暗黙の了解でもある。だが、本当か嘘かを見極める眼力も必要だ。

出会い系サイトで知り合った意識不明の男を見て、高校一年生の女子があそこまで冷淡な態度で会話を続けられるのだろうか。

しかも、綾花が病室に入った時には裕貴が肩を貸している。

普段天然の裕貴も女性だ。女の勘が鋭くて驚くことも多い。綾花の微妙な変化を見逃すはずがないと感じた。

「それは絶対じゃないよ。それに頼むから、変な質問を彼女にしないでくれ。刑事ドラマが好きで、警察に憧れてるんだってさ。一人の刑事のせいで変な印象与えたくないだろ……それよりもすべきなのは、あの謎の人の素性捜査！」

十一朗の指示に、貫野はあからさまに面倒臭そうに顔をしかめた。「そんなとこ調べてたら、埒があかねーよ。奴が目を覚ますのを待ったほうが早い」

貫野が言い切ったところで、エレベーターの到着音が響いた。見ると二人の若い刑事がこちらに来る。

「貫野さん。死んだ升田の所在地が分かりました。ただ、同居人がいるようです」

刑事の一人が貫野に耳打ちしたが、十一朗を見て口を閉ざした。

一般人を前に、情報を語ってはいけないという判断だろう。

しかし、説明した刑事の隣にいたもう一人が、十一朗の顔を見て会釈する。

面識のない刑事のはずだ。十一朗は不思議に思いつつも頭を下げた。

「東海林刑事部長の息子さんですよ……あの見識は、私も勉強させていただきました」

十一朗は思い出した。久保の事件の時にいた刑事だ。

十一朗と裕貴に『彼女の両親が君達に会いたいと言っているから、現場に残っていてくれ』と引き留めた人物。

それにしても……と十一朗は思う。一見というものは恐ろしい。噂だけだと、喧嘩腰で入部させると言ってくるのに、事実を見ただけで大の大人が頭を下げてしまう。

十一朗がただの部外者ではないと捉えてか、刑事は中断した話を語りはじめた。

「その同居人が俵井^{たわらい}らしく……ここは張るので、貫野さんは現場に行ってくださいませんか？」

刑事の言葉を聞いて、貫野が「俵井か……」と呟いた。

「あいつ家に居ねーだろ。朝から晩までお勤めだしな……ま、確かに俺なら奴が立ち寄りそんな場所の見当はつくわ。なら、後はよろしく頼む」

その場を他の者達に引き取らせて、貫野が歩き出した。文目も手帳をしまいながら追いかける。便乗するように十一朗も続いた。

「何でお前がついてくるんだよ。あっち行け、シツシツ！」

当然、貫野は十一朗がついてくるのを善しとしない。しかし、十一朗には秘策があった。

「あのさ、ちよつと気になることがあるんだ。殺害現場の血痕に変な点とかなかった？」

「ねえよ。それにそれは鑑識の仕事だ。お前しつつこいぞ。煙草と酒と刑事面は大人になってからだ」

十一朗を撒こうと貫野は足早に歩いているが、先にあるのはエレベーターだ。待ち時間で簡単に追いつく。十一朗は追撃した。

「ないわけないだろ……何で探さないんだよ。それがあれば真相に近づけるかもしれないのにさ」

貫野はエレベーターが到着音を鳴らして開いたというのに、動きをとめて振り返った。

求めていた反応を見て、十一朗はしてやったりと胸中でガッツポーズをする。

「よし、分かった。どうしてもというのなら聞いてやるから、言ってみろ」

「俵井つて……どんな人？」

言われて十一朗はわざと惚けた。貫野は齒噛みすると、こめかみに青筋を浮き出させる。

「この野郎……神様が許さなくても、世間さまが許すなら、俺はお前を殴つてゐる」

「そんなに怒らなくてもいいだろ。連れてくのはタダじゃんか。前に取引したし、その延長線上だと思ってくればいいからさ」

聞いた貫野が十一朗の胸倉を掴んで、エレベーターに乗せた。文目も後からついてきて、閉のボタンを押す。扉が閉まると、降下感と共に二階を通過する。

そこで貫野は煙草の箱を出しながら、口を開いた。

「お前は一度、親御さんに叱ってもらわなきゃ駄目だな……終わつたら、絶対に電話してやる。覚悟しとけよ」

遠回しではあるが、その応えは貫野が十一朗に同行を許したことを示していた。

「けどな、俵井も元暴力団組員だ。だから出しゃばった真似はすんなよ。お前は社会科見学にきた高校生。いいな」

刑事部長の息子が、元暴力団組員に刺されたなどという一大事が起きたら、簡単に一刑事の首など飛ぶに決まっている。

それでも十一朗の同行を貫野が認めた理由は、前の事件の功績があるからに違いない。

エレベーターから降りて車に辿り着くと、文目が運転席、貫野が助手席に座った。十一朗は自ら扉を開けて後部座席に座る。これが覆面パトカーでなかったら、完全に十一朗は注目の的だ。

貫野が部下に耳打ちされた住所を文目に伝えると、車は静かに動き始めた。

外観では覆面パトカーとは誰も気づかないだろう。しかし車に入ると、世間と離れた別世界だ。時折、無線連絡の会話が入ってくる。貫野は我慢していた煙草を一本出すと、遠慮なしに吸い始めた。密閉された車の中で、高校生がいるのに堂々と煙草を吸うのは、

刑事にしてみたらどうかと十一朗は思う。まるで当たり前のように、文目が運転しながら窓を開けた。

「後ろにガキが一人いるってのが、落ち着かねえ……一人で乗せねえからな」

貫野のぼやきに、文目が微かに笑って「普通なら護送ですからね」と答えた。

捕まえた犯人を乗せた時は逃げると困るので、当然、隣に刑事が一人つくことになる。後部座席に刑事でもない者が一人乗るなどということは、ほとんどといっていいほどない。

「俺は何度かあるよ。けど、父さんの乗ってた車より、こっちのほうが席硬いかも」

さらりと言った十一朗を相手に、ミラーに映っている貫野が目を細めた。

「悪かったな……どーせ俺らはキャリア組じゃねーよ。ちょっと待て、ここで停める」

目的地に着く途中で貫野が文目に指示した。困惑した表情で文目が車を停める。

「ここで待つてろ。この時間帯は、ここが一番出るんだ」
言って貫野は車を降りると、視線の先にあるパチンコ店に入ってしまった。

貫野が言った「朝から晩までお勤め」の意味は、どうやら俵井はパチンコ店の常連客ということらしい。

それにしてもと十一朗は思う。一番出ると分かっているのだから、貫野もこの常連なのかもしれない。

無言なのが気になったのだろう。文目がちらりと十一朗を見た。

「先輩、暴力団組員の事情聴取もよくやってるから、そっち系に顔がきくんですよ。イタチの貫野って呼ばれているみたいですけどね」
「イタチって……」

十一朗は座席に深く腰かけた。イタチは隠語で『素早い刑事（巡查）』の意味だ。階級を言われるのを嫌う貫野なので、その愛称は

きつと不本意に違いない。

その時、一人の男がパチンコ店から転ぶのではないかという勢いで飛び出してきた。直後に貫野が追いかけるように出てくる。

それを見て文目は降りようとしたが、十一朗を見た。いくら刑事部長の息子といっても、覆面パトカーに一人、置いておくわけにはいかないからだ。

「車出して！ 繁華街に逃げる気だ。行く手を車で塞ごう」

十一朗に言われた後の文目の行動は早かった。アクセルとブレーキ、ハンドルを機械的に動かしてユーターンし、繁華街側に走らせる。この技術は貫野と常に行動することで叩き込まれた、彼の特殊能力なのだろう。

俵井と貫野は網のように入り組む小路に駆け込んでいた。

十一朗が窓を開けて二人の位置を確認しようとする、貫野の怒鳴り声が聞こえてきた。こうなると、いつも煩い貫野の地声は役に立つ。

貫野の怒号を頼りに、十一朗は文目に車の向かう方角を指示した。追いかけられた時、人間は無意識のうちに逃げる方向を選択することが多い。左折する可能性が高いのだ。血液を循環する重い臓器、心臓が左寄りにあることと、軸足が左足であることが理由ではないかといわれている。

そんな計算された予測と追い詰めによって、一本の路地に車を駐車した途端に、俵井が突っ込んできた。慌てて逃げ場を探そうとしていたが、追いついた貫野が車の側面に叩きつける。

体がぶつかる鈍い音と共に、俵井が言葉にならない唸り声を上げた。相当の衝撃だったのだろう。苦痛で顔を歪ませながら、貫野に目を向けた。

「ちよつ、待てよ。まだ俺は何もしてねーよ」

逃げ切れないと観念したのだろう。俵井は弁解を始めた。俵井の腕をつかんだまま、貫野が睨みつける。

「じゃあ何で、俺の顔見て逃げやがった」

「あんた、俺の顔見たら、いつもおつかねえ顔して追いかけてくるじゃないか！ それ見て逃げない奴なんていねーよ」

貫野は「まあ、そりゃ否定できないわな」と言つて、俵井を放した。

しかし、ちゃんと逃げ道は塞いでいる。

「その様子じゃあ、何も知らないみたいだな。升田が死んだ。お前、何か知つてたら教えろ」

貫野は懷から煙草を取り出すと銜えた。対し、衝撃の事実を聞いた俵井は動揺する。

「死んだ？ 殺されたんっすか。誰に？」

貫野が吐き出した煙草の煙が、開けていた窓から車内に入り込んでくる。十一朗は煙たくて噎せてしまった。

現実を受けとめきれずに混乱している俵井に、貫野が自分の煙草を差し出す。

一本受け取つた俵井の煙草に貫野が火を点ける。すると、ようやく一服して落ち着いたのか、静かに語り始めた。

「まいったな……俺、あの人に五十万貸したままなんっすよ。組にも借りたまんまらしいし。今日纏めて返してくれる予定だったんですけどね。やっぱ、殺したのって客っすか？」

自分が捕まらなないと安心したのか、途端に流暢に語り出す。貫野は話を続けた。

「殺されたつて、悩む時間もなくて言いやがったな。客の名前言つてなかったか？ あと、幾ら返つてくるとかは？」

「名前は聞いてないっす。客の名前を聞かないのは俺らの中にある暗黙の了解っつか、横取りがあるかもしれないから、話しませんつて。金は本当か嘘がよく知らないけど、七百万つて……他に金蔓^{つる}見つけたから、一億はくだらないつて言つてました」

「一億？」

俵井の言葉に、貫野だけでなく文目と十一朗も声を裏返して叫んだ。

一通り驚きの行動を見せた文目はハンドルを握りながら、もう片方の手で指折り数えている。自分の月給に換算すると何年分なのか、皮算用しているのだろう。

「ありえねーでしょ。だから、殺されたって思ったんすよ……」

俵井は煙草を一気に吸うと、十一朗を見た。何でここに高校生が？ と、異物を見るような目だ。貫野が話を続けるというような素振りを見せると、俵井は煙を吐き出した。

「何年か前の貸しだとかで……どこまで本当か分かんないっすけどね。あの人、ホラも多かったから」

『綱渡り』死刑や無期をかわしてギリギリの罪を重ね続けている——『取調室や法廷では、アホなくらい反省した態度見せるのに、シャバ出たら狂人になる』

その話が升田は生粋の『ホラ気質』だと裏付けている。升田が得意気に話す中に、真実など一欠片ひとかげらもなかったのかもしれない。

しかし、今回は本当だったのだろう。殺される——その動機は相当の代物だったに違いないのだ。

これから事件をどう掘り下げて行くのか、思考を始めた貫野を見て十一朗は顔を出した。

「あのさ。升田の持ち物調べさせてもらったら？ 家宅搜索を……」

「令状は？」

一即答したのは貫野ではなく俵井だった。その反応を見た貫野が、俵井の肩を抱くと不気味な笑みを浮かべて迫る。

「俺がまっとうな刑事じゃないってことは、もう理解してるよな？ 訴えなら後で聞いわ。調べさせる。偽造カードか？ 麻薬か？」

俵井は慌てて首を横に振って否定した。墓穴を掘ったのだ。もはや言い逃れはできない。

貫野は携帯を取り出すと、連絡を始めた。家宅搜索のついでに俵井の隠し財産も見つけてしまおうという寸法だろう。

観念した俵井は、借りてきた猫のように大人しくなり、肩を竦めて縮こまっていた。

仲間を呼んで、ある程度の算段をつけた貫野は、後部座席にいる十一郎に視線を向けた。

「おい、高校生名探偵君。さっきの話の続きを聞かせてもらっぞ」
聞いてきた貫野に十一郎は迷わず答えた。

「じゃあ、事件現場へ——」

5. ゲソコン

十一郎が現場に着いた時には陽も落ちて、周囲は闇に包まれようとしていた。

暗くなつてしまえば捜索活動は難航する。今日の捜査はここまできつめたのか、鑑識が撤収作業を始めているところだった。

車から真つ先に降りた十一郎は、その場で一回転しながら辺りを観察した。

殺害現場の路地を出て左折すると、謎の男が自殺未遂した踏切が見える。距離は約百メートルといったところだろうか。

刺した男の返り血を浴びたのだろう。謎の男が進んだ軌跡を示すように、赤い斑点が殺害現場と踏切を結んでいた。

十一郎は反転すると、現場に足を向けた。追うように降りてきた貫野が歩いてくる。

殺害現場で足をとめた十一郎は、その場にしゃがみ込んだ。死んだ男が残した血糊を、入念に観察する。

薄暗くなつてはいるが、路面に付着した夥しいまでの血痕は確認でき、事件の壮絶さを物語っていた。

十一郎の背後で貫野が「はあ」と疲れた声を出す。
「普通、高校生が死んだ奴の血糊を真剣に見るか？　ねーよ。もう、

どうにかしてくれよ。こいつのこと」

貫野の悲鳴を横に、文目も苦笑いをする。その時、二人とは違う足音が近づいてきた。

十一郎が顔を上げると、そこには久保殺害現場で会った鑑識の一人が立っていた。

「十一郎君、何か疑問でも？　こっちに差し支えないことなら話すけど……」

鑑識員の意外な言葉に、貫野のほうが目を見開いた。「ちょっと待て」と即座に割って入る。

「高校生相手におかしいだろ。いくら刑事部長の息子でも、それは駄目だ」

貫野の忠告に、鑑識員は間違ったことはしてないというように、逆に目を白黒させた。

「あれ、貫野さん、知らないんですか？ 五年前の話。刑事部長が非番中に現行犯逮捕した男がいたじゃないですか。あれ、十一郎君の助言があつたから出来たって話ですよ」

聞いた貫野と文目が同時に十一郎を見た。思わぬ話題の変換に十一郎は頭を抱える。

「あれは、俺が偶然気づいたってだけで、父さんでも見たら分かつたって……」

十一郎が中学入学を控えた頃だった。小さくなつた学習机を買い替えようという話になって、父と母と共に家を出た。

目的の学習机も望み以上の素晴らしい物が見つかつて、気持ち豊かに駐車場に向かおうとした時だ。目の前の交差点で、幼女が車に轢かれた。

頭から血を流し倒れ込んだまま微動だにしない。その場にいた誰もが幼女は信号無視で飛び出して轢かれたと思つていた。

しかし、即座に十一郎は近くにいた男を指差して、父に指示を出した。

「父さん、あいつが犯人だ。すぐに取り押さえて事情聴取して！」
突然出された息子の発言に戸惑つた父だったが、男と目があつた途端、相手は逃げ出した。行き成り逃げ出した男を、疑わない刑事はいない。

その場で男は取り押さえられ、あつけなく自分がやつたと自供した。

「十一郎。なぜ、あいつが犯人だと分かつたんだ？」

聞いた父に向かつて十一郎は、何の躊躇もなく言い切つた。

「だって、あの子の背中に足跡グッドがあるじゃないか。あの足跡グッド、あの

靴のメーカーだよ。あの子の近くにいて、あの靴を履いていたのは、あいつだけだったから」

男は信号待ちをする少女の背後に立つと、車が来るのを見て蹴り飛ばしたのだ。少女の背中にある足跡が、はつきりとそれを示していた。

しかし、実はその足跡はタイヤ跡と重なっていて、判別が難しかったという。

翌日――新聞の地域欄に『小学校六年生の冷静な判断で、犯人が現行犯逮捕』という、恥ずかしいくらい大きな十一朗の写真と記事が載っていた。

母は「この子は私の誇りです」と喜んだ。しかし、父は前までは「刑事を目指すといい」と言っていたのに、この一件以来、十一朗の将来について一切語らなくなった。

父さんは俺と係るのが嫌になったのかもしれない。十一朗はそう感じていた。

夢は刑事だった。だけど、このまま父さんと話せないくらいだったら違う世界に――

事実、十一朗が刑事に執着がないと知ると、父は障りなく話をするようになった。将来は探偵と決めたのは、そんな裏の事情もあったのだ。

十一朗の過去話を淡々と貫野や文目に話す鑑識員を横に、十一朗は路面を見つめた。

「鑑識さん、ちよつと疑問があるんだけど。自殺未遂をした人の着用物とか、見ることはできないかな？」

十一朗の要望に鑑識員は嫌そうな顔をするのではなく、逆に興奮したように鼻息を荒くし、着用物を映した写真を収めたファイルを持ってきた。

もはや、証拠大開放祭りだ。絶対に有り得ない状況に貫野が頭を抱えていた。

「これが着用物の写真ですね。実は僕にも疑問が……なので、僕の

推論と十一郎君の見解が同じか是非、お話を頂戴したい」

何が疑問点なのか、鑑識員は敢えて言わなかった。貫野と文目も覗き込む。

十一郎は前に予測した通りの違和感を捉えて、鑑識員を見た。

「致命傷は最後の一突きで傷は心臓の大動脈に達していたんだよね。それにしても浴びている血の量が少ない」

心臓は体内に血液を巡らすポンプだ。その心臓の中でも太い大動脈を貫けば、刃物を抜いた瞬間、夥しいまでの鮮血が飛び散る。

見せてもらった服の写真は、その血の跡がほとんど見当たらない。着用物に付着していなくても、路面には相当量の血の痕跡が残されるはずだ。それが現場にはない。

相当量の鮮血を浴びた者が存在する。そしてそれは、自殺未遂をした男ではない。

やはり被疑者とされる意識不明の男は主犯ではないのではないか。左利きの人物が主犯なのではないか。

「あと、ここに残った血の跡って、なんか変じゃないか？」

十一郎が指差した場所を見た鑑識員が、「やはり、そこに目を付けられましたか」と目上の者に語るような丁寧な口調で返した。

関心を示した貫野と文目が血痕を真剣に見つめる。が、何が変なのか分からないらしく、顔を上げると十一郎と鑑識員を見た。

「血糊を拭き取ったような跡があるだろ？ それとここにある円状の跡……これって、靴の跡じゃないかな」

十一郎の説明に貫野が首を傾げる。しばらくして「そうか」と声を出した。

「ハイヒールの踵かかとか」

言って貫野は自問自答の決着を脳内でつけたのだらう。息を荒げると十一郎を見た。

「犯人は女ということだな」

立ったり座ったり忙しいなと感じながら、十一郎は首を縦に動かした。

十一朗は確証を得るために、更に事件の奥底に迫ろうと考えた。

「あと殺された男の写真は？」

十一朗の質問に鑑識が答えるより早く、貫野は「そのことだけだよ」と続けた。

「あの綾花って子に升田の顔を知っているか確認してほしいんだが、これでもかつてくらい苦しんで死んだ顔しててよ。とてもじゃないが見せられねえ。だからお前も同じだ」

十一朗は貫野を見た。そしてまた呆れた。その反応に貫野が眉間に皺を寄せる。

「俺、なんかおかしいこと言ったか？ なあ」

後ろにいる文目が首を横に振って答えた。だが、その反応は間違っている。

「今の発言、監察医の前で言わない方がいいよ。これは監察医も言いたがらない知識なだけだよ。苦しんで死んでも安らかな顔になるんだよ。筋肉が弛緩するから……だけど唯一例外があつて、物凄い形相のまま死ぬ時があるんだ。それが『激しい怒りの中』で死んだ時」

文目が感心して息をついた。貫野は虚空を見ると抑え込んだ気持ちを発散させるように叫んだ。

「か……まじで、こいつどうにかしてくれ。高校生にここまで言われたら、自分が馬鹿なんじゃないかって思えてくる」

聞いた鑑識が高い声を上げた。しかし十一朗は推理が的中したことで天狗になるよりも、貫野の言葉で現実を理解した。

父さんが俺と係るのが嫌になった理由は、きっと。

あの日、男が犯人だと知って推理を語った時の周囲の目、父と母の驚いた表情。あれは凄惨という感服の目ではなく、近寄り難いという畏縮だったのではないか。

そんなつもりはなかった。言わなければ良かったのか。息ができなくなるのではないかと錯覚するほど、胸が締めつけられた。苦しみを耐え切れずに空を見た。

漆黒の闇の中に輝く星たちが語りかけてくる。

いつでも父の隣にいたいと考えてきた。優秀な刑事になりたいと背伸びをし続けた。

小学校低学年でありながらも、警察関連本に興味を示した。法医学、科学捜査、刑法……時を惜しんで読み漁り続けた。

そんな時に起こったあの事件――

しかし、あの日から時はとまったまままだ。自分の将来がつかめなくなってしまった。本当になりたいのは探偵なのだろうか。そんな疑問が浮かぶ時もある。

実際、現場にいられるのは探偵ではなく刑事だ。が、そこには十一郎の嫌う柵しがらみの世界がある。

近づいていた父との距離が、逆に一気に遠ざかってしまったという悲愴感。

空を見上げたまま十一郎は深呼吸した。だが、ここで立ち止まるわけにはいかない。

「本当に借金相手だけの関係だったのかな……何か違う気がする」
『激しい怒りの中で死んだ時』は憎悪のような感情が滲み出た時ではないだろうか。

殺された男と、とどめを刺した者の関係は、金の貸し借りでは収まらない親密な仲だったのではないか。

十一郎の中でいくつもの疑問が浮かんでは消える。難問に首をひねり続ける十一郎の横で貫野が唸った。

「くそ、関係者が全員『口無し』じゃ話にならねえな」

口無し――被害者は死亡、被疑者は意識不明、被疑者との関係が疑われる八木綾花も事件との関連を否定。捜査本部が開設されていたら、『口無し殺人事件捜査本部』となっても不思議ではないだろう。

「貫野警部補。この事件、安易な気持ちで臨んだら迷子になると思うよ。多分、意識不明の男は覚醒しても真実を語らない」

貫野が、文目が、鑑識員が、十一郎を一斉に見た。貫野が息を吞

んでから、十一朗に向かって聞いた。

「確証は？」

全員が十一朗の答えに注目する。満天の星空を眺めて精神統一した十一朗は答えた。

「刑事の息子の勘だよ」

両親が弁護士の実野は妙な笑い声を出すと、懐を探って煙草を取り出した。

が、現場保存を思い出したようで、大きな息をついてから隣にいる文目を殴りつける。

そんな二人を見ながら、きっと二人は何十年たっても変わらないんだろうなと考えて、十一朗は深い息を吐いてしまった。

6・肩書き

翌朝六時——目覚まし時計で数分狂わずに起床した十一朗は、いつものように一家団欒の食卓についた。

しかし、今朝はいつもと様子が違っていた。寡黙な父が新聞を開くことなく、十一朗を見つめていた。

ふと、十一朗の記憶から貫野の言葉が引き出された。

『お前は一度、親御さんに叱ってもらわなきゃ駄目だな……終わったら、絶対に電話してやる。覚悟しとけよ！』

忠告通りに連絡されたのだなと確信した。母も詳細を聞いたのだろう。席に着くことなく心配そうに事の進行を窺っていた。

「話は貫野に聞いた。また事件に首を突っ込んだそうだな……お前はまだ高校生だ。出しゃばった真似をするな」

父の叱責に十一朗は全身の血液が沸騰するような体温の上昇を感じた。

『出しゃばった』という言い方は癪に障った。思わず身を乗り出して父に反論した。

「俺が進路の話を始めるといつも話題をそらすくせに、問題起こした時だけ口出しすんのかよ！ 親父は俺の進路をどう思ってるんだ。あの日から何も聞いていないぞ！」

『お前は刑事に向いている』それが父の口癖だった。それなのに、あの日から『刑事』の文字すら父の口からは出ていない。

言い終わってから十一朗は我に返った。

面と向かって父に『親父』と言ったのは初めてだった。封印してきた本音を正面から叩きつけたのも初めてだ。全てが初めてづくし……
様子を窺っていた母が包丁を手に、直立不動のまま立ち尽くしていた。

テレビに映ったニュースキャスターが淡々と雲の流れと降水確率

を説明する声だけが、キッチンに響く。普段、和気あいあいとした憩いの場に、呼吸困難になりそうな張り詰めた空間が形成された。五年前を語らなかつたのは、父と母が決めていた暗黙の了解のようだった。

十一郎だけが外れ者になつていたのだ。この状況を打破しなければ物事は解決しないと十一郎は考えた。

あの日よりも自分は成長している。だが、人生の岐路という進路の場に立つて悩み続けてきたのも事実だ。今は背中を押してくれる両親の一言が欲しかった。

「コーヒーに砂糖は入れる？ グラニュー糖切らしちゃったみたいなのよね」

胃が痛むような重い父と子の対立を前に、母が降参の白旗をあげて話題を逸らした。

しかし、十一郎は引いた架線を切り落とすつもりはなかつた。

「母さんはどう考えているんだよ？ 俺は大学に行くけど、その先は気にならないのか」

親としてどうなんだよという言葉は控えた。

母は父に返答を求めるように視線を動かすと、十一郎に詰めた弁当を差し出しながら答えた。

「誰かの指図を受けて決めるものじゃない。あなたの将来はあなたが決めるものでしょ」

大人が辿り着くであろう、尤もな結論を母は語った。

十一郎が意識して控えた言葉。

親として……そう、自分は自分なのだ。将来を決めるのは親ではない。

父は母にも同意せず、我関せずと言った様子で新聞を開いた。それを見た十一郎は父の新聞を奪い取った。母が両手で口を押さえて声を上げかける。

「俺が刑事になったら、父さんはどう思うか聞いてんだよ。刑事部長の息子っていう肩書きを俺は嫌いだ。俺は俺だ。比べられる重圧

だつて知つてゐる。本当は――」

俺の求める進路は探偵なんかじゃないんだ……言いかけて十一朗は口を閉ざした。父の背中を追い続けてきてはいたが、現場で働く父の姿を見たことはなかった。

刑事の顔をした父を見たのは久保の事件が初めてだった。現れた威厳溢れる父の姿に息を呑んだ。

それは一瞬の出来事だったが、十一朗にとっては真剣に将来を考えさせられた瞬間となつたのだ。

十一朗が奪い取つて置いた新聞を丸めて手にした父は、カバンを取つて立ち上がった。

その丸められた新聞で十一朗は頭を叩かれた。思わぬ父の行動に驚いて顔を上げる。すると、あの日から忘れていた父の笑顔があつた。

「そうだな、お前はお前だよ。けれどこれだけは忘れるな。お前は俺の誇りある一人息子だ。それは何があつても変わらない」

聞いて胸が熱くなつた。父は自分を避けていたわけではない。認めていてくれたからこそ、静かに見守り続けていてくれたのだと分かつた。

安堵した母から手製の弁当を受け取つた父は、再び十一朗に視線を向けて言つた。

「親父と言われるのも、悪くないな」

父に声をかけようとした十一朗だったが、紡いだ文字を脳内で変更した。

「親父！ 仕事、行つてらっしゃい」

右手を上げて玄関を出た父の姿は、久保の時に見た威厳溢れるものとは違つが、更に大きく見えた。

7・利き手

放課後、都立明鏡止水高等学校、ミステリー研究部の部室で――
「あんなことあったんじゃないかもしれないよな……」
ひどく落胆したワックスが、得意の鉛筆回しを適当にこなしながら言った。

裕貴も部室には来たが、色とりどりのチョークで書かれた『新入部員、八木綾花ちゃん。大歓迎』の文字を見ながら呆けている。

十一朗は持ってきた推理小説を開きながら、綾花が持ってきた入部届けを見た。事件があった直後のために、提出するかどうか悩んでいた。

「あれ？ プラマイ、今日は探偵小説じゃないのかよ。警察小説なんて珍しくね？」

突然、ワックスが鉛筆回しをやめて、十一朗に話しかけてきた。
推理小説に興味はないと思っていたが、十一朗が読む作品タイトルは気になっていたらしい。

「いや、読まないことはないよ。警察小説のほう警察内情や専門知識が詳しく書いてあったりするからさ。勉強にもなるし……」

「プラマイ、今朝、お父さんと喧嘩してなかった？ 隣まで聞こえてたよ」

話の途中で裕貴がいらぬ質問をしてきた。聞いたワックスが変な笑みを浮かべる。

「まじで？ お前も親父と喧嘩する時あるんだ。意外な一面発見だな」

十一朗は息をついた。勝手に親子喧嘩であると結論づけられてしまっている。

「似て非なるものだよ。進路について話をしただけ。さすがに三年生になったのに、大学に行って勉強するっていう考えだけじゃないけない気がしてさ」

十一朗の答えを聞いた裕貴が、黒板に近づいてチョークを取ると笑いながら言った。

「小説変えたのは心境の変化からかー。お父さん喜んだんじゃない？」

ワックスが十一朗を見た。幼馴染みだけに裕貴は全てわかってしまったようだ。それとも女の勘というものだろうか。この鋭さが推理に役立てばいいのにと十一朗は思う。

「喜んでいたのかな……よく分からないよ。親父って、いつも口数少ないからさ」

「えー、プラマイのお父さんって寡黙だからカッコいいんだよ。私のお父さんなんてお酒飲んだら弾丸トークとまんないんだもん。憧れのお父さんの姿だと思うけどな」

言いながら裕貴は立ち上がると、チョークを使って著作権侵害ともいえる、なんちゃってキャラクターを描き始める。ところが、途中で描くのを断念すると制服の袖を見て声を上げた。

「あーもう！ チョークで汚れちゃった。黒板に手を付けた私が悪いんだけどさ……」

汚れた手をどうすればいいか、裕貴は室内を眺めてからティッシュ箱を取っていた。

十一朗は裕貴の一連の動きで、綾花の入部届けの『あること』に気がついた。

「八木は右利きか……左利きじゃないんだな」

貫野は殺人事件の共犯者を八木綾花と疑っている様子だった。しかし、共犯者は左利きだろうという推測が出ている。

そんな十一朗の呟きを聞いた裕貴が、首を傾げて近づいてきた。

「ねえ、何で八木さんが右利きだっと思うの？ 会ったばかりでよく知らないのに」

ワックスも「そうだよな」と言って十一朗を見た。十一朗は綾花が渡した入部届けを机の上に置いて、文字を指差した。

「これ、書いた筆記用具はシャープペンだろ。入部届けってさ、横

書きと縦書きの用紙が一枚ずつあるんだ。こっちの横書きの文字は掠れてないのに、縦書きの文字は掠れているだろ？」

十一郎は手元にあつたノートを開くと文字を書いて実践した。

「手を付いて書くから先に書いた文字を擦っちゃうんだよな。横書きの時には右側に文字が存在しないから擦ることはないけど、縦書きだと右側に文字があるから擦ることになる」

裕貴が「あつ」と声を出した。

「さっきの私の落書きを見て気づいたの？　どういう思考転換でそうなるのよ」

十一郎は笑ってしまった。周囲の者の動きを見て引かなかった謎を解く。まるで推理小説の展開だ。

「裕貴の予測不能の動きに感謝だな。本当は八木に直接聞いてもいいんだけど、聞くより自分で問題を解決したほうがいい」

八木綾花は嘘をついていない。確証を自分自身で持ったことで十一郎は安堵した。

その時だ。ノックの音が二回響いた。

曇りガラスが張られた扉の向こうにある影は、紛れもなく新入部員八木綾花の姿だ。

「開いてるよ」

初日と変わらない入室の仕方だ。綾花は扉を開けて入ってきた。ワックスが感動したかのように目を閉じて全身を震わせているが、十一郎は無視した。

入室した綾花は視線を落したまま、顔を強張らせている。十一郎たちの一声を待っているようだった。

十一郎は推理小説を閉じると、綾花を見た。視線が交錯して彼女が目を見開く。知りもしない男との関係を警察に迫られて、疑心暗鬼に陥っているのが見て取れた。

「じゃあ全員揃ったみたいだし、活動開始するか」

いつもと変わらない進行が意外だったのか、裕貴とワックスが驚いて十一郎を見る。

綾花も緊張で硬直させていた体を動かすと、十一朗に駆け寄ってきた。

「あの！ 昨日のこと、何も聞かないんですか？ それに私、あの後、東海林先輩が刑事さんと何を話したのか気になって、ここに来たんです」

当然の反応だろう。十一朗は裕貴とワックスも見た。二人も興味深そうに身を乗り出している。本来なら捜査の進展を他者に語るべきではない。しかも八木綾花は殺人の共犯者と疑われている人物だ。しかし、十一朗は自身で導き出した推理から、彼女は犯人ではないと確信していた。

「分かった……隠しても仕方ないから正直に話すよ。警察は八木のことを殺人事件の共犯だと怪しんでいた。もしかしたら連行されるかもしれない。だけど、それは俺が全力で止めるよ。君は事件に関与していない。これは仲間意識からじゃない。確信だ。俺は八木を信じているし、君に協力していくつもりだ」

緊張の糸が切れたかのように、八木綾花の表情が緩んでいく。

そして、涙ながらに訴えた。

「本当に私はあの男の人を知らないんです。信じてください！」

警察の前で叫んだら、逆に怪しまれるような主張だ。十一朗は綾花を見た。

「そう言われたら、警察はアリバイを聞く。俺は君を犯人だと疑ってはいないけど、一応、確認していいかな。アリバイはある？」

綾花は首を横に振った。

事件発生は午後十一時、高校生が外出していたら確実に補導されてしまう時刻だ。家にいたというのが普通だろう。そして、アリバイは家族間では成立しない。刑事ドラマを見る綾花はそれを知っているに違いない。

「その時間は一人で自室にいました。だからテレビの内容しか言えないんです。母も仕事で留守でしたし……これってアリバイにはならないんですよね」

綾花の言う通りだった。残念ながらアリバイとしては不十分だ。殺人を計画した者は、自分が被疑者とならない方法を模索する。その中で捜査の対象からはずれる簡単な行動がアリバイ工作だ。

これを警察が警戒していないわけがない。刑事は誰であっても疑うことを前提に捜査に踏み切っているので、完璧といえるアリバイしか信じてない。

犯行時刻にどこかの防犯カメラに写っていたとか、多人数の第三者と会話を交わしたというほどでなければ無理だ。

テレビの内容なんて録画すればいいわけだし、子供が殺人を犯したのなら親も隠そうとするだろう。

刑法一。五条でも、親族間の特例として（犯人などをかくまい逃がす行為及び証拠隠滅）の罪は『犯人または逃走者の親族が犯人または逃走者の利益をのために犯したときには、その罪を免除することができ』とある。

刑事は当然、この刑法を知っているので親の証言を信じないのだ。「事件の時間帯じゃなくてもいいんだ。事件現場と君の自宅は距離が離れているから、自宅周辺のアリバイなら十時半でも成立だ」

十一朗の質問に綾花は「あっ」と声を出した。何かを思い出したのは確実だった。

「飲み物を買いにコンビニに行ったのを思い出しました。確かレシートが……あった」

綾花がカバンから出したレシートに皆の視線が集まった。レシートに打ち込まれた時刻は十時四十五分。綾花の自宅近くのコンビニの住所も記録されている。十一朗が指定したアリバイ成立の範囲内だ。

しかし、まだそれでは安心できない。レシートでもアリバイをつくろうと思えば出来る。誰かに頼めばいいことだからだ。頼みの綱はコンビニの防犯カメラが、綾花の顔をしっかりと捉えてくれているかということになる。

それでも十一朗は安堵の息をついた。綾花の性格は知っている。

嘘をつくわけがないと信じていた。そう、彼女は大切なミス研家族の一員だ。

「良かった。これでアリバイ成立だな。それは君から警察に渡したほうがいいよ。但し、アリバイがあるか追及されてからだ。こういうのもなんだけど、刑事と関係がある俺が助言したと思われるとまづいし、先にアリバイを言うとな変な詮索されるのは確実だからさ」

事件発生の際には、第一目撃者を刑事は疑う。妙な言動を探るのは彼らの習性なのだ。

被疑者から、突っかかりのある説明を受けた時の警察の目は疑いしかない。

そんなことも十一朗は知っているので、敢えて綾花には言わない方がいいと告げた。

その時だ。裕貴が合わせた手の音が室内に響いた。

「ねえ、八木さんの歓迎会をしようと思っっているんだけど、都合の悪い日とかある？」

先走りすぎの裕貴の発言に十一朗は目を細めた。

事件のことであつたばかりなので、綾花にしてみたら迷惑かもしれないだろうと思う。裕貴にしてみたら気分転換させるつもりで誘つたのだろうが、変に感じるのは女子と男子の考えの違いから生じるものなのかもしれない。

しかし、裕貴の提案にワックスも賛成のようで挙手した。

「俺、ここらへんで評判の店がないかって聞いたんだ。で、見つけたのが二駅離れた、エナノスって店。スペイン料理店なんだけど、ガスパチヨとパエリアがうまいらしくてさ」

聞いて十一朗は眉間に力を入れてしまった。事件現場の最寄り駅だからだ。

あれだけの事件だったので、新聞でも大きな記事で載っていた。どの駅構内で男が轢かれたのか、どこで殺人事件が起きたのか地図まであつたのを記憶している。

エナノスという店は事件現場と降り口は逆だが、あまりいい店の

選択とはいえない。それでも、現場の悲惨さを知らない三人だから、互いに同意したようだった。

「その駅なら、私の母が働いている店の最寄り駅です。仕事が終われば送ってくれるかも」

話の中で、綾花がさりと口にした。聞いて十一朗は、思わず息を呑んでしまった。

事件現場と綾花の母の勤務地が同じだとは予想していなかった。そして謎の男が残っていたという綾花の電話番号。

腕が震えた。安堵してからの疑惑発生で思考が破裂しそうになる。十一朗は綾花を見た。

「八木、君のお母さんの利き手って……左か？」

遠回しに聞くことが出来なかった。確信に近い質問で綾花の目が見開かれる。

ワックスも裕貴も動きをとめて、唾を飲みこみながら綾花の答えを待っていた。

「左です。もしかして、東海林先輩……」

『母を疑っているんですか』という続きの言葉を、綾花は押し殺したようだった。少なくとも、彼女の中にも母が共犯ではないかという疑いが生まれたはずだ。

それでも、何かが十一朗の中で引っかかっている。本能が叫んでいた。

この事件は何かが隠されている。推理を怠るな。米粒のように散らされた証拠を探せ。

十一朗は立ち上がった。そうだ証拠だ。鑑識員が口にしていなかった重要物が、現場に残されているに違いない。

「そうだ。『裏抜け』していた遺書だ……慌てて書いた遺書に、あんな筆記用具使うわけがない。現場に行かないと——」

前に進んだ途端、足元に置いてあったゴミ箱を蹴飛ばした。足元が見えていないほど混乱していた自分に十一朗は気づいた。

散らばったゴミを掃くほうが早いと裕貴は判断したのだろう。掃

除用具入れからホウキを持ってくる。ワックスも近づくと、大きなゴミを拾ってゴミ箱の中に捨て始めた。

二人の動きを見ながら、十一朗は情けなくなった。ミス研の部員は家族も同然と思っておきながら、事件の真相を語っていないし、繋がった推理を教えてもいない。

一人で戦う自分がカッコいいと思ってしまっていた。しかし、それは信頼や協力という好意を無視した馬鹿な行いだ。外れた道を修正してくれる仲間がいるからこそ、都立明鏡止水高等学校ミステリ―研究部は成り立っている。

十一朗は反省した。自殺屋事件の時もそうだった。皆がいたことで事件は解決できたのだ。

「みんなに頼んでいいかな。事件現場に証拠が落ちているはずなんだ。鑑識課員はそれを見つけていない。捜査が難航しているのは、きっとそのせいだ。一緒に探してほしい」

見つけられないのは、その証拠が絶対にあるという考えに鑑識も至っていないからだろう。

「久しぶりに、ミス研始動だね」

ゴミを綺麗に掃き取った裕貴が、十一朗を見てはじけるような笑顔を見せていた。

8・絡み合う鎖

街並みを前景に、紅く染まった夕陽が落ちていく。頭上では帰りの合図をするカラスの鳴き声が繰り返されていた。

十一朗が現場に訪れたのは昨日のことだ。今日は鑑識員の姿もなければ、刑事の姿もない。一般の通行も現在は許可されている。

前日に見た殺人現場と踏切を繋ぐ赤い斑点は、視認できないほど薄くなっていた。

凄惨な現場だ。ミス研部員といっても血糊を見る行為は適切ではないし、良いこととはいえない。十一朗は安堵の息をついた。

謎の男は遺書を書きながら、現場から踏切に向かって歩いている。歩く途中で手にしていた紙を切り取り、ある筆記用具で書いたのだ。

十一朗は男の遺書を、不用意に見せてくれた貫野のお蔭で確認している。その遺書には特徴的な跡があった。それが『裏抜け』という、インクが紙の裏に染み込んだ状態だ。

何を探せばいいのか、十一朗は話してはいない。裕貴たちは指示を待っていた。

「俺が立っているここから、踏切の手前の間に証拠が落ちているはずなんだ。それが男が遺書を書くために使った筆記用具……万年筆だ」

「万年筆？」

十一朗の言葉に敏感に反応したのは綾花だった。そう、ここではわずか数百メートルの間で書かれた遺書というのが、一つの謎となる。

裏抜けするような粗悪な紙に、万年筆という高級な筆記用具で書いたのは何故か？

あまりにも矛盾しているのだ。謎につまった時、誰もが考える。

男が持っていた筆記用具は、万年筆だけだったのではないか。万年筆は自分の所持品であったのか。計画的な犯行だったのか。

「ねえ、プラマイ。それって……」

次に問いかけてきたのは裕貴だった。推理スピードは遅いほうだが、今日は冴えている。

「なんとなくわかってきただろ。男は突発的に殺しをしている。それなのに遺書を書き、自殺未遂までした。誰かを庇っているのは確実なんだ。けど、そうなる疑問が残る。何故、犯行時に凶器を持っていたかということだ」

計画的犯行でなければ、凶器は手元にはないはずだ。だとしたら次に考えるのは、凶器を誰が持ってきたかということになる。

「凶器は共犯が用意した可能性が高い。主犯は意識不明の男じゃない。共犯者だ」

十一郎の推理に、綾花が唇を震わせていた。部室での会話を思い出したのかもしれない。『君のお母さんの利き手って……左か?』という十一郎の問いを。

言いながら十一郎は唇を噛んだ。まだ決まったわけではないが、良い方に向かっている気がしない。

はじめは綾花の無実を証明するためだった。けれど今は――

「探すぞ。万年筆! 俺とプラマイが右側探すから、三島と八木は左側な」

重い空気を振り払うように、ワックスが率先して行動開始した。

十一郎はミス研のムードメーカーともいえる、ワックスのそんな部分に助けられてきた。

もし自分の推理だけで暴走していたら、裕貴も呆れて離れているだろうと十一郎は思う。夢中になりすぎて、周りがよく見えていない瞬間があると自覚しているからだ。

そんな時にワックスは、必ずと言っていいほど修正の道を切り開いてくれる。

ワックスの言葉とともに、証拠探しが始まった。鑑識員が見つけれなかった物だ。簡単に発見できるとは思えない。側溝や植え込みの中も調べる。

十一朗は自殺未遂をした男が残っていた軌跡を思い出しながら、証拠が落ちていそうな場所を見定めた。

植え込みに目標を決めてしゃがみこむ。中を覗いた途端に眩暈めまいがした。缶やコンビニパンの袋が大量に落ちていたのだ。

ゴミと一緒にモラルまで捨ててしまったのだろうか。十一朗は重い息をつきながら軍手を付けた。

こんなこともあるのかと用意して正解だった。ボランティア用のゴミ袋も持参しているので、通行人からしてみれば証拠集めなどとは思われないだろう。

面倒臭いのでゴミを纏めてつかむ。すると右手に激痛が走った。何かが突き刺さったのだ。

「いつて！」

慌てて引つ込めた軍手が黒く染まっていた。流出したインクに間違いない。

「プラマイ、これ見つけたぜ！」

すると、隣にいたワックスが声を上げてからエンジの物を十一朗に見せた。万年筆のキャップに間違いない。十一朗もつかみ出したゴミを取り分ける。その中に万年筆の本体があつた。キャップが外れていたために、ペン先が突き刺さったのだ。軍手を取ると血が滲んでいた。

「うわっ、最悪……」

それでも一回の手掴みで発見できたのは幸運だろう。暗くなると苦戦は確実だった。

「おい。裕貴、八木、見つけたぞ」

十一朗の報告を聞いて、二人が駆け寄ってくる。

万年筆は土で汚れていたものの、原形はとどめていた。色は女物だ。汚れを軍手で拭き取ると、文字が刻印されているのに気づいた。『A Y A K A ・ Y』と彫られている。謎の男と唯一繋がりのある綾花の名前だった。

「おいおい、まじかよ。警察に見つかりとまずかったんじゃないか。

危機一髪だな」

文字を見たワックスが言うが、提出しないわけにはいかないだろう。

十一朗は持ってきた透明のビニール袋の中に、万年筆を慎重に入れた。

「気は進まないけど隠すわけにもいかないよ。証拠隠滅は刑法一〇四条。二年以下の懲役または二十万円以下の罰金。それに八木にはアリバイがあるし、大丈夫だ」

ワックスは「でもなあ」と不安そうに肩を落としながら、覗きこんできた綾花を見た。

その時だ。

「おい、藪から坊主ども。何でここにいるんだ。搜したじゃねえか」怒号ともとれるような野太い声が響いた。十一朗は息をついた。

もう振り返る気にもならない。しかし、搜したとはどういうことだろうか。背後にいるであろう貫野を見た。

「もう何も言う気にならないよ……搜したって？　なんで？」

十一朗の問いに貫野が、また遺書を取り出して見せた。どうやら警察も考えるところは同じらしい。後ろにいる文目は、ミス研部員と会ったのは当たり前というような顔をしている。

「遺書は包装紙だと分かった。調べたら筆記用具店の物で……どうやら、プレゼント用の包装紙らしい。で、店員が程度覚えていて、顧客リストを調べたら」

言いながら貫野は、コピーした紙を取り出した。顧客リストの中に蛍光ペンで印が付けられている部分があった。客名は「八木和歌子」。

見た綾香の表情が歪んだ。十一朗も直感した。綾花の母の名に間違いはないだろう。

用紙を懐に入れた貫野は、一息つくとも十一朗を見た。

「だから搜していたんだ。それに遺書の紙が包装紙と分かった今、どこかに万年筆も落ちているはずだからな。買ったのは高級万年筆

の女物。名前が彫られた特注品で——」

「そつちの考えかた次第では、協力するけれど、どうする？」

貫野の話が終わる前に、十一朗は話を切り出した。さすがに貫野も嫌な表情を見せた。裕貴とワックスも顔を見合わせている。十一朗の手には貫野の言った証拠があるからだ。

「この野郎、先回りしてやがったな。どうして、てめえは行く先々で……」

刑事の勘だろう。十一朗が何を隠しているのか気づいたらしい。狙い通りの反応だ。

しかし、次に見せた貫野の行動は十一朗を驚かせた。親指を立てて駅前の喫茶店を指差す。来いという指示に違いなかった。

「俺は人の手柄を取るガラじゃねえからな……左利きの真犯人の情報をくれた借りは返してやる。他の奴らはどうする？」

聞いて十一朗は感づいた。警察は八木の母親が左利きというのを知ったのだろう。共犯は綾花の母——その段階の捜査を開始したはずだ。

それにしても、この気難しい男の変わりようは、どこから伝染したのだろうか。

十一朗の中でちよつとした推理が働いた。今朝のことかもしれない。

「もしかして貫野警部補。親父に俺が捜査に足突っ込んだ話をしたのを、悪いと思ってるわけ？」

十一朗の問いに、煙草をくわえようとしていた貫野が吹き出した。落ちかけた煙草を何とか空中で捉えて口にくわえる。

「馬鹿言うんじゃないよ。子供の悪さを親に教えるのは、大人の常識だろうが！」

貫野の言動がおかしい。火を点けようとする両手が震えている。すると、

「先輩、捜査会議で左利きの真犯人がいるという話をしたんです。その後に刑事部長に十一朗君の手柄だって伝えて——」

文目が身を乗り出して語り出す。直後に貫野の首絞めが文目に決まった。

多分、こうなることを承知の上で、文目は言わなくていいことも語るのだろうなと十一朗は思う。そうでなければ、こんな暴力的な男と長く組んでなどいないだろう。

しかし、父と貫野の間で、そんな会話が交わされていたというのは驚きだった。事件に首を突っ込んで邪魔をしたという報告だけなら、父の口から「誇りある一人息子」という言葉は出なかったのかもしれない。変な貫野の気遣いに笑ってしまった。

煙草を吸いながら、貫野が歩き出した。後を見ると、裕貴とワックスも付いて来ている。綾花も母のことが気になるのだろう。付いてきていた。

都内から離れた場所なので路上喫煙禁止区域ではないのだが、それでも歩き煙草はどうなのかと十一朗は思う。

「升田の件もあるし、話したいことは山積みだ。それとお前、進路変えたんだって？」

不意に、振り返りもせずに貫野が聞いてくる。

父と進路の話をしたのは今朝だ。情報が流れるのがかなり早い。

一課の警部補が、刑事部長とここまで親密に話するのは稀ではないだろうか。

刑事部長でも人の親か。十一朗は父の裏の姿を垣間見ていた。

「俺、貫野さんと違って最後まで反抗期続けるほど、気合いがないというか、親不孝者じゃないというか……」

「その減らず口、就職したら叩き直してやるから、楽しみにしとけ」

「俺、国家公務員一種試験受けるつもりなんだけどさ。そうすると貫野さんを追い抜くのって簡単なんだよな」

貫野の後ろで文目が含み笑いを続けている。彼の階級は巡査なので、蚊帳かやの外だ。

喫茶店の扉は貫野の手で開かれた。大人数なので一番奥の席に通される。さすがに込み入った話なので、誰かに聞かれるわけにはい

かない。最適な場所だった。

貫野にとつては灰皿があるのが一番の条件らしい。灰を叩き落してから、渡されたメニユーを放り投げた。

「奢^{おご}つてやる。夕飯いらないって親に電話しとけ」

喫茶店とはいってもグラタンやパスタのセットまである。十分に腹を満たせそうだ。

メニユーを聞きに来た店員に、遠慮なしに皆が注文する。貫野は目を細めただけだったが、十一朗は「これ、また親父に告げ口されるな」と思った。

隣にいる文目に「お前は自分持ちな」と言いながら、貫野が十一朗を見た。

「まずモノを見せる。話はそれからだ」

言われて十一朗は拾った万年筆を渡した。刻印を見た貫野は文目に手渡す。

綾香の名前の刻印がある万年筆だ。裕貴とワックス、綾香もやり取りを見ながら不安そうな顔をしていた。

「何で万年筆があるってわかった？」

そして貫野は、誰もが思うであろう疑問を十一朗にぶつけた。

「万年筆で書いた特徴だよ。文字の強弱とか裏抜けとかさ。店でインクの出具合を確認したんだろうな。万年筆はインク注入しないと書けないからさ。これ俺が欲しくて母さんに頼んで、まだ駄目って言われたメーカーなんだ。確か価格は二万五千円だったかな。高いのはインクの流れや持ち手自体が違うから……俺、大学合格したら、絶対に買ってもらおう」

そこまでの価格になると大人の買い物である。しかも、高い万年筆は一生物だ。

他人が引くほど極めた十一朗の万年筆の真髄語りを聞いて、貫野は煙草を吸ってから続けた。

「取引返しに教えてやるよ。升田のアパートのことだ。家宅搜索したら偽ブランド品が大量に見つかった。密輸入品だ。他にも盗難さ

れた宝石類があつた」

「俵井が動揺したのつて、それが理由だったのか。八木、升田つて名前に心当たりはあるか？」

十一朗の問いかけに、綾花は首を横に振った。意識不明の男といい、綾花は事件とは何の接点もない。やはり、綾花の母が何かを隠している気がしてならない。

運ばれてきたコーヒーに、何も入れずに飲んだ貫野が言った。

「升田は意識不明の男から七百万もらうつもりだったんだろつな。そして、他の金蔓が密輸入品に絡んでいる可能性が高い」

皆が頼んだ料理が、場所が狭いと言いたげに次々と運ばれてくる。ちやつかりパスタセットを頼んでいる文目を見て、貫野はまた手帳で彼の頭を叩いた。

十一朗もカローリで頭を回転させようと、運ばれてきたサラダにフォークを入れる。

「俵井は何年か前の貸しつて升田に聞いたつて言つたよな。七百万なんて大金、升田つて人が何年も徴収せずに黙っていたなんて思えないけど」

「そのことなんだが、升田は△所に入っていたんだ。だから徴収できなかつた」

「△所？ 何で？」

「詐欺事件起こしてな。そのあと、取り囲んだ刑事数人を大怪我させながら逃走した。奴の身柄を確保したのは、その事件が起きた二週間後だ。△所に入つたのは八年」

一通り聞いて十一朗は納得した。刑期を終えて金がなくなったので、金蔓に頼つたのだ。

「これで意識不明の男が身元を隠していた理由がわかつたか。七百万の徴収から逃げていたんだ。そして、升田と顔を合わせて争いになつたつてとこだろつな」

しかし、まだ引かかる。この貫野の推理では共犯者の影が見えてこない。

「共犯者の動機は？」

十一郎の問いに、貫野が運ばれてきたサンドイッチのパセリを抜きながら舌打ちした。

「交際相手が金の徴収迫られてんだ。殺す動機は十分じゃねえか」

「交際相手って……決まったわけでもないのに。それに人殺しって、そんなに簡単にできるものかな？ 普通は恨みとかあるだろ？」

「今は人が死ぬのを見たかった理由で殺す奴もいるし、普通の考えじゃ通用しないこともあるんだよ」

貫野は乱暴に二つのサンドイッチを潰すと、同時に口の中に入れた。刑事は早食いでなければ優秀ではないと聞いたことはあるが、目の前で実演されたのには驚いた。

「それと、あの子の母親を事情聴取することになる。勤務地もこの駅だし、事件があつた直前の時間に店を出ていることが分かっている。利き手も左だし、誰も疑わない。残念だがな」

最後の『残念だがな』に貫野の性格が聞いて取れた。刑事に存在してはいけない感情、私情――

綾花の仲間である十一郎を前に思わず口に出したのだ。

しかし、謎が解けていない。それは凶器だ。十一郎は共犯が準備したと予想したが、その話だと辻褄が合わない。凶器を働き先に持つてくるなど、考えられるのだろうか。

十一郎はコンソメスープを飲んでから、貫野を見た。

「そういえば、凶器のこと聞いてないな。刃渡り何センチ？」

「高校生がそこまで聞くか？ バタフライナイフだ。洋画とかで筋肉質のおっさんが指先動かして牽制しながら、刃物出し入れするのを見せびらかす折り畳み式のあれだ」

最後の説明は完全にこちらを馬鹿にしている必要のない説明だ。こういった貫野の大人げないところを十一郎は好かない。

「ますます変じゃないか。女性がそんなの持ち歩くものか？」

十一郎が聞いた瞬間だった。貫野の携帯が鳴った。着メロは何度か聞いているので、すぐに分かった。さすがに会話を聞かれるのは

抵抗があるのだろう。席を立って外に出ようと動く。

ところが、貫野は眼を見開いた。店内に響く声で相手に興奮して聞き返した。

「それは本当か？ 間違いないんだろうな」

言って十一郎に視線を向ける。複数回、応対を繰り返した貫野は外には出ずに、その場で話を終わると席に座った。

深く腰掛けて瞼に手をあてたまま、「くっそ……」と続かない愚痴を言う。

どうにも話しかけづらい雰囲気を見て、文目が息を吸い込んで貫野に聞いていた。

「あの先輩。電話の内容ってなんだったんですか？」

ようやく貫野が仰け反っていた体勢を整えてから、また十一郎を見た。

「認めたくないが、高校生名探偵殿の推理がどんぴしゃだよ。凶器は升田の持ち物だった。しかも鑑識が血液鑑定した結果、刺された順番がわかった。意識不明の男が一番目、二番目が升田だ」

信じがたい情報だった。自殺未遂した男が先に刺されていたとはどういうことなのか。

遺書の謎がますます深まる。そして、共犯だと思われる綾花の母と男の関係も――

「どういうことだよ、それ？ ますます意味がわからないじゃないか」

身を乗り出して聞いた十一郎を、コーヒーを飲んだ貫野が睨みつけた。

「そりゃ、こっちも同じだ。しかも奴を治療した執刀医、今頃になつて気になっていることがあるって、入電してきたらしい。男には刺された傷が三か所あった。一つは今回のモノと思える刺し傷、残りの二つは古傷らしい。しかも、致命傷に近い傷だ」

謎が混在する事件は解決間近と思いきや、更に道を外れていた。

三人の口無したちが形成した鎖の絡み合い――

「過去だ……口無したちが隠す時を遡らないと、この事件の真の解
決はない」

十一郎の中で推理という獣が再び吠えていた。

推理を怠るな。米粒のように散らされた証拠を探せと。

9・真相と嘘

翌日――十一朗と裕貴は授業終了のチャイムと同時に教室を出て、競うように帰宅した。

昼休みに部員全員で話し合い、今日の活動の場を図書館に変更したからだ。

自宅に荷物を置いてから、待ち合わせ場所の図書館で後から来るであろうワックスと綾花を待つ。

閉館時間直前にくる学生は珍しいのだろうか。白髪混じりの館長が笑顔を見せながら「こんにちは」と挨拶してきた。

じきにワックスや綾花も姿を見せるはずだ。十一朗は挨拶を返すと、館長を呼びとめて聞いた。

「あの……僕たち、昔の地元新聞が見たいんですけど、ここに十数年前の記事ってありますか？」

ずれ落ちた眼鏡を人差し指で押し上げた館長が、感心したような声を出す。

十数年前の事件を探そうとしているとは思ってもいないだろう。郷土に関心を持つ若者が、まだ存在してくれていたのかという感慨に耽っている様子だ。

「あるよ。三階の閲覧室だ。とはいっても貸し出しはしていないがね。なんなら出してあげるよ」

勘違いされているが断るのもどうだろうか。話を合わせていたら詳しく聞けることもあるかもしれない。十一朗は「お願いします」と、取り敢えず頼んだ。

館長は「では、三階で待っているよ」と言うと、階段を上がっていった。

十一朗と裕貴も続いて館内に入る。図書館内は本が放つ紙とインクの香りを充満させていた。

これにはリラックス効果があるといわれている。書物の多い場所

に行くと、急に催すという者が多いらしい。

ところが、そのリラックス効果が作用しなかったのか裕貴は頬を膨らませていた。

「断ればいいのに。勘違いしてるよ。館長さん」

はつきりと理由を言えればいいのにとという意味だろう。しかし、事件の記事を見せてくださいと言ってしまうと、更に勘繰られてしまうとも考えられる。

十一朗は何となくの言い訳をすることにした。

「けど、あんな顔されたら遠慮しますとも言えないだろ。あ、ワックスたち来た」

十一朗は窓の外にワックスと綾花の姿を確認した。話題を切り替えるには丁度良いタイミングで助かった。大きく手を振ると、ワックスも気づいて手を上げる。

「ねえ、ああやって見ると、ワックスと八木さんってお似合いじゃない？」

突然、裕貴が思いがけない発言をした。女子にはそう見えるのか。無理あるんじゃないかと十一朗は目を細めてみる。逆立ちしたってお似合いのカップルには見えない。

「俺の目ではどう見たって、ヤンキーと大和撫子の和洋折衷にしか見えないんだけど」

「えー、プラマイ見る目ない。容姿じゃなくて、雰囲気で想像してよ」

そんな話をされているとは知らないであろう、ワックスたちと館内で合流した。

「ここって飲食厳禁なんだよな。俺、こういった静かな場所は、昔っから苦手なんだよな」

緊張気味のワックスが落ち着かない様子で館内を見回す。平日の午後なので人影もまばらだ。これなら集中して作業に打ち込めそうだ。十一朗は先頭に立って三階へと向かった。

十一朗たちが図書館にきて求めた資料。それは、意識不明の男が

致命傷に近い傷を受けたであろう、事件の記事だった。

別れ際に貫野も、その点に着目するかと告げて帰っていった。

とはいっても警察も、殺された升田の周辺の捜査、謎の男の張り込み、綾花の母の事情聴取など、やりたいことは猫の手も借りたいほどあるはずだ。

三階に着くと館長の姿があった。既に机の上に頼んだものが積み上げられている。地元新聞の縮刷版だ。思った以上の量で、館長に出してもらえたことを感謝した。

「パソコンでも閲覧できるよ。尤もこの人数なら手分けするのだろうが。では、頑張つて」

館長は踵を返すと、館長室のある階に戻っていった。有り難く好意を受けて行動を開始する。

「見つけるのは傷害事件だ。探す年代は十数年前。被害者の名前は分からないから、これかもしれないというものがあつたら、俺に教えてくれ。やるぞ！」

十一郎が分けた縮刷版を見て、ワックスが吐息の混じった声を上げた。十数年前から、現在に至る記事は膨大だ。ネット小説を読み慣れていると思われるワックスだが、新聞記事と小説の文体は違う。空白もない黒に近い紙面を全て読めと言われたらと思うと、吐息を出すのも頷けた。

「全部読めと言っているわけじゃないんだ。傷害事件だったから、傷とかそいつった文字を気にして抜き出してくれればいい。後は俺が選別するから」

十一郎が言い終わるより先に、裕貴と綾花は選別を始めていた。特に綾花は速読なのか、手の動きが早い。推理小説で鍛えてきた、十一郎でも負けてしまいそうだ。

もしかしたら、事件ルポ本を読むのも好きなのかもしれないな。十一郎はそう感じた。

選別された資料が次々と十一郎の前に置かれていく。殺人、傷害、事故、強盗。

十数年前のほうが事件事故は少ないはずだが、こう溢れ返ると犯罪はなくならないのかと憂鬱になってくる。

作業をしながら流れ作業って、こんな感じなのかなと思えてきた。いや、刑事になっても同じような地道な捜査をするのだろう。探偵になりたいと思っていた時とは、また違う感覚が十一朗の中で芽生え始めていた。

その時だ。誰よりも早かった綾花の手がとまった。一枚の記事を見ながら震えている。ミス研の部室で見た、あの時を彷彿とさせるものだった。

「嘘、そんなの聞いてない。そんなの知らない」

綾花は念仏のように言葉を繰り返していた。途端に顔面蒼白になって噎せ始めた。慌てた裕貴が駆け寄る。十一朗は駆け寄る前に、綾花の異常原因を察知した。

「過呼吸だ！ 落ち着け八木……俺の手が見えるか。俺の手の動きに合わせて呼吸をしろ」

おそらく、新聞記事から信じ難いものを発見してしまったのだろう。その為に、精神的に混乱して過換気症を引き起こしてしまったのだ。死に直結するような症状ではないが、最悪の場合、失神することもある。

十一朗は綾花の正面に座って手を広げ、冷静に呼吸をすることを指示した。二酸化炭素の排出量を押さえるか、血中の二酸化炭素濃度を元に戻すのが有効な対処法とされているからだ。

拳を握り広げてを繰り返すうちに、綾花の呼吸は正常に戻り、顔色も少しずつ赤みがさしてきた。

「もう大丈夫そうだな。無理しなくてもいいから、帰って休んだほうがいいよ」

取り敢えずは安心だ——と、十一朗が思った途端。綾花が突然、落涙しながら抱きついてきた。しかも異常の前と同じ言葉を何度も繰り返している。

十一朗は頭の中が真っ白になってしまった。一瞬、紅潮している

のではないかと考えた。そして、目の前にいる裕貴と目が合った。すると、熱くなった体が一気に冷却されていく。

「オッケー。よし、落ち着こう。とにかく全員席に戻って……話はそれからだ」

皆に指示したものの、鼓動が静まらない。一番、落ち着いてないのは自分なのではないか。綾花の両肩をつかんで離れた十一朗は、彼女を諭しながら席に着こうとした。

すると、綾花が十一朗の腕を取った。離れないでということか――困惑するしかない。

しかし、彼女の差し出したもう一方の手に、縮刷版があることに気づいた。

「その記事の中に、父の名前が……私、知らなかった。ずっと」途切れ途切れで話す綾花の手から縮刷版を受け取った。十一朗の目に記事の見出しが飛び込んできた。

『輸送車襲撃事件』

発生したのは十一年前、十一朗が小学一年生の時だ。縮刷版なので内容は詳細ではないが、残っていたところを見ると、かなり凄惨な事件だったのだろう。

『停車中に襲われた輸送員が一人死亡。一人重体。犯人は逃走中』と印刷されていた。それよりも目にとまったのは死亡した人物の名前だった。『八木^{やぎ}彰^{あき}夫』。

「まさか八木……君のお父さんって」

十一朗が聞いても、綾花は答えられずに首を横に振るだけだった。『知らなかった。ずっと』という彼女の言葉が全てを表していた。

綾花はこの記事を見て初めて知ったのだ。父が死んだ本当の理由を――

「君のお父さんが亡くなっていたなんて、初めて聞いたよ」

人には語りたくない過去がある。綾花もそうだったのだろう。しかし、彼女は否定するかのように首を振った。

「父が亡くなったのは、私が小学生になる前です。父は深夜まで仕

事をしていましたから、思い出は悲しいことに少なく……それよりも、何で母が嘘をついていたのか」

「嘘？」

「事故で死んだと聞きました。殺されたなんて一度も聞いていません」

「子供に話すのは迷いがあつたのかもしれない。多分、大人になってから本当のことを教えようとしたんだと思うよ」

女手一つで育ててきてくれた母がついた嘘——綾花にとっては、父の死の真相を知るよりも、そちらの方が重苦を伴う衝撃を受けたのだろう。

十一朗は記事の続きを読んだ。

『一人死亡。一人重体。犯人は逃走中』重体の男の氏名が載っていた。『和田^{わだしげ}繁樹』。

「和田って名前に心当たりは？」

これにも綾花は首を横に振った。彼女は何一つ事件の真実を知らない。

綾花に隠し通した母の嘘、十一年前の事件には何かが隠されている。和田繁樹という男の素性を調べる価値があるかもしれない。

十一朗は携帯を取り出した。事件の詳細を忘れないように、十一年前の記事の写真を撮った。そして、貫野に連絡してみることにする。

しかし、いくら待っても反応がなかった。出られないほど忙しいということなのだろうか。そろそろ留守番電話サービスに繋がるかなと思った時、通話音が切れて貫野の声が響いた。

「誰かと思えば、お前か。ちょうど掛けようと思っていたところだ。お互いに都合がよかったということか。それにしても受話器の向こうが騒がしい。一課にいるのだろうか。文目のちよつとした声が混在してきた。」

「駄目ですよ。その登録名、見つかったら首切られますよ。バカ息子って……」

十一朗は息をついてしまった。前に裕貴が貫野を巡査部長と登録していたのだから、何となく予想はしていたが――

十一朗も貫野警部補ではなく、登録名を変更しようと思った。

「ちょうど掛けようとしたところって？ 何か進展でもあったのか？」

質問に「またため口かよ」と貫野が愚痴る。もう耳にたこができるほど聞いた。今更だ。

「意識不明の男が覚醒した。あと、お前んとこの部員の母親が取調室で事情聴取を受けている。あとは升田の所持していた盗難品だ。宝石は転売する予定があった。かなりの高額値の買い取りだ」

それは捜査一課も慌ただしくなるはずだ。通行不可だった三本の道が同時に開通してしまったのだから――

「今は八木にそのことは伝えない。いや、伝えられないよ。あと会えないか？ 焙煎コーヒーの喫茶店、覚えてる？」

これに電話向こうの貫野は敏感に反応した。高い笑いを一声だけ出す。

「何か見つけたって感じだな。いいぞ、こっちもそれなりの土産話を用意してやる」

思いがけない貫野の言葉に、十一朗は耳を疑った。変わった。いつからだ。

そうだ。父に進路の話をした後からだ。父が裏で糸を引いているのかと考えたが、そんなことはないはずだと否定した。息子といつても一般人に話すなど有り得ない。では――

「あのさ、貫野さん」

「積もる話は会ってからだ。切るぞ。携帯料金払ってんの、親父さんの給料からだろ」

聞く前に貫野は電話を切った。変なところで気が利くのだなと十一朗は思った。

裏で糸を引いているのは刑事部長の父ではない。おそらく、きつと――

「裕貴、俺さ。進路変えてよかったと思うよ。まだ、何となくだ
ど」

携帯をしまいながら裕貴に話しかける。しかし、なぜか睨みつけ
られた。意味が分からない。

そして、裕貴は黙々と出された記事を片付けていく。片付けをし
ているところを見ると、電話の会話から次の行き先を察したのだろ
う。

何とか機嫌が悪い理由を思い出そうとして、数刻前の映像が思い
浮かんだ。

あれだ。綾花に抱きつかれた時の、裕貴の形相。

そして、ワックスが十一朗の肩を叩く。続けて耳元で囁いた。

「なあ、彼女の胸当たんなかった？　どんな感触だったよ？」

「変なこと聞くなよ。あれは不可抗力」

「オツケーって、そういう意味じゃなかったのか？」

そういえば、そんなことを言った気がする。動揺して適切ではな
い発言をしていたのだ。裕貴が怒るのも仕方ない気がする。

振り返ると裕貴は八木の手を取って歩きだしていた。綾花にだけ
声を掛けて、自分とワックスには無言の態度を通してるのが怖い。
それでも足は図書館を出て、焙煎コーヒー店に向かっていた。

「ちょ、待ってって裕貴」

慌てて十一朗は裕貴を追いかけた。幼馴染みだけに、怒らすと
怖いことは重々承知している。とにかく、機嫌を直してもらわない
ことにはかなわない。

追いついたと思った瞬間、裕貴が振り返った。鬼のような形相は
消えていた。

「私も大和撫子って言ってほしいんだけど」

思わぬ裕貴の願いに十一朗は啞然とするしかない。男として絶対
服従なのは、どうなのだろうかと理性が叫んだ。

「馬鹿なこと言ってないで、喫茶店行くぞ」

無理やり裕貴の手を引く。そして、父の死の真相を聞いて落ち込

んでいる、綾花の手もつかんだ。

行き先は喫茶店——真実はきっと酷なものだろうが、目を閉じるわけにもいかない。

「大丈夫。俺達ミス研はいつでも八木の味方だし、みんな家族同然ともいえる仲間だ」

追いかけてくるワックスの音が、何となく哀愁を漂わせていた。

10・柵のない場所

焙煎されたコーヒーの香りが鼻腔をくすぐるのは久しぶりだった。店の扉に取り付けられた、入店客を知らせる鈴の音も変わっていない。

十一朗たちミス研一同が注文する前に貫野は姿を見せた。後ろにいる文目は手帳を開いて思考中だ。

「コーヒーくれ」

前と同じように貫野は店員とすれ違いざまに注文した。文目も倣って「僕も」と言う。まるで数十年間通っている常連客のようだ。

店員は十一朗のところにも来て、注文を取ってから奥の方へ消えた。見届けた貫野は椅子を引くと深く座り、偉そうに体を仰け反らせた。

「さーで、どこから話そうか。それとこいつは取引だっていうこと、わかっているよな？」

何で立場が逆転しているのだろうかと十一朗は思う。手元にあるのは重要証拠だ。貫野がどれほどの情報を手にしてきたのか知らないが、釣り合うような気がしない。

十一朗は先制攻撃を仕掛けようと考えて、綾花の働きで見つけることが出来た十一年前の事件を書き取った紙を出した。

「その事件の『和田繁樹』^{わだしげき}って誰だか調べてほしいんだ。俺の推理が正しければ、意識不明の男の名前だ。それと八木の父親がその事件で亡くなっている」

貫野が慌てて紙をつかみ取った。先制攻撃の衝撃はかなりのものだったらしい。それでも、十一朗は満足せずに隣に座る綾花を見た。予期せず知ってしまった、父の死を引きずっているのではないかと心配したのだ。

気丈にも綾花は表情に出してはいなかった。いや、それよりもと十一朗は思う。彼女を連れてきたのはよかったのだろうか。綾花の

母が取り調べを受けている話題が出るのは確実だからだ。

「地元新聞の縮刷版か……考えたな。刑事でもここまで真剣に取り組む奴はあまりいないぞ」

貫野が珍しく褒めた。やはり進路を決めてから対応が変わっている。まるで別人だ。

裕貴も貫野の性格を熟知しているので、目を丸くしていた。文目は更に驚いたのか口が開いたままだ。

貫野は妙な反応をしたままの文目に紙を渡すと、綾花を一瞥した。母親が事情聴取を受けていることを、話すか話さないか迷っているのだ。代わって十一朗は話を切り出した。

「犯人が逃走中って書いてあるけど、その事件って解決してないのか？」

「十一年前じゃなあ……俺が刑事になったばかりの頃か。よく覚えてないな。解決してないなら、特命が捜査しているはずだ」

特命——警視庁特命捜査対策室は、過去の重要未解決事件を継続的に捜査するチームである。

彼らが事件解決に努め、殺人事件などの凶悪事件の時効廃止が施行された今、強盗殺人犯の逃げ道はないといってもいい。敢えていうなら『死』だけだろう。

貫野が覚えていないのなら、聞いても仕方がない。十一朗は貫野を再び見た。

「刑事になったばかりの頃って……貫野警部補って何歳？ それで未婚だろ」

「ちよつと黙れ。大人にはいろいろあるんだよ。それよりも覚醒した男は俺だけでやったの一点張りだ。で、店の防犯カメラを見たら万年筆を買いに来たのはその男だった」

貫野の説明を聞いて十一朗は息を吐いた。やはり、推理通りだ。

男は何も語ろうとはしないだろう。左利きの共犯を庇っているのだ。今のところ、左利きの共犯に近い存在は綾花の母だ。しかし、万年筆を買いに来たのが男なら、綾花の母が疑われる理由は、顧客リ

ストに名前が記載されていたからという理由しかない。

勝手に名前を借りたと男が言えばどうだろうか。一方的に想いを寄せていた。共犯などいないといえど……決定的な証拠はない。釈放は時間の問題だろう。

しかし、十一郎が渡した記事で謎の男が『和田繁樹』と判明したのなら、十一年前の事件で命を落とした綾花の父、そして妻である母との関係も繋がる。

皮肉なことだが、綾花は記事を見つけたために自分の母の首を絞めている。十一郎は事件が解決した瞬間、綾花との関係が壊れないだろうかと考え、息が詰まりそうだった。

それでも、十一年前の事件が始まりだというのなら調べるしかない。今は、彼女の母の無実を証明することが、ミス研の絆を守ることに繋がる。そう信じた。

「共犯は何て言ってる？」

十一郎は綾花の母の名前を出さずに聞いた。貫野も察したのか、「そうだな」と続けた。

「知りませんと言ったきり完全黙秘だ。家宅搜索って話も出ているが、証拠が出てくるのかは疑問だな」

警察が求めている証拠は、返り血が付いた服や足跡を残したハイヒールだろう。それも廃却処分した可能性が高いと思われた。

「そっちも口無しか……それに謎が多すぎる」

十一郎はノートを取り出した。自殺屋事件でも活躍した物だ。事件内容を整理するように、十一年前の事件の概要をまず書き取った。「俺の推理を書くからよく見てくれよ。十一年前、輸送車襲撃事件が起きた。輸送員が一人死亡、一人重体、犯人は逃走中。死亡した輸送員は八木の父親だ。これは確かな情報だ。そして重体は自殺未遂した謎の男。これは俺の予想。執刀医が言った、二か所の致命傷に近い傷は、この時に刺されたものだろうな……そして、逃走中の犯人は」

十一郎は手をとめて貫野を見た。そして犯人の名前を書いた『^{まず}升

だじゅうじ
田龍治』。

漠然とした推理だ。そのため、後ろに疑問符を付ける。

綾花の表情が変化した。十一年前に自分の父親を殺したとされる男の名前。知った衝撃は計り知れないだろう。

部外者である文目も水を零しかけ、裕貴やワックスも落ち着くために水を同時に飲むほどだ。

貫野は目を見開いてから、その場に居る誰よりも多く水を飲んだ。「待て待て、行き成り何てこと書いてやがる。未解決事件だぞ。犯人特定するんじゃないやねえ。俺が特命に殺されちまう」

貫野ほどの暴力気質の男が言うのだから、冗談ではないのだろう。確かに十一年間も犯人を追いかけている特命に「犯人を見つけました」などと言ったら、怒りの矛先を向けられるどころか突き刺されそうで怖い。

十一朗はそれでもかまわずに、ノートに推理を書き綴っていく。

「そうでないと、三人の接点が見つからないんだよ。だっておかしいと思わないか？ 貫野さんは、升田は貸した七百万を謎の男から徴収しようとしたんだらうって言ったろ。けど話では、刺された順番は意識不明の男が一番目、二番目が升田だって言った」

「それがどうした？ 争ってそうなったんだろ」

「バタフライナイフは升田の所持品だろ。それ聞いて、変だと思わないか？」

十一朗は更にノートに書き込んでいく。もはや、文目や裕貴たちは傍聴人でしかない。ただ、息を呑んでノートを覗きこむだけだ。

落ち着くためか、運ばれてきたコーヒーを貫野が飲んだ。

十一朗も運ばれてきた紅茶に砂糖を入れて混ぜる。回すスプーンとカップの当たる音が、周囲の客の声に混じって溶け込んでいく。全員が話の続きを待っていた。

「七百万もの大金を貸した相手を殺そうとするかなって思ったんだ。徴収するまでは絶対に殺そうとは思わないはずだろ。だとしたら、殺すそうとする理由があったとは思えない」

その理由が十一年前の輸送車襲撃事件ではないか。謎の男は升田が犯人だと知っていたのではないか。そこで話が拗れて言い争いとなり、お互いが予期せぬ結果が起きた。

升田が和田繁樹と思われる男に襲いかかり、刃物を奪い合う格闘戦になった。刺された和田を助けようとして左利きの犯人——今では八木の母と推測されているが、彼女も争いに参加して升田を殴打。最終的に二人でとどめを刺したのではないか。

貫野が頭を乱暴に搔いた。この喫茶店は全席禁煙なので、喫煙で彼の苛立ちを紛らわせることは出来ない。

「十一年前の事件と今回の事件の繋がりが……やばいな、特命に喧嘩うつることになりそうだ。嫌なんだよなあ。何やっていたんだっていう話にもなるし」

貫野のぼやきを聞いて、十一朗は笑ってしまった。

普段、威張り散らしている貫野にも天敵がいるらしい。深く考えてしまえば、刑事部長の息子である自分も貫野の天敵なのだろうが。「特命に言わなくても資料室に行けばいいだろ。事件が起きた日時も調べるものもわかってる。この事件に他の刑事がノータッチなら、貫野さんが代表して調べるよ。主任目指しているんならさ」

「お前、馬鹿だろ。個人行動したほうが、出世に響くんだよ」

「俵井を追い詰めた時に言ったよな。『俺がまっとうな刑事じゃな』ってことは、もう理解してるよな」って。あれは飾りの言葉？

俺はカッコいいと思ったけど」

褒められるなどということに無縁だったのか、貫野は視線を落としてコーヒーを飲んだ。相当、早く飲んだのだろう。カップを置いて大きな息を吐いた。

「和田繁樹って男と十一年前の事件の詳細でいいんだな。お前、就職して俺を追い抜いたとしても絶対に威張るんじゃないぞ。これは取引というよりも貸しだ」

貫野は強引な将来設計案を申し出てきた。十一朗が就職して何年後になるのか、先は見えていないというのにだ。

貫野の隣で文目がメモを取り続けている。十一朗はメモを覗きこみながら言った。

「あとさ、男が意識を取り戻したのなら、質問してくれないか。電車で飛び込み自殺をしたのは、古傷と今回刺された傷を隠すための偽装だろうって」

さすがに連続で頼んだために、貫野が立ち上がった。いや、怒るというよりも表情には衝撃が浮かんでいる。文目も手をとめて聞いている。

「あの飛び込み自殺って、そのためだったのか……そういえば轢断死って聞くな」

飛び込み自殺は悲惨としかいいようがない。隠語で『マグロ』と呼ばれるその死は、『ブツ切り』から取られているのだ。もし、その悲惨な状況になっていたら、男が刺されていたという事実は闇に消えていた。そう考えてもいいだろう。

貫野は剃り残した顎のヒゲを触りながら、納得したように唸った。「刺された傷を隠すには、飛び込み自殺が一番いい方法だったわけか。執刀医が遅れて入電してきた意味が、今わかった。飛び込み時の傷と刺創の区別がつき難かったんだな」

「今更？ とつくによんでいると思っていたよ」

たった数百メートルの間で遺書を書く『私が殺しました。申し訳ありません。責任を取って死にます』と。責任を取る自殺を決めた男が、人に迷惑をかける飛び込み自殺を選ぶだろうか。

そう感じた時点で十一朗は、何かあるのではと考えていた。

今は執刀医の入電で、ようやく男の自殺の動機が分かったという感じだ。

「直接、十一年前の事件を聞いても、口は割らないと思うんだ。だけどそれなら、相手が違うといっても牽制することは出来る」

「お前さん、お得意の誘導尋問ってやつか」

「誘導尋問は俺じゃなくて、貫野さんの仕事になるんだから、よく覚えておいてくれよ。そして、更に追及してくれ。刺された傷を隠

そうとしたのは、何故かって」

聞いて貫野は気づいた様子だった。その尋問が、左利きの人物を庇っていないかという質問に直結するものだというのを。十一年前の事件を掘り出す質問だということを。

「とんでもない爆弾だな。だが、奴は押し黙ると思うぞ」

「言つたる牽制だつて。男が左利きの真犯人を庇っているとしたら、残された行動は一つになるんだ。自分が犯人だと認めなければ、左利きの犯人を守れなくなる。だから、十一年前の事件も今回の事件の真相も自白せざるを得なくなるんだ」

「揺さぶりか……刑事部長が割らせの東海林と言われていたって話を思い出した」

言つてから貫野は場が悪そうにカップを取った。しかし、中身は空だ。

「別に口ごもらなくていいよ。親子だつて言いたいんだろ」

紅茶を一口した十一朗は貫野を見た。複雑な表情を少し覗かせた貫野は、誤魔化すように隣にいる文目のメモを覗きこんだ。

この貫野の行動の意味を十一朗は知っている。貫野の両親は弁護士だ。刑事は犯人を追いつめる責務がある。弁護士は犯人を守る立場になる時がある。いわば犬猿の仲だ。

刑事部長の父を追いかけ始めた十一朗を前にして、何も感じていないはずがなかった。親子という繋がりを強く意識しているに違いなかった。

同時にここに来る前の会話を思い出した。裏で糸を引いているのは父ではない。貫野なのだろう。

早く気づくべきだったのだ。左利きの真犯人の案を出し、それが十一朗の手柄だと刑事部長の父に教えた。そう文目の口から聞いた時点で――

解決への道筋が見えたため、貫野が立ち上がった。置いてある領収書を見ると、また合計金額より多い数の札を置いた。

「じゃあ、俺達は行くぞ。高校生名探偵殿のご依頼を果たさなけれ

「なりませんので」

相変わらずの嫌味口調だが、十一朗は嫌な気分にはならなかった。それよりも――

「あのさ、貫野さん」

十一朗の呼びかけに貫野が振り返った。敬称を付けたことはあまりない。そのため困惑した表情だった。

「協力に感謝」

敬礼して告げた十一朗に、貫野が吐き捨てるような声を出して返した。

「柄にもないこと言うんじゃないよ。調子狂うじゃないか！」

出ていった貫野の背中を見ながら十一朗は感じていた。

あの貫野相手なら、柵しからみに縛られることなく共に行動できそうだと。

11・吐露

翌日、都立明鏡止水高等学校ミステリー研究部の部室では、部長席の周りに全員が集まるといふ情景が形成された。

事件の概要について十一朗がノートに記していく。複雑に絡まった十一年前の事件と今回の事件との点と線、被害者、被疑者、重要参考人の関係。

それは、ミステリー研究部部員には無視できないものになってしまった。

何故なら、今日来るはずの綾花が学校を休んだからだ。先日まで語り合っていた仲間は、自分たちが想像していた以上に人生最大の苦難に立たされていた。

まず動きを見せたのがワックスだった。得意のペン回しを数回だけすると、重い息をついてペンケースにしまった。

「一年の間で嫌な噂が広がってる。八木は殺人犯の娘だってさ」

込み上げていた怒りを抑えきれずに、ワックスはペンケースを持った手を震わせていた。続いて裕貴も十一朗の顔色を窺うように上目遣いで続けた。

「あと……八木さんを入部させた理由は、事件の証拠をつかんで警察に褒賞をもらうためだろうって」

裕貴が途中で話題をとめたのは、噂を聞いたという生易しいものではないからだろ。きつとクラスの者に直接言われたのだ。

十一朗の知らない場所で、部員全員に精神的なダメージが与えられている。

何故、自分には言いに来ないのか――

十一朗は歯噛みした。沸騰爆発しそうな感情は、頑丈な精神という箱に詰め込むしかないと分かっていた。それでも自分はまだ社会人ではない。大人からみると精神が未発達の子供だ。まだ箱の強度が足りなかった。

二人の話を聞いて部室を飛び出した。廊下の窓を開けて、中庭で騒いでいる生徒たちに視線を向けた。誰が敵か味方か――疑心暗鬼になっていた。

「何も知らないくせに、騒ぎ立てて何が楽しいんだ！」

抑え込んでいた怒りを爆発させたところで、十一朗はワックスに羽交い締めにされた。

「ちよつ、落ち着けて。俺たちは大丈夫だからさ。また得意の推理で、他の奴らの鼻の穴開かせてやろうぜ！」

「ワックスの言う通りだよ。この前まではミス研に入部したくて来ていた奴らだよ。今は、推理！」

十一朗は部室に押し込まれながら、裕貴が言ったことに驚いた。

『奴ら』女生徒の口から、裕貴の口から卑下の主語が出るとは思ってもいなかったのだ。

自分よりも冷静に分析しているのは、この二人の方かもしれないと十一朗は感じた。

真実を説くことが先なのだ。それが学校を休むことしか出来なかった綾花のためにもなる。今はそう信じて、ありったけの推理力を発揮するしかない。

父の背中に追い付くために、そして事件の情報を語り、手を貸してくれている貫野の期待に応えるためにも――

十一朗は事件概要をノートに書く前に空を見た。必死に事件を追っていたことで、自分が最も冷静に分析できる前段階の行動を忘れていた。

「男は八木の携帯の電話番号が書かれていた紙を持っていた。これは八木と男の接点がどこかにあることを意味している。それはおそらく十一年前の事件だ。刺された順番は被疑者が先、そう考えると目的は金じゃなくて脅しだ。そして升田が憤怒の表情で死に至ったことから、怨恨が裏にあったと考えられる」

十一朗の話を聞きながら、裕貴は確認するかのようにノートを見た。

「八木さんのアリバイって、まだ貫野さんに聞かれていないよね？」
「今日、八木が学校を休んだのは、噂から逃げる理由もあるんだろうけど、事情聴取されている可能性もあるな」

「貫野さんとか、お父さんからは何も聞いていないの？」

「いくら俺が刑事部長の息子でも、そこまで教える義務は二人にはないよ。それに貫野さんにも考えがあるんだと思う」

話が終わったところで、裕貴が妙な含み笑いを見せた。何となく理由は察した。貫野の言葉を借りるなら、敬称を付けるのは『柄にもない』ということだ。

「八木が事情聴取されていたとしても大丈夫。レシートがあれば、警察もコンビニの防犯カメラで確認してくれる。それでアリバイ成立だ。問題は被疑者が隠している真実と八木の母親が黙っている理由だ。どちらかが落ちたら終わりだろうな」

これに裕貴とワックスが息を呑んだ。『落ちたら』それはどちらかが共犯の存在と十一年前の事件の謎を語ることになる。

「なあ、プラマイ。俺、心配で仕方がないんだ。主犯が協力者に口止めしておきながら、早々に自白して協力者に罪をかぶせたりとか……そんなことにならないか心配で」

「謎の男が八木の母親に、罪をなすり付けるとか？ それは絶対にないよ」

十一朗はワックスの心配事を一蹴した。

自殺を決めた男が守ろうとした共犯者に罪をなすりつけるとは思えない。昨日の自分の推理にも自信があり、確信があった。

その時だ。

「東海林さーん」という声が聞こえた気がした。裕貴とワックスを見ても動きはない。

幻聴か。疲れが耳に出たらしいと思って、十一朗は聞き流す。

「くそがきー」

すると、今度ははつきりと声が聞こえた。裕貴とワックスも顔上げて十一朗を見る。

廊下に駆け出して窓から校門の方に目をやると、貫野と文目の姿が校門近くにあった。どうやら初めの声は文目だったらしい。二度目の貫野の叫びで気づいたわけだ。

周囲の生徒の視線が気にならないのか、文目が大きく手を振っている。本当に大人なのだろうか。恥ずかしいことこの上ない。

十一朗は思わず頭を抱えてしまった。裕貴はというと応えるように手を振り返している。

「何で直接学校に来るんだよ。それに来たとしても呼び出すならメルだろ……裕貴、応えるのやめろって。愛人と思われるぞ」

「それ、考えすぎじゃない？ それに応えないと、いつまでも大声出されちゃうよ」

もう一度、あの声で「くそがきー」と呼ばれたら堪らない。

慌てて十一朗は部室に戻ると、事件の概要を書き取っていたノートとペンを手にした。

「来なくていいよって言っても来るんだろ？」

部室を出た瞬間に目が合った裕貴とワックスに声を掛ける。二人は真剣な眼差しを向けたまま、返事は言葉ではなく首を縦に動かした。

ミス研部員全員の意思は一つだ。事件の真相が知りたい。綾花の母と綾花を救いたい。

ともに事件を経験して解決した仲間たち。ミス研部員は友達や仲間以上の存在なのだ。それは十一朗だけが思っていることではない。裕貴もワックスも同じはずだった。

校舎別館の最上階にあるミス研の部室は、校内全体をみると校門に辿り着くまで時間が一番かかる場所とっていい。

貫野たちがいる校門に着くと、運動部数人が活動をとめて様子を窺う姿が見えた。

綾花が休み、そして中庭に向かつての十一朗の叫び。ミス研部は本日一番の注目株といってもいいだろう。更に得体の知れない大人も追加だ。気にしない方がどうかしている。

大声で十一朗を呼んで注目させたのは貫野のはずなのに、まるで野生動物のような鋭い眼光を向けて運動部員を威嚇していた。

「どうして、学校に直接来るんだよ」

二人の予想外の行動に呆れてしまったのが先で、オブラートに包んで言うことが出来なかった。

十一朗の言葉を聞いた貫野が、大きな息をついてから煙草の箱を取り出す。

「俺の苦勞も少しは察しろ。個人行動しているんだ。他の奴らに見つかるのが嫌なんだよ」

貫野が言う他の奴らとは特命のことだろう。未解決の殺人事件を取り扱う警視庁特命捜査対策室に配属されるメンバーは、その事件捜査をしていたメンバーやベテラン刑事で構成されている。

当然、捜査が継続されている事件を彼らは扱っていない。そんな未解決事件が現在の事件に直結してしまった可能性がある。

貫野の言葉には、ある意味も含まれていて、十一朗はすぐに読み切った。

「その答えは、謎の男が十一年前の事件と関わりがあつたってことでいいんだな？」

「もう男じゃない。和田繁樹だ。十一年前の事件で重傷を負った男。八木彰夫の仕事仲間であり、現場に落ちていた万年筆の顧客リスト名にあつた被疑者八木和歌子とも関係があると見ていい。互いに関係は否認しているけどな」

十一年前の事件と現在の事件の繋がりが見えてきた。そうなる下次に注目すべき点は、十一朗が貫野に頼んだ和田繁樹への追及、誘導尋問の結果だ。

貫野は煙草に火を点けると、紫煙を弄ぶように途切れ途切れに吐き出した。

「お前の指示通りに和田繁樹を追及した。そうしたら、何て答えたと思う？ 二人で八木和歌子を取り合つて、最終的に殺し合いに発展したんだそうだ。万年筆は彼女の娘の気を惹くためのもの。自殺

未遂をしたのは、見捨てられたからだそうだ」

「だとしたら、何で飛び込み自殺を……」

これには裕貴が反応した。自殺と轢死を利用した古傷隠し。そうまでして隠そうとした理由は、複雑なものに違いない。

口無したちが隠し通す記憶。命懸けで守る男の何か――

十一朗は自分より裕貴の方が、男が共犯を隠し通す理由を感じ取っているのかもしれないと思った。

「十一年前の事件の話は追及した？」

「ああ、そんな事件もありましたねと言った。まさか調べられるとは思っていなかったんだろうな。ただそれっきり黙秘だ」

男は自分に不利な質問をされた時には黙秘しようと前以って決めていたのだろう。取り調べをする際は、被疑者に冷静になる時間を与えないことが常識とされている。冷静になった犯人は逃げ道を探す。刑事が次に何を聞いてくるのか、予想して計算づくの答えを何通りも脳内に用意する。

その時、刑事にできることは足を棒にしながら駆け回り、汗水垂らして拾い集めた証拠を叩きつけることくらいだ。

被疑者が絶対に逃げきれない証拠だけが、相手を追い詰める逮捕の鍵となる。

ところが今の状況は違う。和田繁樹は全面的に殺しを認めている。自分が主犯だ。共犯はいないと言い続けている。

相手は十一年前の傷隠しのために自殺未遂までする男だ。ボロを出すようなことはしないだろう。更に現在と過去が繋がる難しい状況。

十一朗はノートに聞いた内容を書き込みながら、貫野を見た。

「嫌な流れになってきているな……警察内部の動きってどうなっているんだ？」

十一朗の功績を知っている貫野であっても、一般人に内部事情を話すのは迷いも生じるだろう。

しかし、十一朗は分かりながらも聞いた。嫌な予感的中してい

るのではないか。その確認を取るために――

「やっぱりお前は憎たらしいガキだな……全てお見通しって感じでよ。刑事部長も懸念していたな。捜査一課が扱う現在の事件と特命が扱う十一年前の事件、それと升田がいた暴力団を扱う組織犯罪対策部が扱う事件。はつきりいつて、今回の事件はこの繋がりが壁になっている」

貫野が吸いきった煙草を落として踏み消す。

どうしようもできない苛立ちか――すると、文目がメモを開きながら呟いた。

「全員が全員別行動しているようなものですからね」

貫野が絶妙に隠していた警察内情の痛いところを、文目は気にもせずに単刀直入に突いた。相棒の無神経な会話に、貫野はこめかみに青筋を立てながら、踏み消したタバコを拾う。

「その別行動を俺たちもしているんだよ。警察庁は主犯逮捕で解決って流れになってきてんのに、十一年前の事件って……板挟みみたいな捜査してよ」

貫野の愚痴を聞いて、十一朗はやはりと感じた。

証拠が見つからない事件となると、解決はお手上げ状態となる。

主犯が全面的に罪を認めたというのなら尚更だ。

「俺が貫野さんに頼んでいる捜査内容は全部推理からだからね。そういう判断になるとは思っていたよ」

十一朗の言葉に文目が身を強張らせながら目を見開く。言っではいけない引き金に手を掛けてしまっていたと気づいたらしい。

弁解するかのように、体を乗り出して言った。

「十一年前の事件を徹底的に捜査するのは大事なことだと思いますよ。暴力団の件も。僕は別行動を否定したわけではなくて……別行動も時には必要であるという話を」

「少し黙ってろ。今のは問題発言だ」

即座に貫野が文目の言い分を撤回させた。

貫野や文目といると、刑事は縦社会であるということを忘れかけ

る。けれど実際は縦だけではなく横の関係も存在する。

貫野に頼んでも、もう捜査は続けてくれないだろうなと感じた。事件は和田繁樹が犯人というかたちで、解決に向かっていくのだろう。

十一朗も悩んでいた。十一年前の事件を掘り起こし、口無し事件の謎を追い続けてもいいものかと。

今の状態なら和田繁樹逮捕、共犯はいないというかたちで終わる。綾花の母が共犯とされることもなく、事件も幕を閉じることができ

る。が——本当にそれでいいのか。真実から逃げて目をつぶる行為は、刑事を目指す自分がしていることなのか。ミス研部長の自分と刑事部長の息子である自分が脳内で戦い、葛藤を繰り返す。

このままだと全てが点。十一年前の事件は語られず和田繁樹逮捕というかたちで、真の解決を迎えない事件となってしまうだろう。

それでも——

「このまま、事件が解決したほうがいいのかもかもしれない」

思わず口から出た言葉に、貫野と文目、裕貴とワックスも十一朗を見た。

瞬間、十一朗の胸倉に向かって腕が突き出されてきた。乱暴につかまれて引き寄せられる。誰と言い代えることも出来ない貫野の手だった。

「俺を幻滅させんなよ。それでも刑事を目指す男か！」

一番に貫野が言い返してくると思わなかった。

このまま事件が解決したら、肩の荷が下りるのは貫野と文目のはずだ。

「ここに来た時は、最高の催し物を見た俺は思ったぞ。それが今度は逃げ腰か！」

貫野は十一朗が中庭に向かって叫んだ姿を見たのだろう。催し物という言い方がいかにも貫野らしい。

何故、メールで呼び出さなかったのか。何となくその意味がわか

った。

そして、貫野は高校生相手に自分が何を言っているかということぐらい、分かっているはずだ。責任を背負わせることも、捜査に協力してもらうことに限度があるということも。

いや——と十一朗は考え直した。もう貫野は自分を高校生とは見ていない。純粹に刑事を目指しはじめた仲間として認めてくれている。

同時に刑事という立場を無視して、事件解決に協力してくれていると気づいた。

貫野が十一朗の胸倉を離す瞬間を見計らったのか、裕貴が寄ってきた。目を向けると、驚くほど真剣な裕貴の表情が飛び込んできた。「私ね。昨日、八木さんのことが心配で電話を掛けたの。辛いようなら、もう何もしないでこうって。十一朗にも警察に任せようって言うからって。そう電話したの。そうしたら、八木さん、何て答えたと思う？」

話しているうちに裕貴は涙目になってきていた。両手を強く握り締めていた。

「お父さんが、どうしても事件に巻き込まれたのか知りたいって言ったの！」

続けてワックスが発言したそうに挙手した。

「それなら、俺も八木にメール送ったよ。お母さんに本当のことを聞けばいいんじゃないかって。そうしたら、聞きにくいって返ってきた。今まで女手一つで育ててもらってきたんだもん。だから親にも遠慮するのもかと思っただけ。それ以上は言えなかったんだ」

十一朗は裕貴とワックスの言葉で、頭を思いきり殴られたような気がした。

二人が語ったセリフ『辛いようなら、もう何もしないでこう』『本当のことを聞けない』。

自分を偽って我慢して、本当のことを親相手に言えなくて……父に将来のことを語れずに悩み続けていた自分と同じだと感じた。

裕貴は感情を抑えきれなかったのか、両目を手で拭った。一直線に向けられてきた視線に、十一朗は思わず息を呑んだ。

「親子で隠し事って辛いことだと思う。親子だからこそ、共有しなきゃいけないこともあるでしょ。それは私たちミス研部も同じなんじゃないかな。みんな家族同然ともいえる仲間だって、プラマイも言ってくれたでしょ。だったら、最後まで八木さんに協力してあげようよ」

最初から最後まで綾花に優しい手を添えてきた裕貴は、感じたものがあつたのだろう。それぞれがそれぞれの役割を知らないうちに果たしていたのだ。

十一朗は推理力、裕貴は皆を支える想いやり、ワックスはムードメーカー。

辛いことを経験して共有してきた仲間だからこそ、協力し助け合うことが出来る。

十一朗は空を見た。ミス研の部室から見える空は四角だ。外に出ても高層住宅が隠してしまう都心の空は狭い。空気も淀み澄んでいるとはいえない。

今では得意の推理力は空を見て冷静に判断していたからではなく、仲間が支えてくれて協力してくれたからだと思う。

同時に温かい視線や想いに囲まれてきたからだということも。「そうだな……八木が知りたい過去を俺たちが見つけよう。事件がこれで終わったら、誰も救われない」

不意に貫野が頭を鷲掴みにしてきた。意味深な笑みを浮かべながら、目を合わせてくる。

「十一年前の輸送車襲撃事件を詳しく調べる。升田の件も含めて、和田の素性やその関係者もだ……そこに口無したちが隠す真実があるはずだからな」

自分が言おうとしたセリフを、先に貫野に言われて十一朗は息を吐いてしまった。

すると貫野は話をそこで切って手を離す。何故そんな行動を取っ

たのだろうか。次の瞬間、なるほどそういうことかと合点がいった。「別行動ってことか。そういえば刑事の聞き込みよりも、世間話で流暢に語り始めるって話を聞いたことがあるな」

それは前の事件でも感じたことだ。刑事に話しかけられて緊張していた者が、世間話で急に思い出して語り出すということはよくある。

「輸送車襲撃事件は、何度も聞き込みはしているはずだからな。お前には、そっちの関係者と世間話をしてきてほしいんだ。代わりに俺らは輸送車襲撃事件の関係者の素性調査をする。それで取引成立だ」

言ってきた貫野に皮肉で何か言ってやろうかと、十一朗は一瞬思ったがやめた。

ここまできたのはミス研の仲間がいたからだけではない。貫野が父と何を話し、どんな想いで託してくれているかということも、進路のことも含めて、何となくわかっていた。

「取引というより借りを返すよ。夕飯ご馳走になった借りをさ。あと、八木を気遣って捜査を続けてくれていることも感謝してる」

自分らしくないなと感じながら言うと、貫野と文目が目を見開いていた。

気になって裕貴とワックスを見ても同じ反応をしている。

それを見て、十一朗は息をついてから続けた。

「そのかわり貫野さんが主任になったら、ちゃんとお返ししてくれよ」

これ幸いと裕貴とワックスが「お寿司」「焼き肉」と連呼する。

どんなに緊迫した状況でも、ミス研部と自分は変わらないのかもなと十一朗は思った。

12・捨てるモノ、守るモノ

その後——貫野と交渉を成立させた十一朗たちミス研部の行動は早かった。

別れ際に貫野から手渡された輸送会社の電話番号が書かれた紙、それを見ながら十一朗は番号を押していく。

相手呼び出すコール音が三回なったところで、会社名を告げる女性の声がした。

丁寧な口調から電話接客専門の事務員なのだろうと十一朗は思った。それでも相手に不快感を与えないよう、十一年前の事件について語る。

事務員は十一年前という忘れかけた殺人事件をあげられて困惑した様子だった。

「少々お待ちください。責任者と代わりますので」
待ち受け音にする前に言った、事務員の声は震えていた。

無理もない。関係者の一人が死亡している凶悪事件だ。十一年経った今でも鮮明に思い出すことだろう。

代わって出たのが中年男性と思われる太い声だった。名乗った苗字が会社名だったので、すぐに社長と分かった。

二度目の説明となってしまうたが、断られるのを覚悟で十一年前の事件について語る。

事件の真相を聞いた仲間がショックを受けているということ。死んだ八木という男性が彼女の父親だということ。

十一朗の説明を聞いた社長は驚いた様子だったが、詳しく知りたいのならと了解してくれた。急な願いにも関わらず、今日会ってくれるとも約束してくれた。

輸送会社に向かう時間を有効に使おうと、三人で歩きながら段取りを決める。

十一朗と裕貴の役割は、出来るだけ詳しく十一年前の事件を社長

から聞くこと。

更に就職活動と理由を付けて仕事内容も聞けるはずだとの考えから、ワックスにはその役を頼んだ。

十一年前の事件の真相。そこに今回の事件との繋がりが隠されているはず――

輸送会社に着すると、会社の入口に立っている男性と目が合った。作業服ではあるが社長に間違いない。まさか外で待っているとは思わなかったので驚いた。

「君たちが八木さんの親友かい？」

電話と同じ太い声、そして優しい口調だ。社長は電話でも、十一朗たちを気遣ってくれている様子だった。それが行動にも出ている。声も接客業特有のものだった。

十一朗たちは「はい」とだけ答えると、社長の次の言葉を待った。「じゃあ、ここで話をするのもなんだし、応接室に行こうか」

社長の手でガラス張り手押しの扉が開けられる。後ろは十一朗、裕貴、ワックスの順で続いた。

来客受付を通り抜け、電話に出たであろう事務員の前を通過する。通りすがりざまに社長が、

「君、四人分のお茶を用意してくれ」と、事務員に頼んだ。

まるで重役が来たかのような親切対応である。本来なら急に話を聞きたいと言った自分たちが、菓子折を持ってこなければいけないはずだ。

十一朗は申し訳ない気持ちになってしまった。とはいっても、後ろの二人は自然体なので、少し気分も紛れた。

応接室に入ると、一番先に目に飛び込んできたのは高級感のある革張りのソファ―。次に社会に貢献したと書かれた賞状。仲間の結束を示しているかのような、社員旅行の写真も額に入れて飾っていた。

社員同士がぶつかり合うような空気は感じない。居心地の良い空間がここにはある。

学生の自分たちも快く受け入れてくれる、社長の優しさがあったものなのだろう。

「お茶は持ってきてくれるから、菓子はここにあったかな……あ、遠慮せずに座って」

社長に言われて十一朗は、学校の校長室にもないような高級ソファ―に座った。

次にノックがすると扉が開き、先ほど会った事務員が茶を置いていつてくれる。ほぼ同時に社長が戸棚から菓子を出した。渋い茶と相性がいい落雁^{らくがん}だ。

いつもなら遠慮せずに菓子を食べるワックスも、今日ばかりは緊張した面持ちで金縛り状態になっていた。

「さてと、どこから話せばいいのかな……十一年前の事件を綾花ちゃん知らないと聞いて驚いたよ。私が会っていた頃の綾花ちゃんは、まだこれくらいの大きさだったな。もう高校生か。そんなに経つんだなあ」

社長は記憶の中の綾花の身長を示すかのように手を水平に出す。そして息をつくと、茶を飲んだ。

倣うように十一朗と裕貴、ワックスも茶を飲む。香りがいい。味も舌に残るような渋さではなく、溶け込むような深みのある上品な味だ。高い茶を淹れてくれたんだと十一朗は思った。

「輸送車が襲撃されたと聞きました。八木のお父さんが命を落とし、同乗していた男性も重傷を負ったと……事件の犯人はまだ捕まっていないんですよね」

十一朗の質問に、社長は首を縦に振って答えた。社員の写真を額にまで入れて飾っている社長だ。事件発生の概要を聞いた衝撃はかなりのものだったであろうと想像できた。

「貴重品を運ぶ輸送車は襲われやすいからね。安全対策は万全のはずだった。けれど車載カメラは、どういうわけか壊れていたんだ。出る直前のチェックでは壊れていなかったんだけどね。だから犯人の顔もわからないままだ。今思うとそれだけが悔やまれるよ」

愛していた者の死、そして犯人逃走中。遺族にとってこれほど辛い仕打ちはないだろう。十一年もの間、八木の母は娘に語らず胸中に納め続けていたのだ。

何故、車載カメラが壊れていたのか。社長も長い時間事情聴取されたに違いない。殺人事件は関係者全員を不幸にする。考えるだけで胸が痛んだ。

「物がなくなるのはまだいいんだよ。だけど人の命はね……八木くんは奥さんと子供の写真をよく見せてくれたな。償いにはならないだろうけど、おりた保険から奥さんに渡したんだ」

それを言った後、社長は「あつ」と声を上げた。何か思い出した様子だ。

「そういえば、和田さんにも子供がいたはずだ。同じくらいの年で、確か病気だって言ってたな。治療費が掛かるから、出来るだけ残業させてくださいって頼まれたっけ」

和田繁樹のことが社長の口から出た。声を出したことから警察には話していない内容だろう。世間話から出た記憶の断片。これは大きな収穫のような気がした。

「和田さんにも保険金の一部を？」

「ああ、渡したよ。治療費に役立ててくれって言っただけ。けれども顔はしなかったな。当たり前か、目の前で親友の八木くんが殺されたのだから……」

「失礼だと思いますが、和田さんに渡した金額を教えてくださいませんか」

「一千四百万だと思っよ。重傷だったし、子供の治療費に言っただけ。小切手を見て驚いていたな。こんな大金をと返されそうになったが、では子供の病気が治ったら返金してくれよと言って押し返したんだ」

十一郎が渡した金額を聞いたのには訳があった。そして推理の中の金額が一致した。

升田が言っていたという十一年前の借り『七百万円』。升田と和

田で分け合つとその金額になる。

社長は更に続けた。

「けれど、直後に彼とは音信不通になってしまったんだ」

貫野の予想が当たっている気がした。升田は和田から金を受け取るつもりだった。しかし、途中で気が変わって逃げたのだ。妻も子も全てを捨てて――

これが命懸けで共犯を守る男のしたことなのだろうか。和田の裏の顔に疑問が残るとともに、憤りを感じた。

掘り起こした十一年前の事件の時間が止まる。それを見て、ワックスが身を乗り出した。

「輸送と聞きましたけど何を運んでいるんですか？ 飾られている写真を見ても、社の雰囲気は凄くよさそうだし、詳しく聞きたいんですけど」

ワックスに褒められて社長は気分をよくしたのか、急に笑顔になった。

好きで仕事をやっている人なのだろうなと想像がつく。立てかけである写真には、先代社長の名前もあった。一代目、二代目の苗字が同じところを見ると、父が建てた会社を継いだのだろう。

「むかしは引越し作業とかもやっていたんだよ。今は企業から任された荷物を運ぶのが主な仕事になったね。会社を設立したのは私の父だったんだけど、引越して荷物を頼んだ時に骨董品を割られてしまったらしいんだ。乱暴な扱い方が許せなかったみたいだね。だったら私がという気持ちで始めたらしい」

確かに証明するように賞状が飾られている。仕事への拘りと情熱がなければここまで語ることも出来ないだろう。

居場所を正して更に十一年前の事件を聞こうとする。すると壁に通関士の資格を証明する証書が飾ってあるのが見えた。名前を見ると壁に掛けられた社長の名前と同じだ。

「通関士の資格も持っているんですか」

十一郎の質問に社長は「ああ」と答えた。その顔は真剣な表情に

変わっていた。

「仕事を多くするには策略も必要ってことだよ。ただの引越し業務だけじゃ成り立たない時もある。不景気の時にはそれがモノをいう。父が建てた会社だし、潰したくはない。私の居場所であり誇りでもあるのがこの会社だからね」

十一朗は熱く会社のことを語る社長を見ながら親近感を覚えた。会社が居場所——ミス研部を居場所と感じている自分と同じだ。

茶を取って飲んだ社長は時計を見ると、十一朗たちを見た。

「すまないけど、明日は仲間との交流会があるんだ。準備をしたいから、あと数分で終わりにしようか。そのお菓子美味しいだろう。お客さまからいただいたんだ。数に限りがあつて、地元の人しか食べられないって話だよ」

ワックスが一口で食べようとしたのをとめた。まるでネズミのようにに囓んでいる。

「交流会ですか。それにお客さんから高級和菓子も貰えるなんて、本当にいい雰囲気の会社ですね」

十一朗が言うとはにかんで笑った。

「交流会といっても私の独壇場だよ。最近、テニスにハマってしまったね。メタボ対策と理由を付けて、運動不足の社員を引っ張り出しているんだ。年も考えずにやるから、次の日は筋肉痛が酷いんだけどね。だけど、やめられないね」

「テニスなら、私もやったことがあります。初めは手首の使い方がわからなくて、痛めてしまつて……」

社長の話題に入り込んだのは裕貴だった。そういえば、中学の時にテニス部にいたっけと思い出す。十一朗は運動が嫌いなのに、男子テニス部に入れと強く言われたのだ。

最終的に十一朗が入ったのは将棋部だった。何でそれと言われた覚えがある。相手が動かす駒を予想して最善の手を出す。推理に役立つ経験になるかもしれないと決めたというのが一番の理由だった。「君たちが入社してくれるというのなら歓迎するよ。綾花ちゃん、

いや八木さんにもよろしく言つといて。私が協力できることなら、何でもするよ」

十一年前の事件を知っている関係者の協力は大きな力になる。仕事に運動に精力的な社長に見送られながら十一朗たちは応接室から出た。

最後まで社長は「知らないことがあつたら聞いてくれよ」と何度も言ってくれた。

出口でもガラス張りの扉を押して、「気をつけて」と言ってくれる気遣いようだ。最初から最後まで、社長には迷惑をかけてしまったような気がした。

外に出ると陽はすっかり落ちて、辺りは暗くなりかけていた。部活動を終了して帰る時間だと少し遅い時間だ。

十一朗は、また父さんと母さんに何か言われるかなと感じた。

帰宅時間のためだろう、会社員が歩く姿が多くみられる。車の通日も増えていた。

急に先頭に立って歩きだしたワックスが、振り返って満面の笑みを浮かべてみせた。

「いい社長さんだよな。俺、就職活動しても駄目だったら、あの社長さんの世話になろう。客からの美味しい土産も食べられそうだし」ワックスがミス研部に入部した理由は推理が好きだからではなく、手作り菓자에釣られたからだ。十一朗は志望動機まで同じかよ、と言いつけたがやめた。

「事務のお姉さんも綺麗だったし……」

「会社の志望動機まで同じかよ」

つい言ってしまった。ワックスはいつも突っ込みを待っているのではないかと思う。

そんないつも通りの会話が續いていた時だ。

「社長さん、右利きだったね」

裕貴が思わぬことを口に出した。いや、社長も十一年前の事件の関係者だ。そこまで気にしなければいけないはずだ。

「テニスをやっているって聞いたから、同じ経験者として気になったの。構えが右だった。だから共犯者としては成立しないね……」

「確かに、思い出すとお茶を飲んでいた手も右だったな。それに俺は和田の考えることがますますわからなくなってきた」

十一年前の事件の時、和田には病気の子供がいた。その治療代を稼ぐために、残業までしていたのにも関わらず、襲撃事件が起きたと同時に妻と子を置いて逃げている。

被疑者の和田と殺された升田。十一年前、和田が受け取ったという保険金千四百万と升田が言っていたという十年か前の貸し七百万という金額。

車載カメラも壊されていた。そして、今回の事件。

どうしても、どす黒い推理に行き着いてしまう。

和田と升田は十一年前の事件の共犯者だったのではないかと――そして共犯者であろう八木の母と和田の関係。語らなかった訳が他にあるのではないか。考えれば考えるほど憂鬱になってくる。

前回と違って今回は全員で行き着いた結果だ。十一朗の言葉で裕貴とワックスも悟ったのだろう。視線を落としながら歩いていた。不意に十一朗は振動を感じた。携帯の反応だ。着信名を見ると『イタチ』と出ていた。『バカ息子』という着信名にされた貫野へのお返しだ。

知りたくない真実が次から次へと生まれている。その不安からか携帯を取り出して耳に当てるのを、裕貴とワックスは心配そうに見ていた。

「今どこだ。とんでもないことがあったぞ。和田のことだ!」

通話状態になると、鼓膜が破れそうなくらいの声が響いた。貫野の地声は十二分に凶器になると思う。頭一個分、受話器から離しても聞こえるくらいだ。

「和田のこと? こつちも社長さんからいろいろと聞いたよ。何でも子供がいたとか」

「そのことだ。よく聞け! 和田には確かに妻子がいた。けれど二

人は十一年前に亡くなっている」

十一朗は耳を疑った。亡くなっている——病気の子供も看病をしていたであろう妻も。

渡された保険金にいい顔をしなかったという和田。既にその時、妻子は亡くなっていたのではないか。

守る者がいなくなった。治療費は必要ない。だから戸籍も身分も捨てて、升田から逃げた。

貫野の教えてくれた情報から、推理の引き出しが全て開かれる。

十一朗は自分が思い描く推理の中で、口無し和田の姿をようやく捉えた。

「貫野さん。和田はまだ入院しているんだよな。俺に彼の事情聴取をさせてくれないか。口無しの彼の口を割ることを約束するよ。あと俺が今から言うモノをお願いしたいんだ」

今の時間帯だと病院は面会を許していないだろう。それでも相手は自白した自称犯人だ。緊急で彼と話がしたいと言えば、きっと聞いてくれるはず。

同時に面会者が来ない静かな空間だからこそ、和田が語る環境も構築されている。

絶好ともいえる時間と場所、証拠が揃った。今しかない。

十一朗は口無し和田の口を割るであろうモノを貫野に告げた。

聞いた貫野は「病院だな」と冷静に言っただけ電話を切る。ゼロを示した病院の計器のような電話の余韻音を聞きながら、十一朗は空を見た。

十一年前の事件が起きた夜も、こんな感じの空だったのだろうか

先程まで、鮮明に見えていた月が流れてきた雲に隠れて、淡い光を地上に落としていた。

13・口無しは語る

十一郎たちが病院に着いた時には、既に見慣れた覆面パトカーが停まっていた。

車内から外の様子を窺っていたのだろうか。扉が開いたかと思うと貫野が出てくる。

十一郎は貫野を視界に入れながらも、手にした携帯を見て息をういてしまった。

母に、『今日は遅くなる。みんなも一緒だから安心して』と、メールすると、

『遅くまで遊んでいちゃ駄目よ』と、返ってきたのだ。

父や貫野は自分を一人前として認めてくれた気がするが、母親にとつて息子はいつまでたつても子供らしい。

癪なので、『大丈夫。父さんに貫野さんと一緒だからって言うといて』と返した。

後ろを見ると裕貴やワックスも携帯電話を操作している。自分たちは高校生だし、親が心配するのも当然なのかもなと感じた。

メールを打ち込むスピードが超高速と喻えていくくらいの、裕貴の指がとまる。

「門限過ぎても、プラマイと一緒にメールすると、じゃあ大丈夫ねって返ってくるんだよ。お母さん、プラマイのことは信賴しているみたい」

「俺もそうだな。刑事と一緒にメールしたほうが、よっぽど心配すると思う」

ワックスに、それは違う意味に捉えられるからじゃないか。と言おうとしたがやめた。

本物の刑事が目の前にいるのを忘れそうになっていた。駆け寄ってきた貫野を見て思う時がある。貫野は子供のような大人といってもいいかもしれない。

「なに、人の顔見て妙な顔してやがるんだよ。お前が言ったモノは持ってきてやったぞ」

貫野と目が合った途端、予想通りの反応が返ってきた。しかし貫野の相棒の文目の姿が見えない。

「文目さんは？ いつも一緒なのに、珍しいよな」

「俺とあいつが対たいのように言っいな。車の中にいる。だから、あとは任せた」

聞いた十一朗は、そういうことかと納得した。

全員が事件の解決を望んでいる。縦社会の中で生き、横の者たちも気にする立場である貫野や文目も――

「文目さんが車の中にいるのなら、私たちも後から行った方がいいよね？」

裕貴が覆面パトカーを見ながら言う。ワックスも同じ気持ちのようで十一朗を真剣な表情で見ていた。

突然、見知らぬ人物が多数現れたら、口無しである和田は更に口を閉ざす可能性が高い。

裕貴とワックスの意見を尊重して、十一朗は貫野を見る。すると貫野は、先日とは違う病棟に目配せをした。

どうやら意識が戻った後、場所を移動したらしい。窓に鉄格子が掛けられているのが見えた。おそらく精神科の病棟だろう。

和田は自殺未遂をしているので、その対処をしたのだと十一朗は理解した。

貫野の足取りが速い。十一朗は半ば駆け足状態で後についた。

「あれから和田の状態はどうなんだ。事件のこととか何か言ってる？」

「相変わらず、俺がやったの一点張りだよ。けど、お前が言ったモノを見て、奴も慌てるだろうな。隠かくしきれていると思っおもっているわけだから……」

どうやら病棟には関係者しか知らない緊急の出入り口があるらしい。病棟の裏口へ回ると、小さな引き戸を開けて貫野は中に入った。

廊下は薄暗いが、突き当たりは明りが集中している。あそこは控室なのだろう。

いつも通りに大股で堂々と控室に近づいた貫野は、ガラス張りの向こうにいる看護師と言葉を交わした。そして、鍵を受け取ると、また十一朗に目配せする。

長い会話ではなかったところを見ると、顔パスに近い状態らしい。貫野がいるのだから遠慮することはないが、十一朗は頭を下げながら控室の前を通りすぎた。刑事と一緒にいる高校生を見た看護師の、驚く顔を見ることが出来たのかもしれないが、それは恥ずかしくてやめた。

階段を上がって和田の部屋に向かう途中、幾つかの部屋の前を通る。扉の向こうから、くぐもった声や唸り声が聞こえてくる部屋もあった。

「こういつた場所に来るのは初めてだろう。閉鎖病棟っていつてな窓には鉄格子、扉には鍵だ。重度の精神病患者が中にいる。その中でも和田はかなり特例だろうな」

事件の真相を知っている和田は絶対に死なせてはいけない。警察が懸ける威信を見たような気がした。

貫野が立ち止まったのは、閉鎖病棟のはずれの部分だった。隔離された場所というよりも、関係者が楽に出入りできそうなエレベーターの近くだ。

貫野が鍵を差し込むと、部屋の中で何かが動いたような音が聞こえた。覚醒した和田繁樹と対面するのは初めてだ。十一朗は思わず唾を飲み込んだ。

扉が開かれて中に入ると、ベッドの上に座っている男性が見えた。和田繁樹だ。

和田と目が会った瞬間、十一朗の頭から構築していた印象が吹き飛んだ。

誰かわからない。高校生の自分に彼は頭を下げたのだ。やはり和田は共犯を庇っている男だ。どす黒い推理は取り下げる

べきかもしれない。十一朗はそう感じながら、自分も頭を下げて応えた。

貫野が立てかけてある座イスを出して、十一朗に手渡す。このことから、刑事数人が和田から事情聴取をしていたことがわかった。貫野は軋んだ音を奏でるイスに腰掛けると、十一朗に構わずに話し始めた。

「気分はどうだ？ 傷の痛みも治まってきたはずだ。そろそろ普通の生活に戻りたい頃だろう」

普通の生活に戻る訳がない。和田は自称、殺人犯なのだ。それでも貫野が言ったのは、共犯のことを早く教えるという遠回しのメッセージに違いない。

問い掛けられた和田は、格子窓の方を見た後、真っ直ぐに貫野を見た。

「私が全てやりました。それが真実です。普通の生活に戻ろうとは思いません。罪を償い、房を出ても粗末な生活をしていくつもりです」

自信のある口調だった。問い掛けた貫野を真っ直ぐに見たのも、絶対に曲げないという気持ちの表れでもある。

十一朗は居住まいを正した。金属の軋む音が病室内に響く。

「今回の事件について話せないのなら、代わりに十一年前の事件のことを話ませんか」

十一朗の質問に、和田が目を見開いた。

目の前にいる高校生は何者なのか——素性を知らない相手を前にした戸惑いだ。

「僕は刑事部長の息子の東海林十一朗といいます」

更に和田の疑問に答えるように返す。これには貫野も目を見開いた。

刑事部長と聞いたら、和田が警戒するのではないかと感じ取ったためだろう。

本来なら言わなくてもいい情報だ。しかし言ったのには理由があ

る。冷静である和田を動揺させるためだった。

「刑事部長の息子さんが……何故？」

自分は一連の殺人事件の犯人。和田はそう自分を位置づけていたはずだ。ところが予期せぬ事態が目の前にある。その答えが震えた声だった。

「貫野刑事、あの証拠を出してくれ」

畳み掛けるように十一朗は貫野に頼んだモノを出させる。

十一朗たちと謎の男であった和田を結びつけた、綾花の携帯番号が書かれた紙だった。

「それは……」

和田は初めて見たはずだ。そして、自分が持っていたことを知らなかった。知っていたら、万年筆のように投げ捨てていたはずだろう。

そうでなければ、十一年前の傷を隠すために自殺する理由がなくなってしまう。

「あなたが自殺未遂をした時に所持していたものです。この紙から八木和歌子さんの指紋だけが検出されました」

貫野は紙を見せたと同時に、はっきりと告げた。和田の唇が震えた。誰が見ても分かるほど唾を勢いよく飲みこみ、顔面が蒼白になっ

ていった。八木和歌子の指紋だけが検出された。和田は自分のポケットに入っている紙に気づかなかった。その理由を考えると、八木和歌子が和田の上着のポケットに無理やり押し込んだという結論に達してしまう。

貫野が十一朗を見た。「次はどうするつもりだ？」言葉ではなく、目が問い掛けてきていた。

間違った選択をしてしまうと、和田は再び口を閉ざしてしまうだろう。十一朗は慎重に言葉を選んで揺さぶりをかけようと決めた。

「娘さんの電話番号を書いた紙を、自分を付け回すストーカーまがいの男のポケットに入れる。そんなことは誰もしませんよね？」

「知らないそんなものは！ 私が一人でやったんだ。それでいいでしょう！」

和田は吐き出すように叫んでから、両手を貫野に突き出した。

「私に早く手錠を掛けてくれ！」

和田は声を張り上げて懇願した。何故、八木和歌子をここまで庇うのか。十一朗には全てが見えていた。

「僕は八木綾花さんと同じ、ミステリー研究部の部員です」

和田の動きが止まる。予想通りの反応だった。

押しこまれていた綾花の電話番号。そして、綾花の名前が刻みこまれたプレゼント用の万年筆。十一年前の事件と和田の妻子の死。命懸けで共犯ではないと言って守った綾花の母の存在――

そこから導き出された答え。

いつからか、和田にとつて八木和歌子と八木綾花は妻子と同じくらしいの存在になっていったのではないか。

「和田さん。十一年前の輸送車襲撃事件について、詳しく教えていただけませんか」

十一朗が和田に言った時だった。靴音が病室内に響き渡る。

目を向けると、そこには文目に連れてこられた八木和歌子。裕貴とワックスと共に来た綾花の姿があった。

十一朗は貫野に頼んで、二人を呼んできてもらったのだ。そして、タイミングを見て二人を入室させてほしいと告げていた。

綾花の瞼が赤くなっていた。車の中で母と言葉を交わしたのだから。唇を震わせて和田を凝視していた。

「私は父がどんなふうになくなったのか知りません。今まで事故だと聞いていました」

綾花が頭をさげた。さげた途端に、涙の滴が零れて床に水玉模様を創作した。

「お願いです。事件のことを教えてください！」

必死の懇願をする綾花に続いて、綾花の母も頭をさげた。二人の行動に十一朗たちよりも和田の方が困惑していた。

「すみません。和田さん……この子に、あのことを話しました」
綾花の母の話を聞いて、和田は小さな声で「そうですか」と言いながら息を吐いた。

続けて十一朗と貫野を見て微かに笑った。

「お二人には負けました。わかりました。十一年前の事件のことも、いずれは話すことと考えていました。全てを話します。けれど全ては私が――」

和田が言い掛けたのを十一朗は、掌を前に突き出してとめた。

和田が言いたいことは分かっていた。「私がやりました」。それが今回の事件に繋がるのではないかという想像もついた。

「今は誰が犯人なのかという話はやめましょう。十一年前の事件は未だ解決していません。その事件を解決に導くことが出来るのは、口を閉ざした和田さん。あなただと思っています」

「そうですね。私が全て悪いのです。お話します」

和田が目を閉じた。十一年前を思い出すため、記憶の歯車を巻き戻しているのだ。

目を開けた和田の瞳には、先程までは見えなかった決意の光が差したような気がした。

「十一年前、私は輸送会社で働いていました。貴重品を運ぶ仕事なので、隣には必ず相棒がいたんです。その相棒が八木彰夫さんでした」

和田と八木の関係がここで繋がった。いつも同乗していた仲間のため、二人は襲撃事件の被害者となったのだ。

「八木さんは私によく奥さんと子供さんの写真を見せてくれました。私の子供と年は、そんなに変わらなかった。彼が写真を見せてくれたのは、それが理由でしょう……けれど、互いの環境はまるで違った。私の妻は白血病患者でした。子供を産む直前に分かったので、抗がん剤治療はしませんでした。その時は、生まれた子供と骨髄移植が可能なら、妻は助かるという希望がまだあったんです。けれど型は一致せず、子供は難病を持って産まれた」

社長が和田の子供について話したのを思い出した。治療費がかかると言っていた。

残業をして治療費を稼ぐ和田と、元気で明るい妻子に支えられている八木。同じ仕事に就いていても、似たような家族構成でも二人の心の内はまるで違っていたのだ。

「それは医療費の助成がされていない病気でした。子供のために私はどうしても金が欲しかった。残業をして他の仕事にも就きました。しかし治療費が足りない……そんな時、升田が声を掛けてきたんです。いい話があると」

どこからか情報を見つけ出してきた升田が、和田に持ちかけた話——それが十一年前の事件に繋がるのだろう。

綾花の母は唇を噛み、綾花は体を小刻みに震わせていた。升田という男が犯人だろうと、十一朗は綾花に告げている。それを思い出しているはずであった。

「升田は、自分が輸送車を襲撃する。その時にあんたを刺したら、保険金の下りるはずだと言いました。その代わり、輸送車の積み荷を盗ませると……その話にのってしまった私が馬鹿でした。升田が暴力団組員だと知ったのは、その後です」

輸送車襲撃事件の犯人は二人いた。主犯格は升田、共犯は和田。車載カメラが壊れていたのは和田がそうしたからだろう。まさに計画的犯行だったはずだ。同乗者の八木彰夫が殺されたこと以外は

「どの場所で荷を下ろすのか。私は升田に伝えました。予定通り、襲撃場所で升田は刃物を出し、私を刺そうとしたんです。その時、予想もしないことが起きた。八木が……」

和田の声が震えた。綾花の母は前以って伝えられていたのだろうか。ハンカチを取り出して顔を覆っていた。

「私を庇ったんです。お前は逃げろ。奥さんと子供のために！」と言われました。その時、私は初めて知りました。八木は私の妻と子が病気であるということを知っていたんです。けれど私はそれを知

らないで、彼を羨ましく思い嫉妬していた。彼が事件に巻き込まれても構わないと思っていた。それが間違いだと気づいた時には既に遅かったんです……」

聞いた綾花が両手で顔を覆って泣いた。綾花は言っていた。父との思い出は少ないと――それが和田の話聞いて鮮明に蘇ってきたようだった。

綾花の母は綾花を優しく抱き寄せた。それでも綾花の母の手も震えていた。

輸送車襲撃事件の全容が見えた。十一朗の推理が的中した。

十一年前の輸送車襲撃事件の犯人は升田だった――

升田は邪魔をした八木彰夫を刺し殺した。同時に計画通りに和田も刺した。

罪を犯しても殺人はしない。しかし綱渡りと仇名された男は、強盗殺人をしていたのだ。

強盗殺人は無期懲役か死刑だ。捕まらなかったことで升田は綱から落ちずに渡り続けた。

しかし、ここで疑問が生じる。何故、和田は事件の全容を今まで黙っていたのか。

十一朗は疑問を和田にぶつけた。

「何故、十一年後の今になって升田と争い、自殺未遂をしてまで証拠を隠そうとしたんですか。十一年前の事件を隠し続けたりしていなければ、あなたは殺人事件を起こさずにすんだはずなのに――」

和田は口を閉ざすと、八木和歌子と綾花に一瞬だけ視線を向けた。同時に和田の目から涙が零れ落ちた。そして、小さな声で何か言う。全員が聴き取れない震えが混じった声だ。

「あしながおじさん……」

その時、和田ではなく綾花が声を出した。そして懷から何かを取り出す。取り出されたのは薄汚れた安全祈願のお守りだった。

「お父さんがいなくなってから、何故か玄関先に手紙と一緒にいるんなものが届けられるようになりました。運動会近くなると運動靴。

小学校入学前にはランドセル。誰からなのか分らずに母に聞いたことがあります。手紙にはいつも『君のあしながおじさんより』と……今日、母に聞いて初めて、和田さんがそのあしながおじさんだと知りました」

十一朗も裕貴もワックスも和田を見た。貫野と文目も同じ反応をした。

十一年前の事件の直後、和田は妻子を失っている。それが病氣だったとわかった今、和田が何を考え、今までを生きてきたのか見えた気がした。

十一朗は程度の予想をつけながらも、和田を見た。

「輸送会社の社長に聞きました。保険金として千四百万円をあなたに渡したと。そして升田は仲間に七百万を返してもらえると云っていたそうです。もしかしてそのお金は……」

「必要なくなりました。私が重傷で入院している時、娘は死にました。苦しんでいたのに、最期はすぐだったそうです。娘を追うように妻も天国に逝きました……私が彼女たちを死なせてしまったようなものなんです。馬鹿なことをやって、娘の最期に立ち会えなかった。妻が一番苦しい時に隣にいてやれなかった。私は生き甲斐をなくしました。その時、新聞である記事を見たんです。輸送車襲撃事件の被害者のことが書いてありました」

十一朗は図書館で見た縮小版の新聞記事を思い出していた。

最愛の妻と子を亡くした男が、最愛の夫を亡くした妻と子を見るその時、和田の心の中に何が生まれたのか――

黙っていた貫野が居住まいを正して、和田に聞いた。

「償いですか……」

最愛の者を亡くした被害者の気持ちは、はかり知れない。亡くした者は二度と帰ってこない。どんなに償っても許されることではない。

しかし、和田は知っていた。最愛の者を亡くす苦しみだけは――
「せめて、せめて八木の娘さんが大学に進学するまではと考えてい

ました。時が来たら自首するつもりでした。そんな時、捕まっていた升田が出てきたと知りました。このまま私が彼女たちの近くにいたら、必ず被害が及ぶ。そして、自首を決めて電話をかけたんです」電話をかけた相手が綾花の母だったのだろう。

和田は綾花の母を呼び出して、十一年前の事件の真相を語ったに違いない。その時、彼女はどんな反応をしたのだろうか。

複雑な感情の中にいたに違いない。しかし、綾花の母も最愛の夫を亡くした身だ。和田の気持ちを察し、せめて自分の娘にも真実を語ってほしいと携帯の電話番号をポケットに押し込んだのかもしれない。

ところが、和田はそこで大きな息を吐いた。真剣な表情だった。

「八木さん、娘さんの電話番号を無理やり書かせてすみませんでした。あの時、私は手袋をしていたので、メモからは八木さんの指紋しか検出されなかったのです」

ここで和田は再び頭を下げながら、十一朗の推理を覆す言葉を発した。

和田は何があっても、今回の事件の共犯を八木和歌子とは言わないつもりだ。全ての罪を受け止めようとしている。

十一朗は和田の中に、命を懸けても償うという覚悟を見た。

「もういいんです。和田さん！」

瞬間、綾花の母が声を上げた。大粒の涙を流しながら、唇を噛んでいた。そして、綾花を抱き寄せながら、「お父さんのこと、黙っていてごめんね」と涙声で言った。

「夫を刺した男を殴ってやったのを、私は後悔していません。あなたがやらなくても、升田は私が殺していました。そして、私は和田さん。あなたを十一年前の事件の共犯だとは思っていないんです……一番許せないのは升田。そして、あなたを命懸けで守ろうとした夫を私は誇りに思っています」

八木和歌子が全てを語った途端、和田は大声を張り上げながら泣いた。

十一年前の罪を自分は償いきれているのか。そんな悩みと感情が爆発したかのような声だった。

何度も「すまない。すまない」と連呼した。綾花の母と綾花に言ったのか、命を落とした八木彰夫に詫びるものだったのか。

少なくとも自分の罪から逃げる、表面上の謝罪ではなかった。今までの彼の行動が、それを証明していた。

息を吐いた十一郎を貫野が見た。よくやったということなのだろう。

しかし、事件は解決してはいない。十一年前に繋がる今回の事件。升田が死んだ夜の話がまだだ。

「あの夜、私が仕事場で休憩している時に電話がありました。着信を見ると公衆電話からでした。私の携帯に公衆電話でかけてくる人は和田さんだけです。電話を取ると彼は、大事な話がある。近所の公園で会えないかと私に言いました」

数日前の記憶を辿るように、綾花の母が語り始める。

全員視線が彼女の口に集中する。十一郎は望んでいた事件の真相を前に、思わず息を呑んだ。

近くを通る電車の音と通過を告げる踏切の音が、事件の夜を思い出させるかのように微かに聞こえていた。

14・あいつだ

電車の通過音が徐々に遠ざかっていく。踏切の音が途切れると、皆の呼吸音だけが病室に響いていた。

静まる時を待っていたのだろうか。不意に綾花の母が和田を見た話してもいいか——彼女の目が和田に語っていた。

十一年前の襲撃事件は、八木親子や和田の心の中では、まだ解決していないだろう。何をしても八木彰夫は帰ってはこない。両者の時間は止まったままのはずだ。

それでも、十一年間の心と心の語り合いは無駄ではなかったのだろう。

全てを察したかのように和田は首を縦に振って応えた。

以心伝心——他人でも繋がる心がある。二人の間にはそれを感じた。

綾花の母は、十一朗と貫野の方に顔を向けると口を開いた。

「和田さんを知ったのは、綾花の幼稚園の運動会の前日です。保険金は下りていましたが、専業主婦だった私は仕事を探すのに苦労していました。収入がほとんどゼロという不安な生活の中で、綾花に運動靴を買ってあげることができなかった。親として情けなくて、涙が出ました。そんな時、運動靴が届けられたんです」

玄関先に手紙と一緒にいろんなものが届けられるようになった。

綾花はそう言っていた。

和田があしながおじさんとして、初めて届けたものが運動靴だったのだろう。

「扉を開けると知らない男性がいました。そして受け取ってくださいと箱を渡されたんです。対応に困る私に男性は、八木さんの同僚の和田ですと自己紹介してくれました。箱の中には『君のあしながおじさんより』という手紙がありました。嬉しかった……彼の好意に感謝しました。それから彼は、いろんなものを買っては届けてく

れたんです」

綾花の母が和田のことを彼と言った。親密な関係になっているのだということが窺えた。

この時、綾花の母は、和田が輸送車襲撃事件の被害者であるとは知らなかったはずだ。被害者の綾花の母からしてみると、夫が死んだ事件の新聞を見る気にもならないだろう。しかも犯人は逃走中。やり場のない怒りをどこにぶつけたらいいのか。

苦しんでいたに違いない。事件の証拠をつかめない警察も憎んでいたことだろう。救いの手を差し伸べた和田の存在は、綾花の母には大きな存在だったであろうと想像がついた。

「その時から彼との交流が始まりました。彼は誠実な人で、男と女の間係を求めることがなかった。そのせいでしょうか。私は逆に彼に惹かれていきました。そんな時、彼の口から聞いたんです。妻子がいたこと。襲撃事件の時に同乗していたこと。重傷を負って犯人の顔を見ていないこと。そして、私にぶ厚い封筒を渡してきました」
十一朗は封筒の中が何であったのかを察した。和田が必要なくなったという保険金、千四百万円の一部だろう。

和田は八木親子の将来を保証する代わりに、犯人の顔を見ていないという嘘をついた。犯人の升田が捕まると、その口から共犯の自分の名前が出ることは確実だ。

せめて綾花が成長するまでは嘘を、償いのために金を――

そんな気持ちの中で和田は、嘘をついた自分を慰めていたのかもしれない。

同時に和田は妻子がいたと告げて、綾花の母との距離を保った。

男と女の間係になることを嫌ったのだらう。

綾花の母が息を吐いた。

十一年間もの出来事を思い出し語るのは、相当の辛苦を伴うのだらう。代わって和田が話に加わった。

「封筒を渡したのは、綾花さんが高校に合格した時です。償いきれないでしょうが、肩の荷が下りた気がしました。けれどその頃でし

た。升田が刑務所から出たと知ったのは……あいつはハイエナのような男です。組の情報網を使って、必ず私を見つけようとする。自首しなければ二人が危険と感じ、会つのはこれが最後と決めて、万年筆を予約しました」

万年筆を見つけたのはミステリー研究部全員の手だ。裕貴もワックスも綾花も、エンジ色で『A Y A K A ・ Y』と刻印された現物を見ている。

あの万年筆には和田の最後の償いの気持ちが込められていたのだ。裕貴、ワックス、綾花は息を呑んで聞いていた。

万年筆の予約で和田が自分の名前ではなく、八木和歌子名義にしたのは、升田の追跡をかわすためだったのだらう。その時は、升田が現れるなどとは考えもしなかったはずだ。

そして、万年筆を受け取った直後に、綾花の母に電話をかけたに違いない。

「彼女に何も言わずに自首すると迷惑をかけるだけです。呼び出して全てを語りました。今までの関係はなかったこと。忘れるようにと……」

綾花の母がハンカチを取り出して涙を拭いた。

公園に呼び出された時、綾花の母は何を思ったのだらうか。電話をかけてきた和田相手に、今度こそ真剣な付き合いになるのではと期待していたのではないか。娘の電話番号を書いたメモを渡すつもりでいたのではないか。

電話番号の紙を押し込んだのはこの時だらう。和田はそれを認知できなかった。

聞いて貫野が感心するかのような声が混じった息を吐いた。目の前にいる和田の考えに驚嘆したようだった。

「忘れるように……犯人隠匿の容疑を、八木さんがかけられるのではと思ったわけですか」

十一年前の事件の真相を知る和田と関係がある八木和歌子。もしこれを警察が聞いたらどう思うだらうか。

八木和歌子は夫を殺させて保険金を受け取り、同乗者の和田と関係をもった。警察はそんな疑いを持つだろう。

綾花の母が口無しであった理由がわかった。全てが和田の計算だった――

和田は貫野の質問に「そうです」とだけ応えると、フツと目を細めた。刺された傷が痛むのか、それとも刺された記憶を引き出そうとしているのか、傷を押さえた。

「話している時に升田が姿を現しました。升田は全てを知っていたでしょう。激昂して、絶対に自首させないと叫びました。闇の中で光る物が見えました。刃物だ。そう思った時には刺されていました」

忘れかけた事件を繋げる凄惨な出来事に、和田も綾花の母も混乱したはずだ。

いや、それ以上に綾花の母は升田を見て怒りを覚えたに違いない。夫を殺した男が、今度は信頼していた男を刺した。やることは決まっていたのだろう。

綾花の母が大きく息を吸った。

「許せない。殺してやりました」

感情を露わに、唇を噛み、両手を握っていた。

文目が証拠のメモを取っている。筆の動きが止まらない。

貫野はメモを覗きこむと、綾花の母を見た。

「凶器はやはり鉄パイプですか。確認ですが、殴った構えは？」

綾花の母が動きで示した。左利きの構えだ。左後頭部を殴打したというのに間違いない。虚偽発言ではないということが証明された。「升田は殴られた頭を抱えながら、私を見ました。てめえ、殺されてえのか。そうやって向かってきました。その瞬間でした。彼が……自分が刺されたナイフで、升田を刺したんです。そして私に逃げると言いました」

綾花の母はそう言うと、口を閉ざした。彼女が知る事件の情報はここで終わりだ。

全員が今度は和田を見た。事件現場に一人残った和田は、何を考
え行動したのか――

「升田が倒れるのを見た私は、まず鉄パイプの指紋を取ろうと思
いました。懷からハンカチを取り出そうとした瞬間、生温かい物に触
れました。その瞬間、終わったと感じました。不思議なものです。
その後は彼女に繋がる証拠を全て消さなくてはいけないと必死でし
た。後は刑事さんがおっしゃった通りです」

万年筆で遺書を書き、電車に飛び込み自殺して古傷を隠そうとし
た。和田の計画はそこまでは完璧だったはずだ。しかし彼は死にな
かった。

激突した瞬間、昏倒して電車の中に挟まれた。

結果、綾花の電話番号が書かれた紙が見つかり、十一年前の古傷
まで判明した。

もし、綾花がミス研部の部員でなければどうだっただろうか。和
田が死んでいたらどうだっただろうか。

貫野が小さく舌打ちをして十一朗を見た。「刑事さんがおっしゃ
った通り」と和田が言ったのは、十一朗が貫野に聴取させたことだ。
内心複雑そうな顔をしていた。

和田は傷に触れていた手を見つめると、拳を握りしめた。

「私が死ねなかったのは、天国の八木さんが許さなかった。そうい
うことでしょう。怨まれて当然のことをしたんです。死んでも償え
ない重い罪です」

和田の言葉を聞いて、綾花の母が口を開けかけた。

同時に十一朗は、それを見て立ち上がった。

「何故、悪い方にしか考えないんですか！ あなたがやったことは
確かに許されない罪だ。けれど、あなたは後悔するだけで目の前を
見ていない。顔を上げてください。今、目の前にあるのはなんです
か！」

十一朗の叫びに和田が肩を震わせた。顔を上げた和田の手に八木
親子が手を重ねた。

和田は忘れていたはずだ。周りにいた者たちの温かさと共にいた時間を――

見つめ合った三人の視線は、言葉以上の見えない心のやり取りをしていた。

二人の肌に触れた和田は穏やかな表情をしてから、十一朗を見た。その目は切迫した犯罪者の目ではなかった。

「刑事部長の息子さんと言いましたよね。十一年前、私があなたのような刑事さんを前にしていたら、私の考えも変わっていたのかもしれない。お父さんの後を継がれるのでしょうか……日本の未来も、まだまだ捨てたものではないですね」

次の世代へ――それが、あしながおじさんとして、綾花を支えてきた男の心からの想いだった。

聞いた十一朗は、自分は後を継ぐのだと改めて実感した。

その時、ワックスが身を前に乗り出した。

「綾花さんの夢は、刑事なんだそうですね！」

メール交換をしていたというワックスだ。きっと十一朗の知らないうちに、綾花といういろんな言葉を交わしていたのかもしれない。

張り詰めていた空気が変わった。止まっていた時計の針が動き出していた。

文目の筆が止まり、貫野はいつも通り深く席に腰掛けた。

「和田さん。後は取調室で語っていただけますね」

和田は首を力強く縦に振った。口無しが口無しではなくなった瞬間だった。

メモを取っていた文目も息を吐くと、それを懐にしまう。格子窓を見ながら、大きな伸びをした。

「随分と暗くなりましたね。けれど安心しました。事件発生と入電があった時にはどうなることかと……男が刺されて唸っている。自殺未遂をした男がいる。二つの事件が同時というのは、初めて聞いたことでしたし」

「文目さん、今何て言った？」

十一朗は文目の話を聞いて違和感を覚えた。貫野に聞いていたことと話が違う。

文目は不思議そうな顔をしながら、再び口を開いた。

「いや、二つの事件が同時というのは、初めて聞いたことでしたしと……」

「その前だよ。男が刺されて唸っているって、そんなこと初めて聞いたぞ！」

十一朗の叫びに貫野が立ち上がった。貫野も気づいたのだ。この事件にはまだ先がある。

「くそっ、偶然にしてはおかしいと思ったよ。和田さん、あなたが電話をかけたのは八木和歌子さんだけではないですね」

貫野の質問に和田が困惑する。しかし、それは一瞬だった。和田は目を大きく見開いた。

動いていたと思っていた時計の針は、まだ止まっていたのだ。

貫野が文目の肩を叩いて促した。すぐに文目は八木親子に病室を出るように声をかける。

十一朗も裕貴とワックスを見た。数時間前を思い出し、心臓が苦しいほど鳴り響いているのを感じた。

「この事件の犯人は和田さんでも八木さんでもない。あいつだ」

十一朗は感情を必死に抑えながら、ミス研部員全員に視線を巡らせてから告げていた。

15・網渡り

病棟を出ると、貫野が携帯電話と煙草を取り出ししていた。ジッポライターを何度も擦り、ようやく火を点ける。一服目の吐き出しは早く、すぐに煙となつて虚空に消えた。

十一朗は貫野を見て、苛立ちが行動に表れているなど感じた。

二つの事件が繋がった時、警視庁特命捜査対策室と話さなければいけない。

それを貫野は渋っていた。捜査一課は今回の事件のみで、十一年前の事件にはまだ触れていないはずだ。捜査や報告が後手に回っているという思いはあつたのだろう。

相手の反応があつたのか、

「応援がほしい。あと捜査令状の手配を頼む」と言い、貫野は話を続けていた。

この数時間で急展開が起きるとは誰も予想しなかったはずだ。十一朗も同じだった。

綾花と綾花の母については、これから来る刑事たちに送らせることが決まったようだ。和田は怪我人ということで、取り調べは後日行われるらしい。

それは真犯人がいるという情報から決めた、貫野の冷静な判断のように思えた。

貫野は地声自体が大きいので、電話の対応でもここまで聞こえる。話をつけるのを待っていると、

「あのさ、プラマイ……」

裕貴が顔を覗きこむように問いかけてきた。

「今さつき、文目さんに初めて聞いたって言ったでしょ。その意味がよく分からないんだけど」

そつえばと十一朗は思い出した。裕貴は事件が起きた夜のことを知らない。要領を得ないのは当然だ。

「そうそう、俺もいまいちよく分からないんだけど」

次にワックスも申し訳なさそうに手を挙げてから言った。

以前、電話連絡を受けて駆けつけた病室。そこで貫野が語った話に全てが隠されている。あの時はワックスも聞いていたはずだが、推理が繋がっていないようだ。

「全員で病院に行った時にさ。貫野さんが升田の死因を俺に話してくれたんだ。致命傷は最後の一突きで、傷は心臓の大動脈にまで達していたって」

「そうか、確かそんなこと言ってた」

ワックスは、ようやく記憶が蘇ってきたのか、膝を叩きながら声を上げた。

「けど、それが？」

続けての質問に十一朗は、思わず肩を落としてしまう。しかし話さないわけにもいかなないので、気を取り直して口を開いた。

「文目さんは男が刺されて唸っているって言ったろ。その二つの話って矛盾しているんだよ。升田の死因は心臓の大動脈にまで達していた一刺し。つまり即死に近い死因だ。それなのに唸っているって変じゃないか？」

裕貴とワックスが「そうか」と同時に言葉を発した。十一朗は続けた。

「目撃者が現場を見た後に、誰かが升田と争ったはずなんだ。つまり、その争った人物が升田を死に至らしめた真犯人ということ」

「その真犯人って誰？」

「ごくりと唾を飲み込んでから、裕貴が聞いてくる。ワックスは顔面蒼白状態で硬直した。

二人とも気づいたのだ。十一朗は、裕貴は自分の中にある答えの決着を聞きたいのだろうと読んだ。

「おい、奴のことはお前らの方が詳しいだろう。証言者として来い。早く車に乗れ！」

その時、貫野が十一朗たちに向かって叫んだ。頼むというより命

令口調だ。

貫野の連絡を聞いて来た、覆面パトカーも次々到着する。ここは彼らに任せておけば十分だろう。

十一朗たちは貫野たちが乗る、覆面パトカーの後部座席に乗り込んだ。

運転は文目、助手席には貫野、十一朗は裕貴とワックスに挟まれた状態だ。

「くっそ、狐につままれた気分だよ」

貫野は消した煙草を灰皿に捨てると、シートベルトを掛けた。

「犯人は警戒している可能性が高いな……海外逃亡つてこともある」
十一朗は海外と聞いて、貫野は事件の全容を大体把握しているなと感じた。車はスピードを上げていく。振り返ると、覆面パトカーが何台かついてきているのが見えた。

十一朗は話に続こうと、身を乗り出した。

「升田は和田と通じていただけじゃなかった。一億の金蔓も嘘じゃなかったんだな。それと密輸入品……何でそこで真犯人の存在に気づかなかったんだ」

真犯人が誰か知った今、後悔するのも変だが、すぐに気づかなかったのが癪でならない。

そんな十一朗を氣遣ってか、文目が軽い息を吐いてから言った。

「僕がいけないんです。聞いて初めて、致命傷と即死の違いに気づきましたから」

すると貫野が苛立った様子で、文目の頭を手帳で叩いた。

視線は前を向いたままだが、ガラスには貫野の真剣な表情がはっきりと映っていた。口では言わないが「お前だけじゃない。俺も気づかなかったんだ」と目が語っていた。

目的地が近づくにつれて、裕貴とワックスの表情が強張ってきた気がする。当たり前だ。先程まで自分たちがいた場所に戻ってきたのだから――

車は運送会社の前で停まった。退社時間を過ぎたのだろう。電気

が消えている。

降車した貫野がガラス張り手押しの扉に手を掛けるが、鍵がかかっているようで首を横に振った。

続けて十一朗も降りると、すぐに裏口に足を向けた。貫野と文目もついてくる。先に降りたはずの裕貴は立ち尽くしたまま、ワックスマも視線を向けただけでついてこなかった。

裏口から微かに明かりが見えた。中に誰がいる——真犯人はまだ帰ってはいない。

そう感じた瞬間、どっと嫌な汗が出た。いつもなら扉を叩くことが出来たはずだ。動けずにいると、貫野がガラス扉を叩きながら大声を上げた。

「もう閉めたんですか。話をしたいので、出ていただけないでしょうか」

貫野の言葉が終わるより先に、曇りガラスの向こうで人影が動いた。扉が開いて顔を出したのは、事務員の女性だった。

十一朗の顔を知っているのに驚いた顔を見ると、奥の方に声をかける。社長がいるのは確かだ。

しかし、事務員はこちらに向かってくると、扉を少し開けてから貫野に告げた。

「申し訳ありません。社長は帰ってしまったので、後日来ていただけないでしょうか」

「後日ですか。では都合のいい日は？」

「明日からは海外出張です。帰るのは一週間後だと言っていました」

「自宅の住所を教えてくださいと助かるのですが」

執拗な貫野の食い下がり、事務員は苛立った様子で睨みつけた。「それはお教えすることが出来ません。個人情報ですから。あとお名前を——」

仕方なく貫野が警察手帳を出した。途端に事務員が硬直して、目を見開いた。

「社長は中にいますね。開けてくれませんか」

ここで事務員が拒めば、犯人隠匿罪となる。

視線を落したままの事務員に扉を開けてもらった貫野は中に入った。続いて十一朗も続く。文目は裕貴とワックスを手招きして呼ぶと、二人を通してから中に入った。

「何ですか。あなたは！」

不意に覚えのある声が響いた。社長に間違いないが、会った時の雰囲気とは違うドスの利いた声だった。

「あんたを升田殺しで逮捕する」

「升田？ 誰なんですか。知らない人です。出ていかないと警察を……」

途中まで社長は言ってから口を閉じた。「逮捕する」というのは警察だけだ。

「知らない人ですか。では、事件当日に電話をかけてきた和田さんは知っていますよね」

貫野に詰め寄せられた社長は口籠りながら後退していく。

その時、何をやっていたのか文目が奥から姿を見せた。

「先輩、奥にブランド物のバッグと宝石がありました。商品番号を照会しますか」

見事な手並みだった。貫野が社長の気を引いているうちに、文目は内部観察したのだ。

本来なら令状なしで探るのは褒められた行為ではないが、相手の罪を明るみにさえすれば、誰も文句は言えない。

十一朗は社長を見た。畳み掛けるのなら今だ。今この場でとっておきの言葉を、脳内から弾き出した。

「それは企業から任された荷物ですよ。社長さんは通関士の免許も持っているから、輸入品の取り扱いにも長けていそうですし」

社長の顔色が変わり、あの高級ソファに力なく座り込んだ。後ろめたさがないのなら、こんな反応はあり得ない。

「通話履歴を調べたら、すぐに分かってしまうことですよ」

座り込んだ社長の顔を覗きこみながら貫野が言つと、唇を振るわ

せながら社長は叫んだ。

「私は悪くない。あいつは死んで当然の男だったんだ！」

社長の叫びで室内のガラスが震えた。

升田は確かに悪鬼とも呼べるような男だ。しかし、殺していい命があるのか――

十一朗は答えに迷った。その時、ワックスが社長に向かって叫んだ。

「あんた言ったよな。物がなくなるのはまだいいんだよ。けど人の命はねって！ 何で、こんなに雰囲気の良い会社を……社員まで裏切るような真似するんだよ！」

殺人が悪いとだけしか思い浮かばなかった十一朗にとって、ワックスの叫びは目が覚めたような気がした。

社長が全身を震わせて紅潮した。怒りの表情だった。

「子供に何がわかる。親父の会社を潰したくない気持ちかわかるか。従業員を首にしたくない経営者の気持ちかわかるか！」

十一朗は社長の言葉を思い出していた。

『私の居場所であり、誇りでもあるのがこの会社だからね』

自分がミス研部に感じていることと同じだ。ミス研部員が馬鹿にされたなら黙ってはられない。困ったら互いに助け合う。

従業員を首にしたくない気持ちは分かる。自分も部員が泣くのを見たくない。社長は自分と同じ被害者なのかもしれない。

文目の合図で刑事たちが入って、証拠品を捜し始めた。升田の家からも、偽ブランド品と盗難された宝石類が見つかったと貫野が言っていた。おそらく入手ルートは同じなのだろう。

肩を落としたままの社長の隣に貫野が座る。もう刑事ではなくてやくざに見えてしまう。

「全て話してくれますか」

貫野の言葉に社長は首を縦に振った。言い訳できない事実を叩きつけられて、観念した様子だった。

「升田と知り合ったのは、父が他界してからでした。経営が難航し

て赤字となり、会社を潰すことを考えなくてはいけない状況に陥りました。そんな時、升田が声を掛けてきたのです。いい話があると、いい話があるというのは升田の常套句らしい。和田も同じように持ち掛けられたと言っていた。

「ブランド品や宝石の転売の話を書きました。今思うと、私が標的にされたのは、高金利貸しから金を借りていたことにあるのかもしれない」

升田がいた組が高金利貸しの会社を設けていたのだろう。更に社長が持つ通関士の免許。升田にとって、これほどうまい餌はなかったはずだ。

偽ブランド品や盗難された宝石類は、通関士の免許を持つ社長の手で売られ、升田の資金源となった。升田が組を抜けた理由は美味しい獲物を横取りされなかったためだろう。

その収入は社長にも分け与えられたはずだ。運送会社が大きくなった理由が、悪事に手を染めたからだと思うと、十一朗は胸が痛くなった。

「会社が軌道にのると、升田は多額の金を要求し始めました。そんなことは出来ないという、今まで海外で売ってきた物が偽ブランド品や盗難品だと聞かされたんです。会社を潰すわけにはいかない。そう感じて、升田の言いなりになるしかありませんでした」

家宅搜索令状が届いたのか、捜査員たちが見つけた証拠品を段ボール箱に詰めていく。その様子を遠目で見ながら社長は息を吐き、目尻に残った涙を指で拭いた。

「従業員に多額の保険金を掛けると言われました。そして、升田は私に金に困っていそうな従業員を紹介しろと言ったんです。すぐに和田さんが思い浮かびました」

そこからは和田が病室で話した流れなのだろう。升田は輸送車襲撃事件を起こす段取りを決めてから、社長に実行の日時を報告したのだ。

升田と社長の計画通りに事は進んだ。保険は降り、社長と升田の

収入となった。八木彰夫という死亡者が出たということ以外は完璧だったはずだ。

車載カメラが壊れていたというのも、社長が仕組んだことなのだろう。

この時、配送していた積み荷はあったのだろうか――

置かれていたとしても、いつもの量ではなかったのかもしれない。人の想いを踏みにじるような犯行に、十一朗は怒りを感じて拳を握った。

「そして、更に升田に金を要求されたんですね。一億はくだらないと聞きました」

「そんな大金、渡せるわけがありません。それに一度は自首しようとしたんです。けれど升田が違う罪で捕まったと聞いて……」

社長は再び口を閉ざした。人は欲がある。そして逃げ道を探す。

その瞬間、社長は道を誤ったのだ。自首をやめ、更に私腹を肥やす道を選んだ。

「升田が姿を見せたのは数か月前です。組に金を借りたから返したい。すぐに金を用意しろと言われました。初めは十万、そして二十万、百万と増えていきました。そんな時、和田さんから、電話がかかってきたんです」

和田が電話をかけた相手は綾花の母だけではなかった。和田は社長にも迷惑をかけるかもしれないと連絡していたのだ。

「和田さんが自首したら升田が捕まります。升田の口から私の名前が出るのは確実です。そして主犯だと罪を被せられる恐れもある。

慌てて升田に連絡をし、和田さんとの待ち合わせ場所を教えました」

「綱渡りの升田が奴の異名です。それはご存知でしたか」

貫野の質問に社長は「はい」と力ない声を出してから伏せた。

「升田が何をするのか……何となくわかってはいました。けれど、私にはこうするしかなかった。遠くで一部始終を見守ることしか……」

社長の目の前で事件は起きた。突然、升田が和田を刺したのだ。

それを見た綾花の母が升田の後頭部を一撃した。その時、升田は二人を殺そうとしていたに違いない。

壮絶な現場を前に、社長は震え上がったことだろう。

無関係の綾花の母まで巻き込む事態に発展してしまったのだから、その綾花の母に升田が攻撃を加えようとした時、和田が刺し返した。社長は一通り語ると黙ってしまった。自分が升田にとどめを刺したことを思い出すのも嫌なのだろう。

話さなくても想像は出来るが、証言にはならない。十一朗は自分の中でたてた推理を社長に語ることにした。

「和田さんが現場を離れるのを見て、あなたは刺された升田を見た。そうですね」

社長は首を縦に振って応えた。このまま語るのを待つては埒が明かない。十一朗は更に続けた。

「その時、升田は死んではいなかった。見たあなたはいろいろと考えた。違いますか？」

「助ける。救急車を呼べ。命令口調で言われました。その瞬間、何故、こんな男を助けなければいけないのかと思ったんです。落ちていた刃物を拾いました」

誘導尋問になっても困るので、十一朗は社長が語り始めたところでとめる。

貫野は十一朗を観察するかのように、じっと見続けていた。

「刃物を振りおろした瞬間、升田が私の腕を掴みました。力比べのようになつて……」

社長の証言と升田の死因が一致した。

信じていた相手の裏切りで、升田は怒りの形相のまま死に至ったのだ。社長が致命傷に近い升田相手に手こずったのは、テニスの筋肉痛のせいだろう。

現場に残されていた血糊を拭き取った跡も、社長が自分の足跡を消したからだ。ハイヒールかかとの踵の痕が残されていたのも偶然ではない。綾花の母に罪を被せる偽装工作だった。

更に社長が得をしたのは、升田にとどめを刺した者を勘違いしていた和田と綾花の母の存在だろう。二人が互いを気遣って真相を黙秘し、自分の罪だと認めることで、真犯人である社長は罪を逃れた。「仕方がなかった。升田は死んでもいい悪人だった。あいつは胸を逸らしながら、何人も騙してきたと誇らしげに語っていた。懲役刑だけで済んでいることを誇りにさえしていた。私は悪くない。人として当然のことはしたんだ」

社長ははつきりと言い放った。升田は死んでもいい悪人。それを否定することは出来なかった。

しかし瞬間、十一朗の記憶から、八木親子が抱き合って泣く姿が引き出された。

「その身勝手な考えで、他の人がどれだけ辛い思いをしたと思っ
ているんだ！」

黙っていられなかった。

会社を潰したくないがために無関係の人間を巻き込んだ。社長にはその罪がある。

家族を想う和田の心につけ込み、襲撃事件では八木彰夫が巻き込まれて命を落とした。

大切な者を亡くした八木親子と、罪を清算しようと償い続けた和田。その裏で、社長は罪から逃れ、密輸入や盗難品を海外に売り飛ばしながら会社を大きくしていたのだ。

十一朗の叫びで、ようやく自分の罪の重さに気づいたのか、社長は伏せて嗚咽を漏らした。

何度も「すまない。すまない」と連呼する姿は、先程の和田を思い出させた。

綱渡りの升田は、呼ばれた通りの男だった。

右には輸送会社社長、左には和田繁樹。二人を騙して両者から金を奪い取ろうとした。そして綱から落ちたのだ。右側に――

他の刑事に促された社長が立ち上がる。今日は取調室で遅くまで話すことになるだろう。

あの時、自分たちと接してくれた社長の気遣いは演技だったのだろうか。自分たちを騙す誘導証言だったのではないか。十一郎はそう思いながらも信じたくはないと感じた。

「社長さん。高い落雁^{らくがん}、ご馳走さまでした！」

その時、予想もしなかった声が上がった。声の主は裕貴だった。振り返った社長の目から涙が溢れた。社長と共に事務員にも声がかかる。偽ブランドや盗難品だと知っていたかの確認だろう。

覆面パトカーに乘せられる二人を見つめながら、十一郎は虚しい気持ちになった。

悪事の元凶である升田龍治は死に、逮捕されたのは元を辿れば被害者たちだ。人は弱みにつけこまれたら、どこまでも落ちていく。弱くも強くもなれる人間の姿が表面化されたような事件だった。真犯人を乗せた覆面パトカーが見えなくなるまで、十一郎と裕貴、ワックスは見送り続けた。

家宅搜索が続く輸送会社を背に物思いに耽っていると、突然、誰かに頭を鷲掴みされた。振り返ると、貫野だった。

「飯食いに行くから、ちょっと付き合え。寿司でも焼き肉でも構わないからよ。今日は飲みたい気分だしな……」

高校生の自分たちを誘って、酒を飲む刑事もどうかと思うが、そこは貫野らしい。

現場を去ろうとすると、一人の刑事に敬礼をされた。この前、言葉を交わした刑事だ。

対応に少し困ったが、十一郎も敬礼で応えた。直後に貫野にまた頭を鷲掴みにされた。一人前と認められたようで実は違うらしい。それを見ながら文目が笑みを浮かべて、車のキーを取り出していた。

「先輩、まだ主任になってないですけど……彼らに奢っていいんですか？」

十一郎が、これ絶対に殴られるかと確信したと同時に、貫野の渾身の右手刀が文目の脳天に叩きこまれていた。

00・エピローグ

覆面パトカーに乗って外食に向かうのは、刑事になってから経験することだと思っていた。

食費は捜査費から出るらしい。十一朗が事件解決をしたお礼金といったところだ。貫野が給料から出すのではないかと思っていた十一朗は、心配して損したと感じた。

食べるのは全員一致で「焼き肉」に決定した。

文目の運転で貫野がよく知るといいう焼き肉店に向かう。聴きこみで駆け回る一課の刑事には、うまい飯の店舗情報網もあるのかもしれない。

到着した店の看板には直売肉仕入れ店、炭火焼、国産とあった。店頭で美味そうと思わせるのが、常連客を引き寄せる秘訣なのだろう。店内に入ると肉が焼けた香りと音で思わず生唾が出た。

席に座ると同時に店員が水を持ってくる。メニューを渡された貫野は先日と同じように十一朗たちに投げ渡した。

「取り敢えずビール」

すかさず店員に注文する。飲むのは冗談なのかと思っていたが、本気だったらしい。

渡されたメニューを見ると、いい値段だ。お金は足りるのだろうかとか心配してしまった。

「和田は情状酌量の余地ありだろうな。八木和歌子は正当防衛になるか。犯人隠匿があるかどうかとは思うが……」

貫野がぼつりと十一朗を見て言う。意見を求めているということだろう。

刑事も人間だ。真実を知った今、和田と綾花の母に同情しているのだろう。

二人をどうにかできないか——助け船を出されているような気がした。

「その犯人隠匿ってさ。彼の意見を尊重して、そうしたんだと八木和歌子が言えはどうか？」

答えると貫野は目を丸くした。断言じゃなく疑問形か。とても言いたいのもشれない。

十一朗は水を一口すると、皆の視線を窺いながら口を開いた。

「そう弁護士さんに聞いたら、どうかなってこと」

途端に貫野が飲みかけていた水を吹き出しかけた。遠回しな言い方でも感づくところがあつたのだらう。軽く噎せながら十一朗を睨みつけた。

「おかしいだろ今は……何で俺の親父が専属弁護士みたいになつてんだ」

「そのつもりだと思つていたよ。貫野さん、いい人だからさ」

「こういう時だけ褒めんじゃねえ」

言つて貫野は立ち上がった。突然の行動に文目が驚いて聞く。

「先輩、どこ行くんですか」

「小便だよ」

常識的に考えると、食事する場所では言わないだらう。そのまま奥に行つてしまった。

裕貴は呆れた息を吐き、ワックスは水を飲んでから軽く笑つた。

「初対面の時は怖かつたけど、あの人からかうと面白いよな」

面白いというよりも、単純でわかりやすい性格が正解だと十一朗は思う。褒めたら何かしらのアクションがあると考えていた。それが思つた以上の成果を挙げてくれたようだ。

「文目さん、今回の事件で一番の口無しつて貫野さんだよな？」

貫野がいなくなったのを見て、十一朗は質問した。文目が慌てて取り繕うとするが、その動きが不自然で笑いそうになつた。

「本人が言つつもりがないのなら仕方ないけど……主任になれないつて聞いたからさ」

「え、貫野さん。主任になれそうだったの？」

そつえば、裕貴とワックスには話していない。失言だつたかな

と少し反省した。

文目は貫野が消えた方を確認してから、十一朗に顔を近づけてきた。

「独断行動ですからね。けれど本人は気にしていませんよ。先輩は出世に関しては無欲ですから。出世を気にし始めたのは十一朗君と会ってからなんです」

「俺に会ってから？」

「巡査長と言われたこと、かなり気にしたみたいですよ。それに十一朗君は刑事になるって言いましたし、かなり意識しているようで十一朗は思い出した。そういえば俵井に「まっとうな刑事じゃない」と言っていたっけ。

よく考えると、出世とやぐざ刑事は矛盾しているのだ。独断行動をしてくれていたのも理由を聞くと納得する。

いつの間にか注文してきた肉をワックスが焼き始めている。遠慮がないと考えていると、その一枚を文目が取って食べた。

奢ってもらうか捜査の礼金としてなのか、まだ微妙なので文句はいえない。既にワックスは気を取り直して違う肉を焼いていた。

そこに貫野が戻ってきた。手元に携帯電話と持っているところを見ると、誰かと話してきたらしい。気になったが、敢えて口には出さなかった。

置かれていたビールを手にした貫野は、一気飲みで半分ほど中身を減らす。食べるのも早いが、飲むのも同等のようだ。

ワックスの隣で裕貴も肉ではなく野菜を焼き始めている。二人が焼き肉奉行だと初めて知った。

代わりに貫野と文目は食べるのと飲むのが専門なのだろう。貫野はつまみの枝豆を口に入れてから、十一朗を見た。

「お前よ。くちなしの花って曲知ってるか？」

唐突に語り始めた貫野の前に、皆が目を合わせた。十一朗は父さんが母さんの前で歌って怒られた曲だと歌詞を思い出した。

『くちなしの花』。『口無し』和田のことを貫野は言っているのだ。

「そのまま、和田のことを言っているような気がしてよ」

貫野が珍しく感傷的になっているのは酔っているからだだろうか。顔は赤くないが、耳が赤くなっている。

前では肉の獲得戦争が始まっていた。十一朗も負けじと野菜を口に入れてから、肉を確保した。

「小さな幸せだから気づかなかったってこと？ 和田は捨てられなかった方だと思うけど…… 幸せを第一にし過ぎて、道を間違えた感じはするけどさ」

「お前、高校生のくせに話にのるんじゃないよ。何歳だかわからなくなるだろうが！」

話を始めたのは貫野なのに、ジョッキを片手に滅茶苦茶なことを言う。

完全に酔いは始めているな——面倒だなと思いながら、十一朗はウーロン茶を口にしてから、「父さんの十八番おはじだから」と付け加えた。

さすがにその状況を文目は危険と感じ取ったのか、貫野の肩を叩いて立ち上がった。

「先輩、送ります。皆さん、高校生なので遅くならないうちに帰ってくださいね。お金はここに置いていきますので」

テーブルの上に封筒が置かれる。ワックスが中身を見て注文を追加したところを見ると、予想以上の金額が入っているらしい。

遠慮していたのだろう。二人が出て行くのを確認した、裕貴もメニューを取って選び始めた。開いたのはサイドメニューのページだ。「二人には悪いことしちゃった気がするね。特命さんとうまくいかな。心配……」

「それが刑事の仕事だから仕方がないよ……とは言っても、かなり気を遣ってくれていたみたいなんだよな」

「かなりって、どういうこと？」

小首を傾げた裕貴が店員を呼ぶ。十一朗はコップを空にしてから、テーブル端に置いた。

「親父が教えてくれたんだけどさ。貫野さん、頭を下げに来たらしいんだ。息子さんを、どうか認めてやってくださいって」

「嘘！　じゃなくて、本当って言わなきゃ駄目だったわけ。それって本当？」

「俺が小学生の時、犯人を捕まえたことあったろ。貫野さん、その話を鑑識さんから聞いてさ。なんか、それからいろいろ考えてくれたみたいだな」

貫野の態度が急変したのは、父との関係を気にしてくれたからだろうと十一朗は思う。

自分と似た境遇と取られたのだろう。貫野は父の跡を継がないで刑事になった身だ。

だから、刑事が夢ではないという十一朗を見て、感じるものがあったのではないか。

「貫野さんが親父と話をしてなければ、俺の進路も変わってなかったかもしれないと思ってさ」

口無し事件は十一朗にとっても、精神的に成長できた事件でもあった。

父と真つ正面からぶつかって互いの意思を確認できた。

人は唯一話することができる動物だ。それなのに何故、今まで父と語り合わなかったのだろうと思う。

『口無し』という事件名は被疑者だけではなく、自分たちも当てはまっていたのかもしれない。

「人間ってさ、語りたくない過去や秘め事を持っているものなんだよな。今回の口無し事件では、そんなことを考えさせられたよ」

和田と綾花の母の繋がりを強めたのも、真実を語る時間があったからだ。

そして、事件の真相を語ることで、真犯人の存在も発覚した。

もし和田が綾花の母を庇い『口無し』であり続けていたらと考えるとぞつとする。

「人って、全員が『口無し』なのかもしれないね」

裕貴が締めるように続いた。

前ではワックスが黙々と肉を焼いては食べている。勘定は大丈夫なのだろうか。

十一朗は心配になって文目が置いていった袋を取った。お札にしては少し重い気がする。中身を見ると、お札だけではなく手紙が入っていた。

ワックスも見たはずなのだが、手紙は興味の対象には入らなかったのだろう。手紙を取り出して開くと、一文だけ書かれていた。

『少年よ大志を抱け』

ありきたりの文章を書いたなど、少し呆れてしまったが貫野なりの気遣いなのだろう。

「あの人らしいと言ったらしいけど……わざわざ紙に書くことかよ」

「プラマイ、貫野さん相手に正直になればいいのに。いつも喧嘩ばかり」

裕貴が思いがけない発言をしてくる。

秘め事って、貫野さん相手に対してじゃないんだけどな。十一朗は思わず息を吐いた。

会話をしながらの食事ですぐにお腹もいっぱいになってくる。携帯を取り出して時間を見ると、九時を過ぎていた。

ワックスと裕貴も携帯を取り出してメールの確認をしている。不意にワックスが妙な笑みを浮かべた。

「ワックス、メールに何かあったのか？」

聞いた途端、ワックスが首を横に振る。様子がおかしい。

「ワックスね。あれから頻繁に八木さんとメール交換しているんだよ」

裕貴の通報で事件が発覚した。こつちも『口無し』だったか。

思えば、綾花の夢は刑事と知っていることが不思議だったのだ。ある程度、二人は進展したのかもしれないと感じた。

「それ、プラマイに言うことかよ。ライバルなのかもしれないのに

さ！」

慌てて叫んだワックス相手に、目を丸くした裕貴と同じく、十一郎も啞然としてしまう。

「その心配はないんじゃない。プラマイにはその気ないし。それに八木さんはワックスのこと、いい人ですねって言ってたよ」

「どうやら裕貴は『口無し』ではないらしい。暴露しすぎていて幼馴染みとして怖すぎる。」

裕貴には内緒話はないどころと、十一郎は改めて固く誓った。帰り支度が終わると、十一郎が代表して勘定した。お釣りが幾らか残ったが、これは今いない綾花に何かプレゼントすることで使おうと思う。

彼女が一番、苦しい想いをして事件にあたっていたはずなのだ。その時、携帯に反応があった。相手を見ると綾花の携帯だった。

『今日ありがとうございます。ミス研部の一員で私は幸せです。明日も行きますので、よろしくお願いします』

先程のワックスのメールの直後に打ち込んだものだろう。裕貴に教わって身に付けた打ち込みを披露してから、綾花に送信した。

「ねえ、八木さんから？ 何てメッセージで、何て送ったの？」

「何で裕貴に教えなきゃいけないんだよ。別に隠すこともないし見せてもいいけどさ」

裕貴に見せると「ふーん」と言って、今度は興味がなさそうな返事をする。

何が知リたかったというのだろうか。

最近の裕貴の言動は首を傾げる部分がある。変にワックスと綾花を繋げようとするし、機嫌が悪くなったかと思えば大和撫子と呼べと言ったり、訳がわからない。

「三島さん、プラマイ相手に正直になればいいのに。いつも喧嘩ばかり」

突然、ワックスが気味の悪い動作をしながら、妙なことを言った。鳥肌が立って身震いしてしまう。

馬鹿騒ぎをしながら追いかけてこを始めた二人を見て、十一朗は思わず息を吐いてしまった。

見ると携帯には他のメールがあった。母からだ。

『お父さんに全部話を聞いたわ。ちゃんとみんなを送ってから、気をつけて帰ってきなさいね』

それは少し大人になった子供に対してのメッセージだ。

進路がはっきりしたことで、母も安心したのだろう。

学生生活も残りわずか。ミス研部から離れなくてはいけない時は必ずやってくる。

それでもミス研部員は家族同然の仲間だ。互いの心を大切に認識し合いながら、仲良くやっていける自信がある。

空を見ると、無数の星が悩んでいた時とは違うメッセージを語りかけてきた。

遠くでは明日の部室の掃除係をかけて、競争がはじまったらしい。

十一朗は二人に負けまいと、思いつきり地面を蹴って駆けた。

仲間とともに楽しめる時間を少ないとは思わないでおこう。貴重な時間と思って過ごしていこう。

そう心の中で考えて十一朗は全力疾走を続ける――

00・エピソード（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

楽しい時間を過ごすことができた、そういつていただける作品にな
っていたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8921v/>

十一ミス研推理録2 ～口無し～

2011年12月3日19時59分発行